

イラスト／土器手司

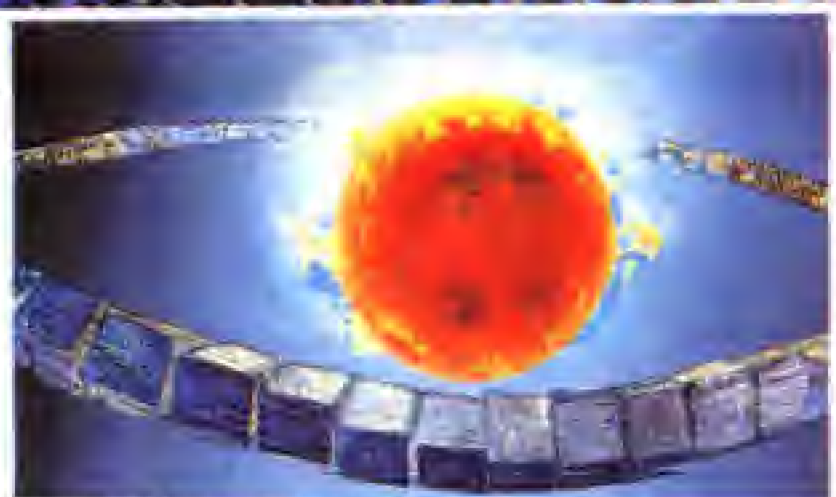


NEURO HARD
蜂の惑星

航空暦2年・人類史暦2300年・地球暦4万2015年、スターシーダーに乗って、外宇宙へ旅立った移動惑星フレマ・ヒュトン（同一時間面星は？）は目的地 ヒューストン5番星に到着しようとしていた。スペクトル測定の結果 生命活動があるのではないかと思われる自然発生し難い物質が出ていたし望遠探査でもかなり高度な結界（重力障壁）がはられていて表面探査できなかった事もあり、コンタクトの期待も高まっていた。



■強いて言えば主人公にあたるのが、このマルチナ・リュード。ヘクタ・クラン（人類亜系）のハイブリッドで、フレマ・ヒュトン先遣隊の一員である。
■肩の蜂は先遣隊千人がヒューストン5番星でファーストコンタクトする高度知的生命体の中の友好的な？1匹でマルチナがローズと名付けたキャラクター。
■下はヒューストン5番星に先行着陸する為に軌道に接近しつつある探査プローブを、フレマ第1観測ブリッジの大望遠鏡がとらえた映像。送られてきたデータではまるでヘクタ・クランの為に用意された様な環境フォームを持つ理想的な星である。



左はフレマ・ヒュトンの概念図。実際のサイズ・距離とは異なる。ガス・ジャイアントから「連星式設置をした量子ブラックホール」で汲み上げられたガスの楕円環から、ブラックホールをぬいて芯をいれて点火して作った人工太陽がヒュトンである。実にムダなシステムの様だが、ホームシックテロの発生率が高いせいで採用された。フレマは自・公転するラセンコロニーで、約80万人が生活している。笑…。

各種条件を満たす最小の太陽サイズは…!?（多少赤くても仕方ないか…）



これはブリッジと呼ばれる議員会館内の絵。モニターに5番星の映像が出て拍手がおこった瞬間。

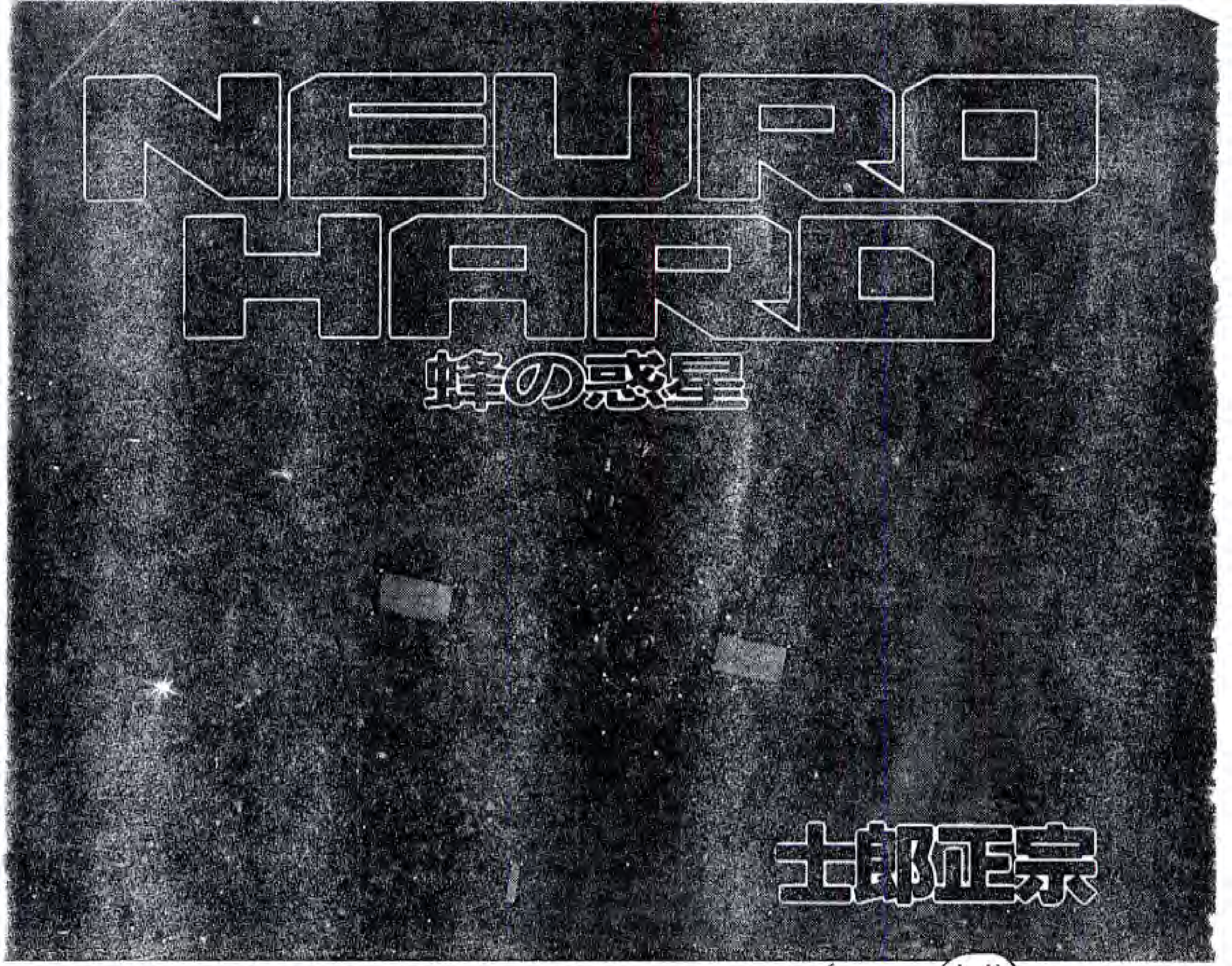
その後のバカ騒ぎ

先遣隊にとってはこれは送別パーティも兼ねている。

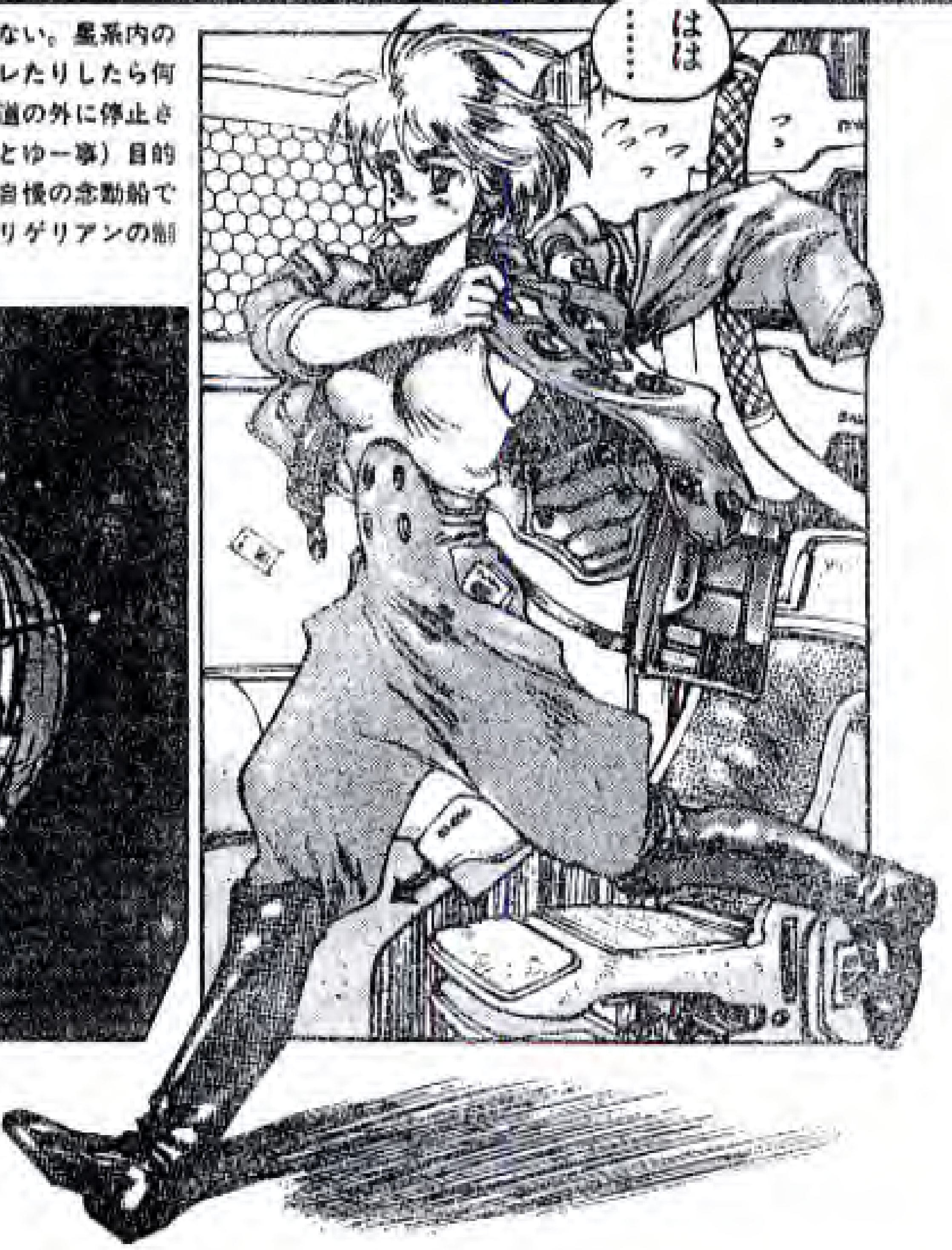


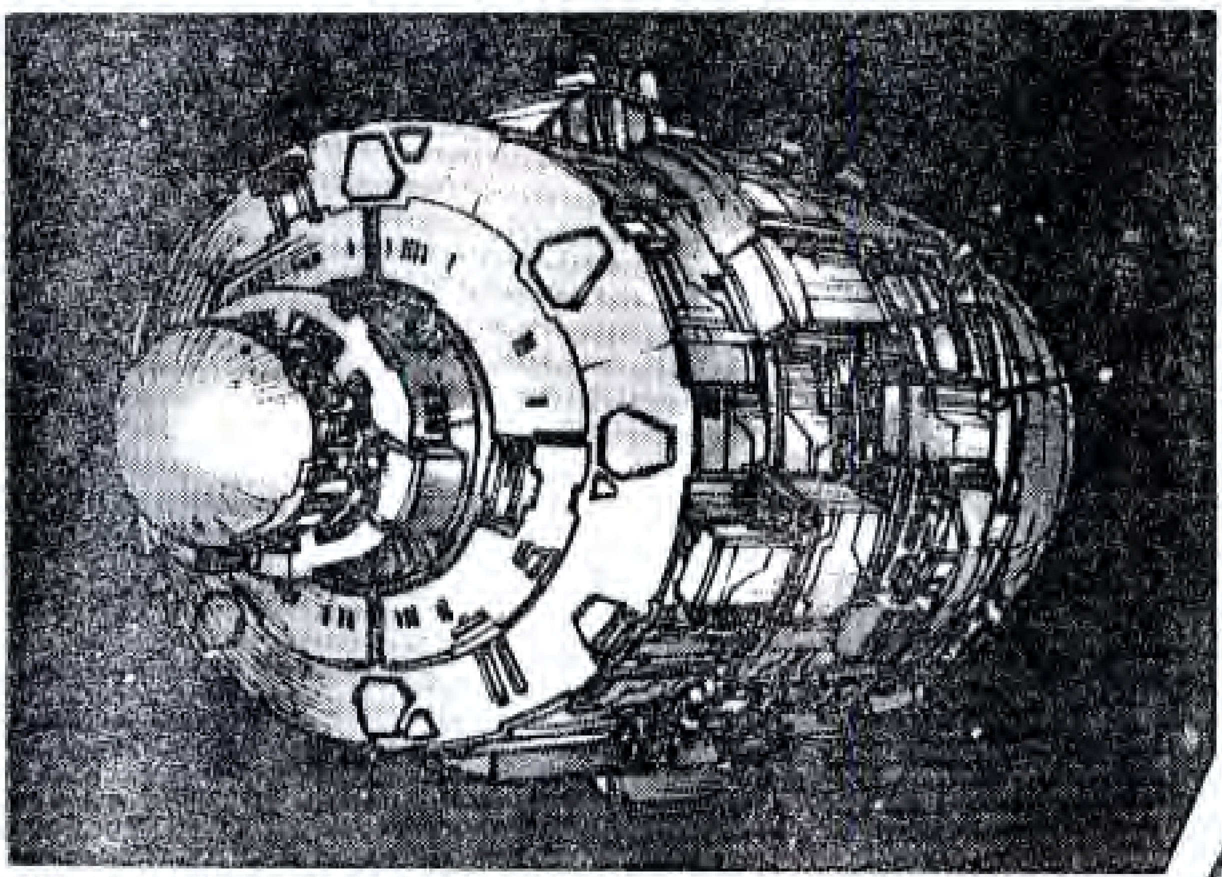
次号より、こんな調子で、未確認遭遇・商品流出ひかえめの生事コンテ ニューロハード連載スタート!! コミックじゃなくてナンだけどよろしくねっっ!! ちなみに各種設定は科学的考証より面白さ・愉さを優先します。

MASAMUNE SHIROW



機動惑星フレマ・ヒュトンをヒューストン星系軌道内へ入れる事はできない。星系内の７個の惑星に影響が及び　火山が噴火したり大洪水が起きたり軌道がズレたりしたら何の為にはるばる飛んできたかわからんからだ。そこでヒュトンを公転軌道の外に停止させ（どうやって？）そこから内宇宙船でゆっくり（相対耐高速より遅いとゆー事）目的地である第５惑星に向かうワケだ。内宇宙船（上・下図）はソラリアン自慢の念動船で光速の６０％までが現在可能とされている。(それ以上は船体を維持するリゲリアンの制重力場装置とのバランスを保てず　ぶっ壊れてしまうからである)

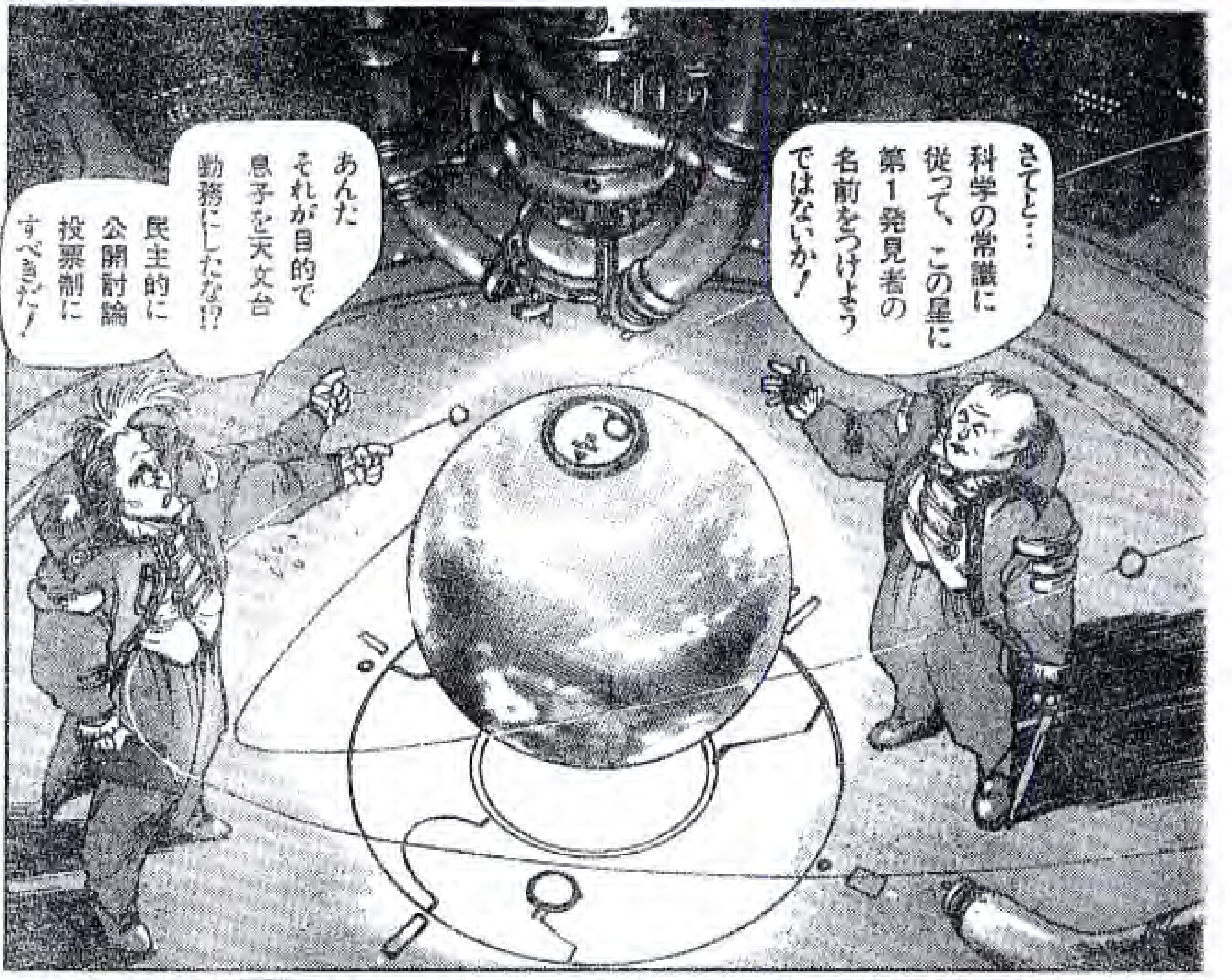


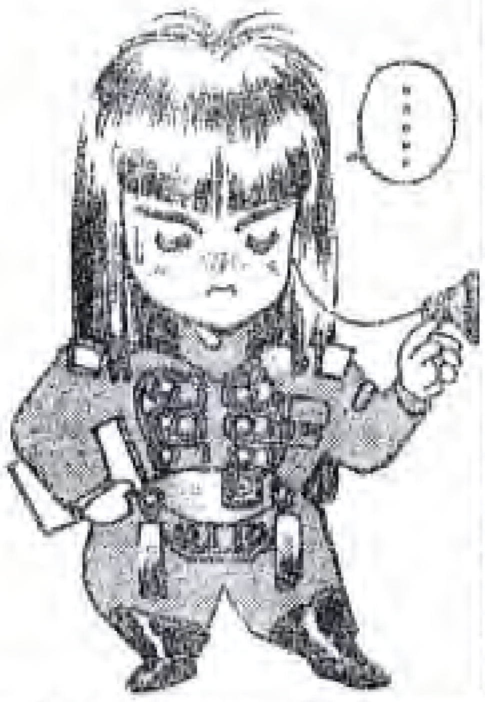


念動シャトル「TOUCH　ME　NOT」(ホウセンカ)号。進行方向に重力レンズを応用した界面シールドを５層はっている。内宇宙は外宇宙と違って微粒子や小隕石が多く危険だからである。

■これはホログラフではなく、異様な部屋の中央に黒い球面モニターがあるのだと思って頂きたい。フレマ第一天文観測所の一室にも同じ部屋があるが　これはホウセンカ号のまだ稼働していないブリッジである。

■2人の人物は役員会のメインスタッフで　クラムト氏とキンドルウ氏



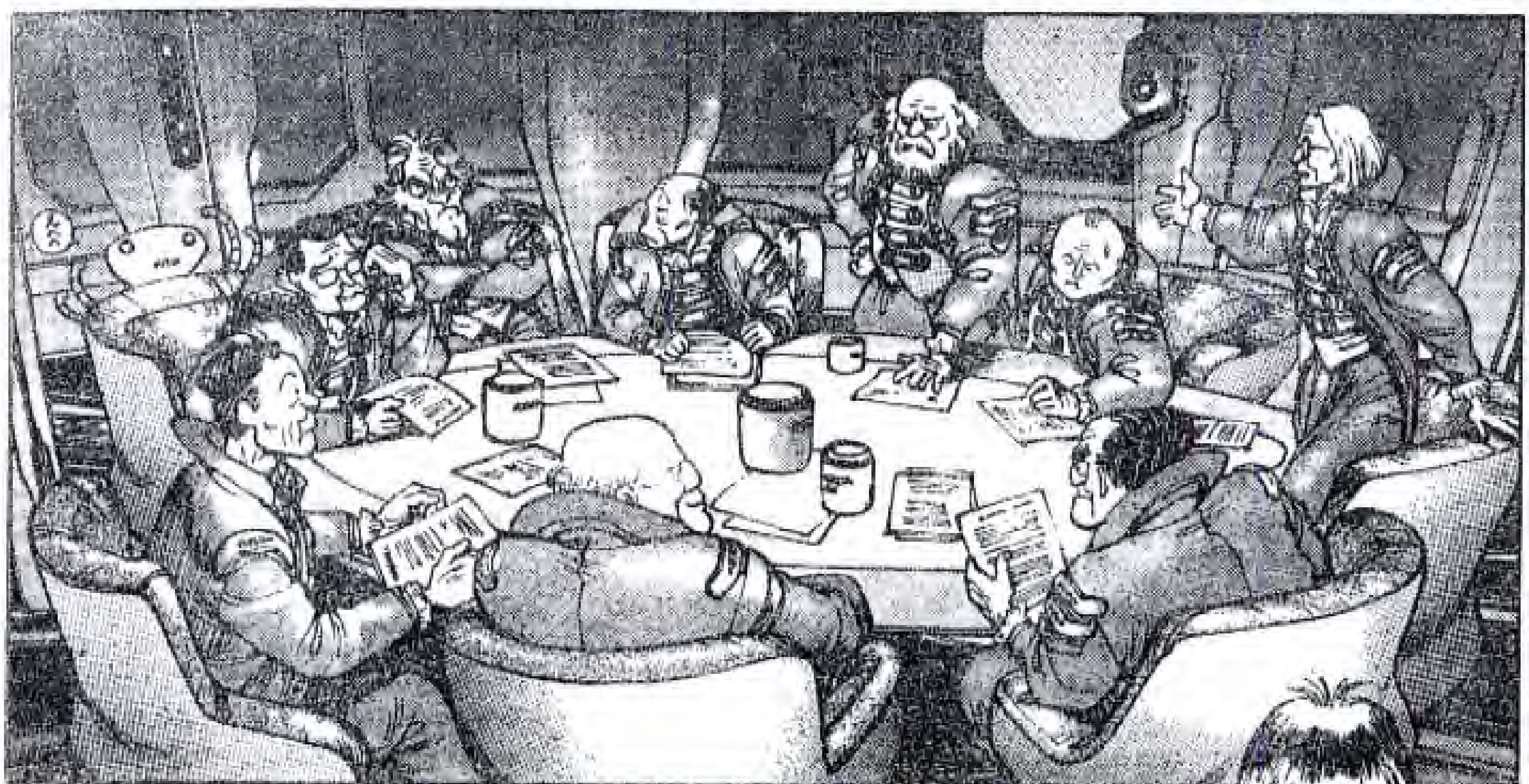




■2人はかつて仲の良い親友だったのだが　今彼らが着ている服装のデザインをキンドルウさんがした時、(多芸というかヘンな人というか…) クラムトさんがこれを評して「誇大妄想の道化服だ」と言ったとか言わなかったとか…　それ以来　なんとなくこの様にギクシャクするのである。(対立してるとゆう程の事ではないが)

ホウセンカ号の制重力場面シールドの様子。実際は40万km前方で張る。

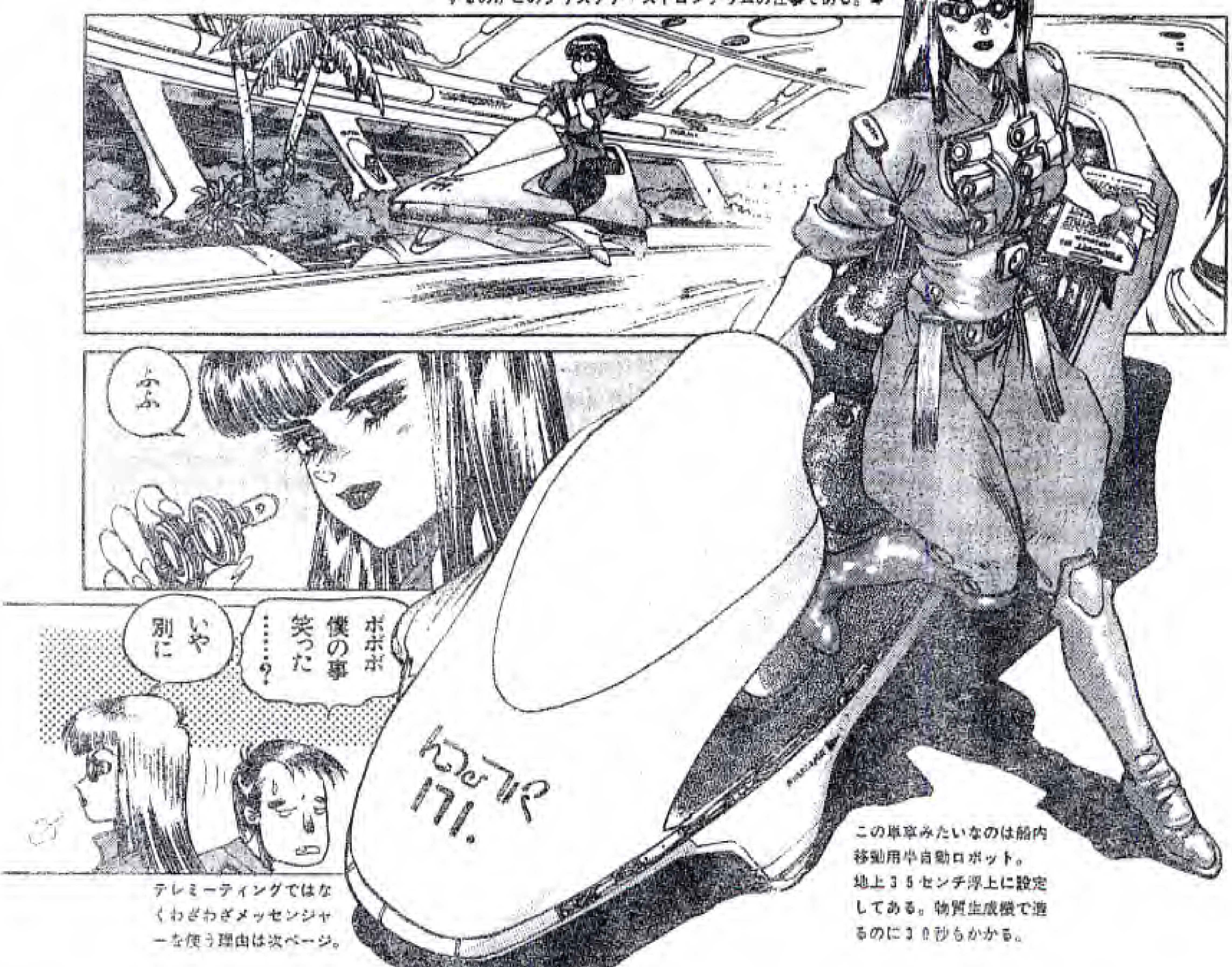




これはメインスタッフ全員による定例議会。ファーストデッキで行われている。中央の人が船長のモストーナさん。

コマ左に見えるタコチューみたいなのはクリスチナの船外用一通信中継メカ。

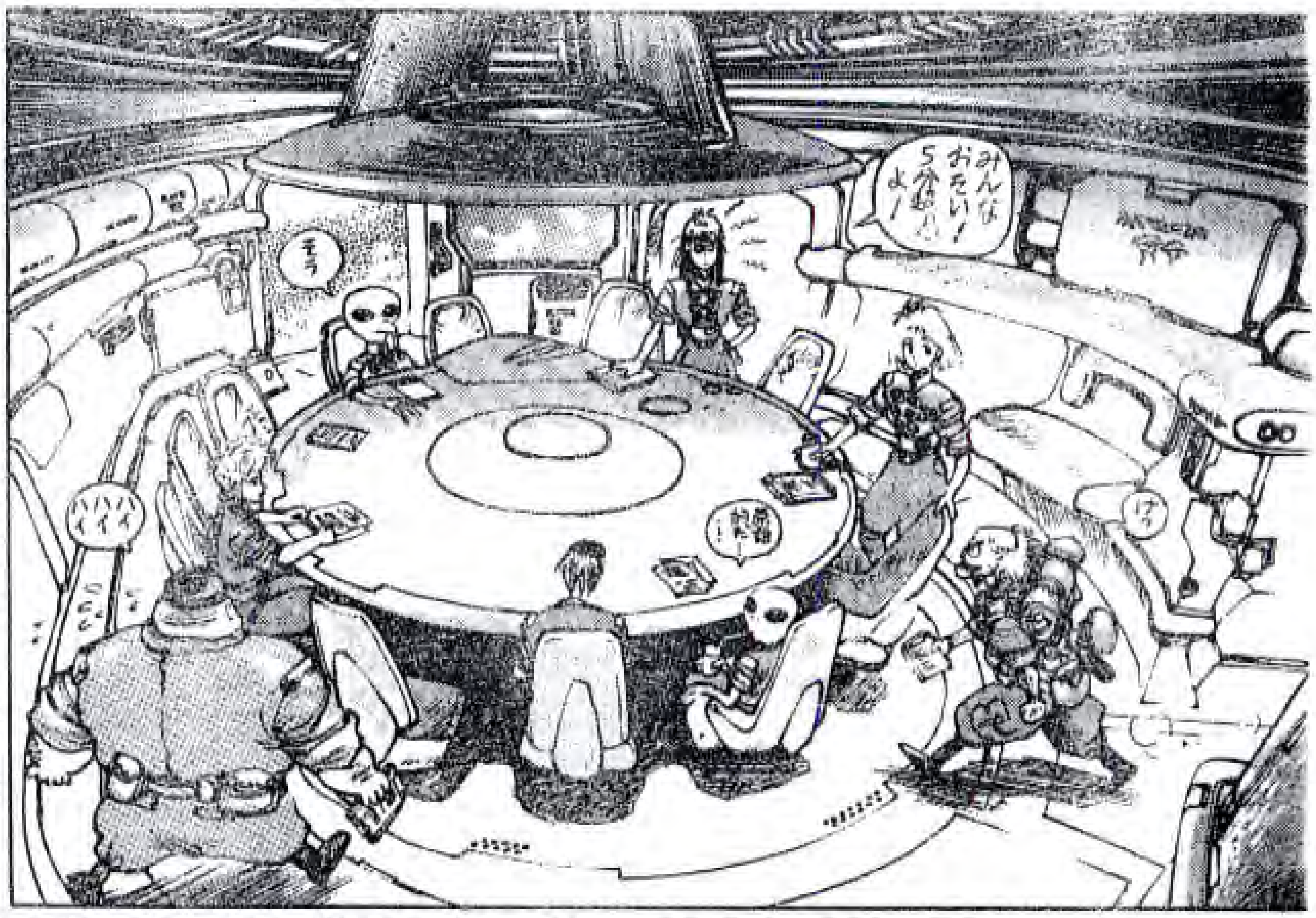
その役員会の決議・伝達事項等をブリッジのクルー達に通達するのがこのクリスチナ・ストロンチウムの仕事である。➡



テレミーティングではなくわざわざメッセンジャーを使う理由は次ページ。

この単車みたいなのは船内移動用半自動ロボット。地上35センチ浮上に設定してある。物質生成機で造るのに30秒もかかる。

テレミーティングしないのは　１ツにはフルコンタクトの話し合いをする為と、もう１つはチャンネルを留守又はダミーにしてサボるのを防ぐ為である。定期的に動く事で生活リズムもとれるし気分転換にもなるのでこの方式を採用している





彼らはホウセンカ号のブリッジクルーである。惑星圏内のドライブ（惑星降下・着陸・移動・上昇離脱）が専門で、船が惑星圏内に入るまでのオートドライブ時と船が惑星に着陸した後は特に決められた仕事がない、いわばナンデモ屋となるメンバーである。つい３週間前までは経済性優先とゆう事でファイリングされていた。生成されてから10日ぐらいは宇宙総意識にふれたとか生命は連なっているだとか宗教めいた事を言っていたが（皆そうなる）今ではすっかり只の凡俗に戻った様だ。※

※ファイル生成については８ページ目を参照。

他の班でも同様の通達が行われている。医療部では思考通信で仲間や通信系では電脳通信を採用している。







●上のコマのじーさんはゲッペル氏



マルチナ嬢





バストン
自称おケラ

ニッキ
自称霊能者



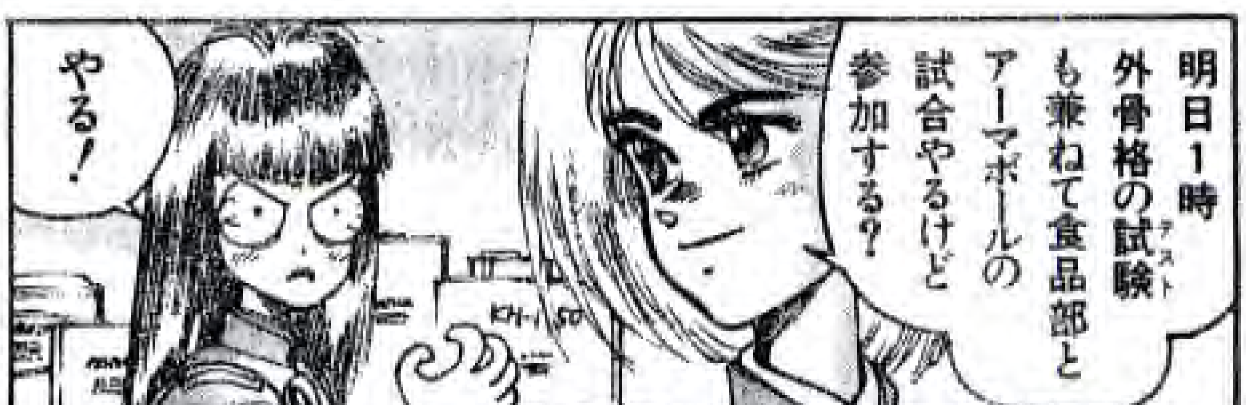
とゆうふうに毎朝9時から15分程ミーティングを行い予定を組んでいくのである。



疑似人格で味つけされた通信部一管理ＡＩのケルブさん。本当は電脳会話。



アーマボールとは外骨格で武装した10人のチームが２組で行うゲームで、ボールを相手チームのゴールにセットする事で得点する競技。フルコンタクトの格闘を含んでいる。サービス３・ディフェンス（又はブレイク）３の６回１ゲームを５ゲーム行い勝敗を決める。これだけで１話できそうだが　ここでは設定だけにしておく。ちなみに食品部とのカードは　４－２，３－３，３－３，４－２，５－１で航宙部一船橋班が勝った。



下図の外骨格がアームドスーツ。目玉は両腕の多機能収納腕。

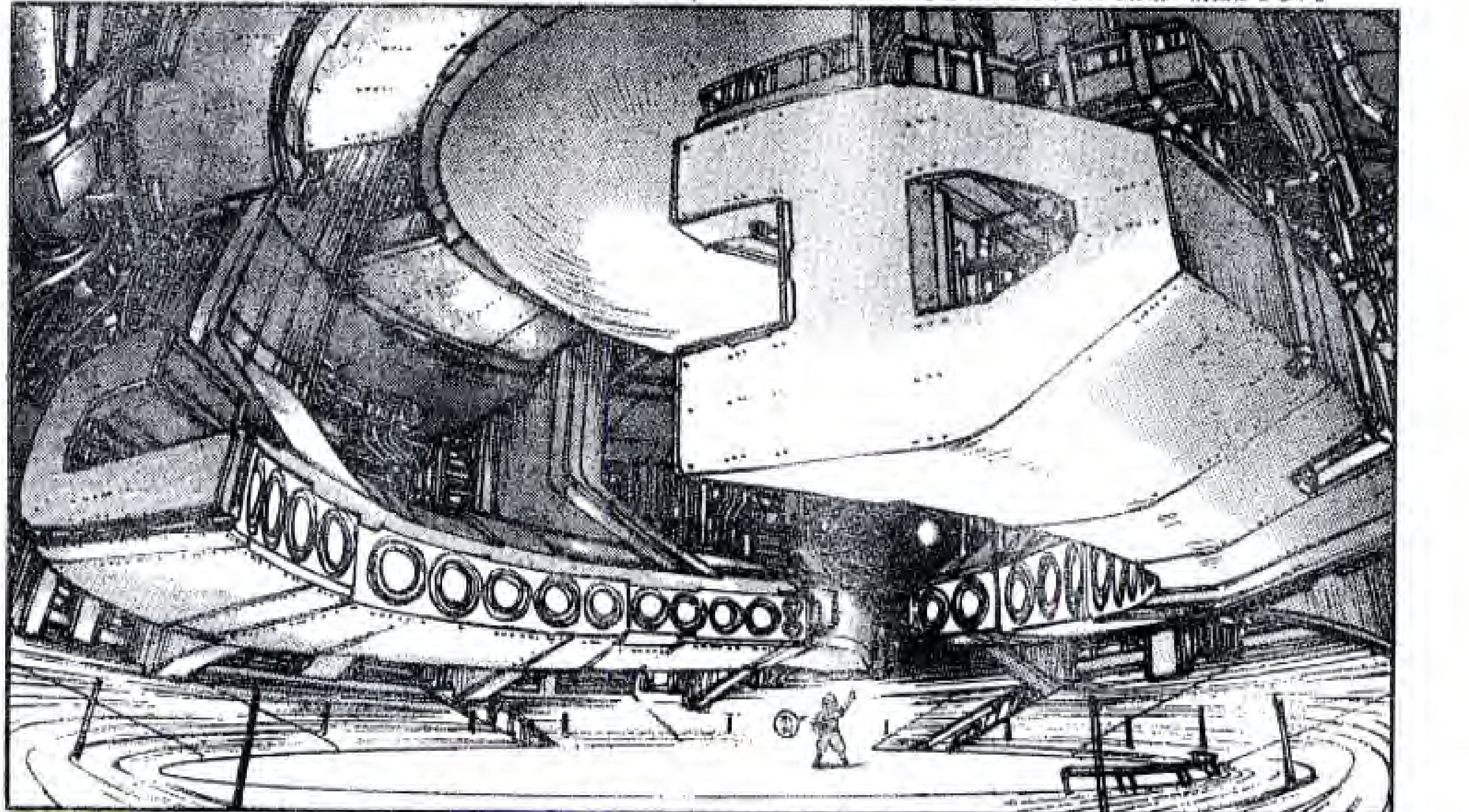




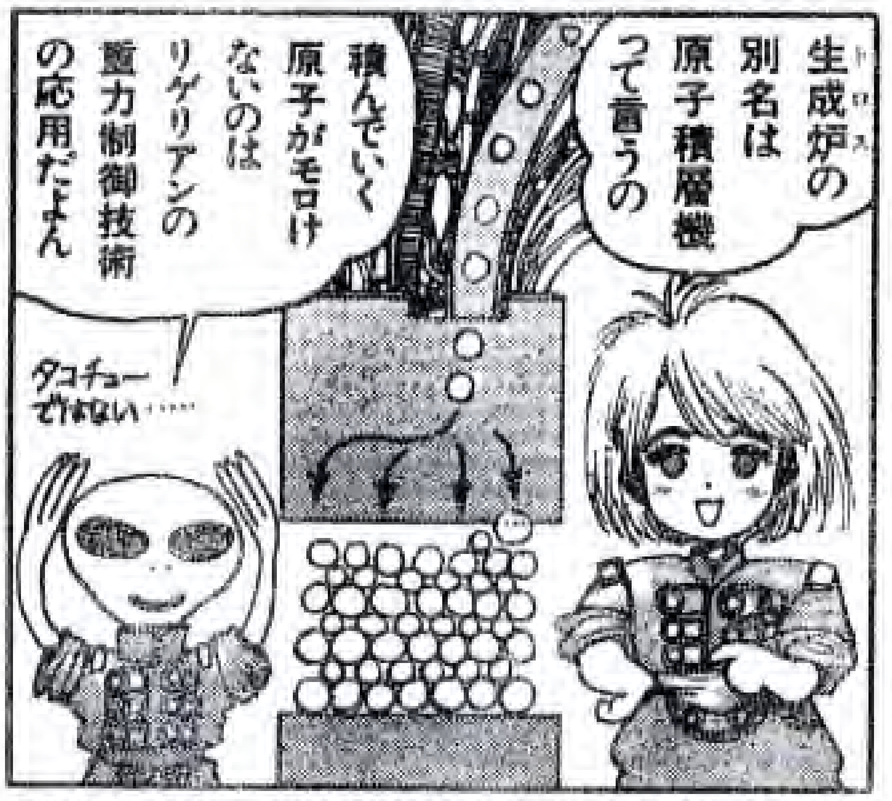
この後クリちゃんが全身筋肉痛で医療部を訪れた事はクルーには内緒であーる。

★ゲームの事をよく知らない

物質生成器とは原材料である大量の原子のストックから任意の原子を選び、高速で並べて積み上げてゆき物質を創出するメカである。基本データは実物をモデルにして走査、分解、記憶　又は加工・時には設計してファイルしておく。モデルはコピーをとられるだけなので分解・消滅はしない。



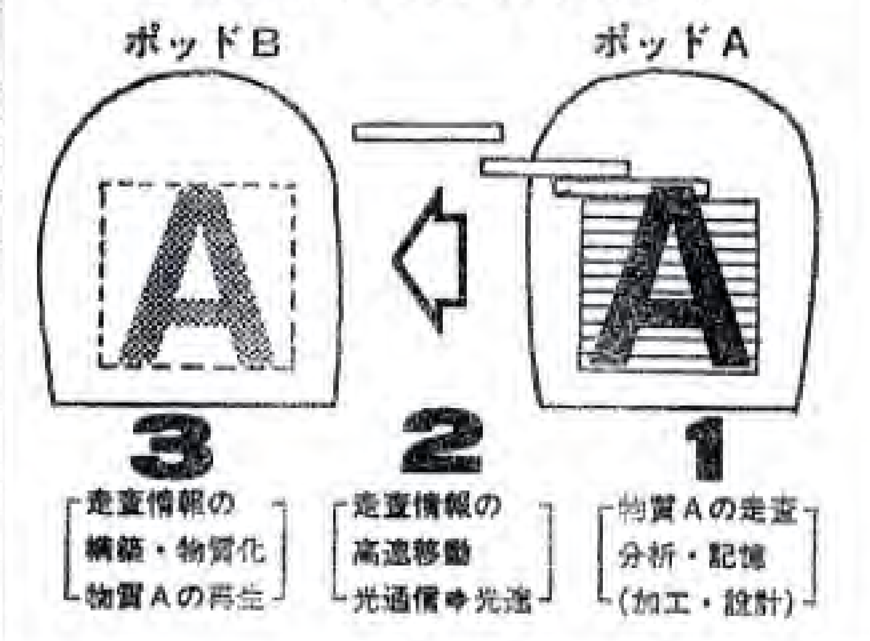
中央生成器トロス（丸天井）……これは物質生成局　中央生成器トロスの炉部。生成積は大きいがこれは何も大きなサイズのものを専門に生成する炉ではなく、小さなものを大量に生産するのに使う炉である。主に食料品、燃料、日常消耗品、そしてサイズの大きなメカなどを扱う。特に精密な物や少量必要な物は他の生成炉を使うのがフツーである。原料を供給する分解器の分解炉の方はまた次の機会に〜。



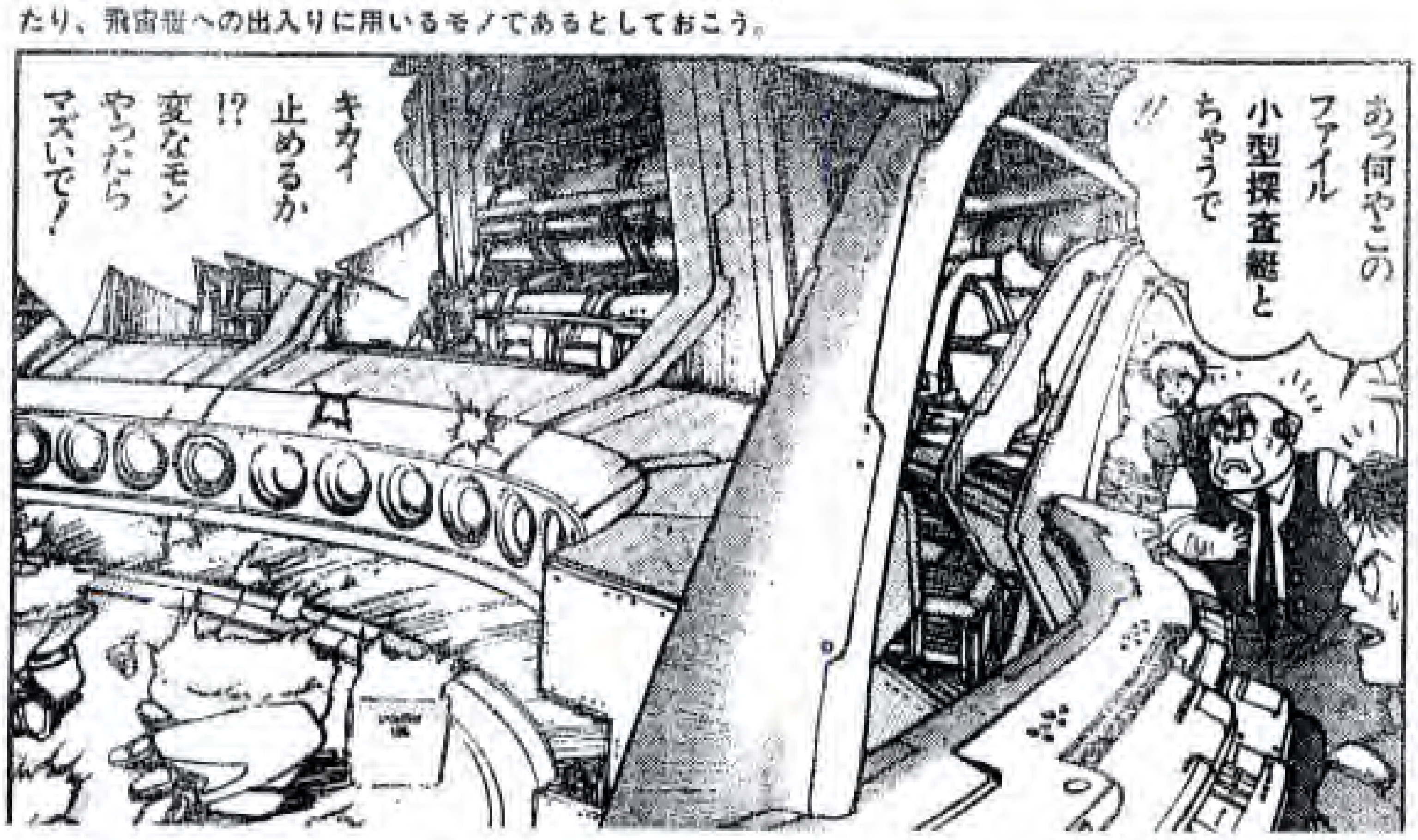
原子のモロけ防止に使う重力集中レンズはミドリ色の光を出す点で有名である。これはリゲリアングレーが牛を盗むのに使ったり、飛宙船への出入りに用いるモノであるとしておこう。

「ニューロハード」ではスタートレックやハエ男の様な転送移動はない。オリジナルを分解消去もしない。ただポッドAは原子の配列をコピー（読みとって記憶）するだけである。そのコピー情報に従ってポッドBにあたる生成炉で原子を積層するのでサイズ変更や複製化、変型加工も自由自在である。制約となるのは原材料の量だが、これは分解炉（通称ゴミバコ）から供給される。

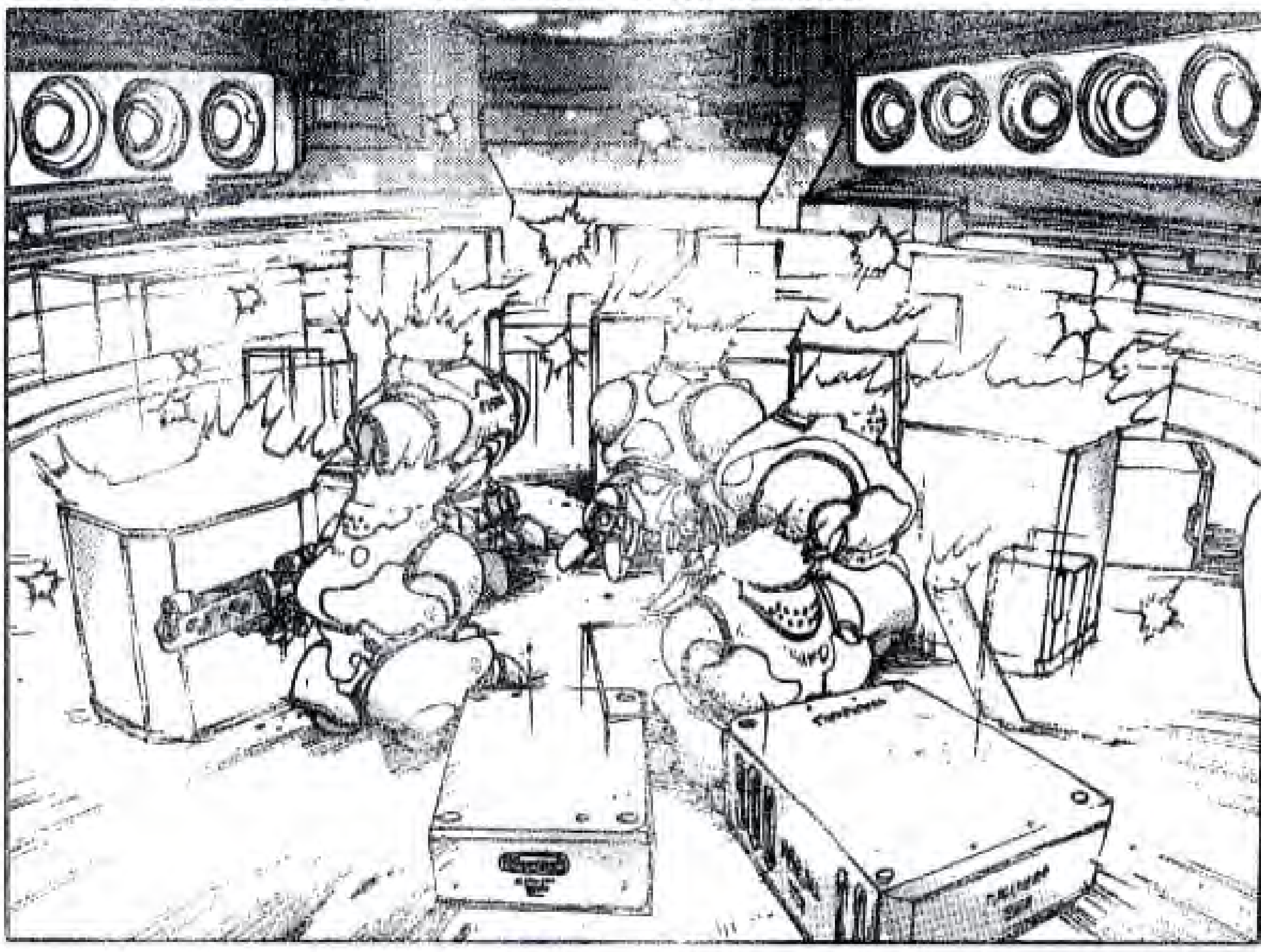
考え方としてはまず、スタートレックの転送装置あるいはハエ男の物質電送ポッドを思い出して頂きたい。



ただ　高等生物の走査や生成は極めて難しい。ナゼかというと構造的・物質的な要素は全て走査できるが、（これもたいがいな超技術だぜい）脳内の電気信号や鼓動（心臓のコドウなど）は再構成が極めて難しいからだ。従って、生成直後は脳波はフラット、心停止といった状態で生成炉に出現するので（フツーならここで死ぬのだが）直後に電気ショック・心臓マッサージしなくてはならない。初期の生成炉では死体製造、機能の欠損等がほとんどでデータの加工ミスなども多発していたが　最新の炉は走査精度も高く完全ではないが電子も混入するので蘇生の安全性もかなり高くなっている。クローニングや特殊機能人間などもデータ設計と炉でつくるのがフツーである。医療用原子積層機・分解機については特殊なので次の機会に述べる事になる。



こういった場合は生成を中止し、できかけの物質は即・分解炉にほりこみ、問題のファイルをコンピューターシミュレーションで完成させてみて様子を見るべきだが、炉の緊急停止を拒む様なハッカープログラムも仕掛けてあるのだ！



そう　もし出現した物質が病原体　タチの悪いウイルスや大型異星獣だとマズい事になる。しかしもっとタチの悪いのは　蘇生装置一式や護衛用メカと共に出現する密航者、又は宇宙海賊である。しかしこんな外宇宙のしかもスターシード船で海賊など出た所でせいぜいコロニーの主になるか遺伝子を外宇宙に拡散させられるか程度の利益しかない。





マルチナはアームドスーツのパーツ生成でこの区画に来ていたのだ。ホウセンカ号コントロールはミーティングの9人で行うのではなく4人が交代で行う。担当の4人＋1人はブリッジに入り、惑星周回軌道に乗る体勢に入っており非番の4人が上陸用装備の点検にまわっていたとゆーワケだ。海賊のファイルが探査艇表示なのは惑星圏に入って人手が不足する時に出現する為である。(探査艇などは惑星圏に入る少し前に生成するのがフツーなので)



次の機会はあるのか!?

そんな事態とはつゆ知らぬクラムト氏のオフィス



その時船体に伝播する重苦しい振動。

注：こんな旧式の兵器ではホウセンカ号の外・内壁はコワれない。



メインブリッジのコントロールシート



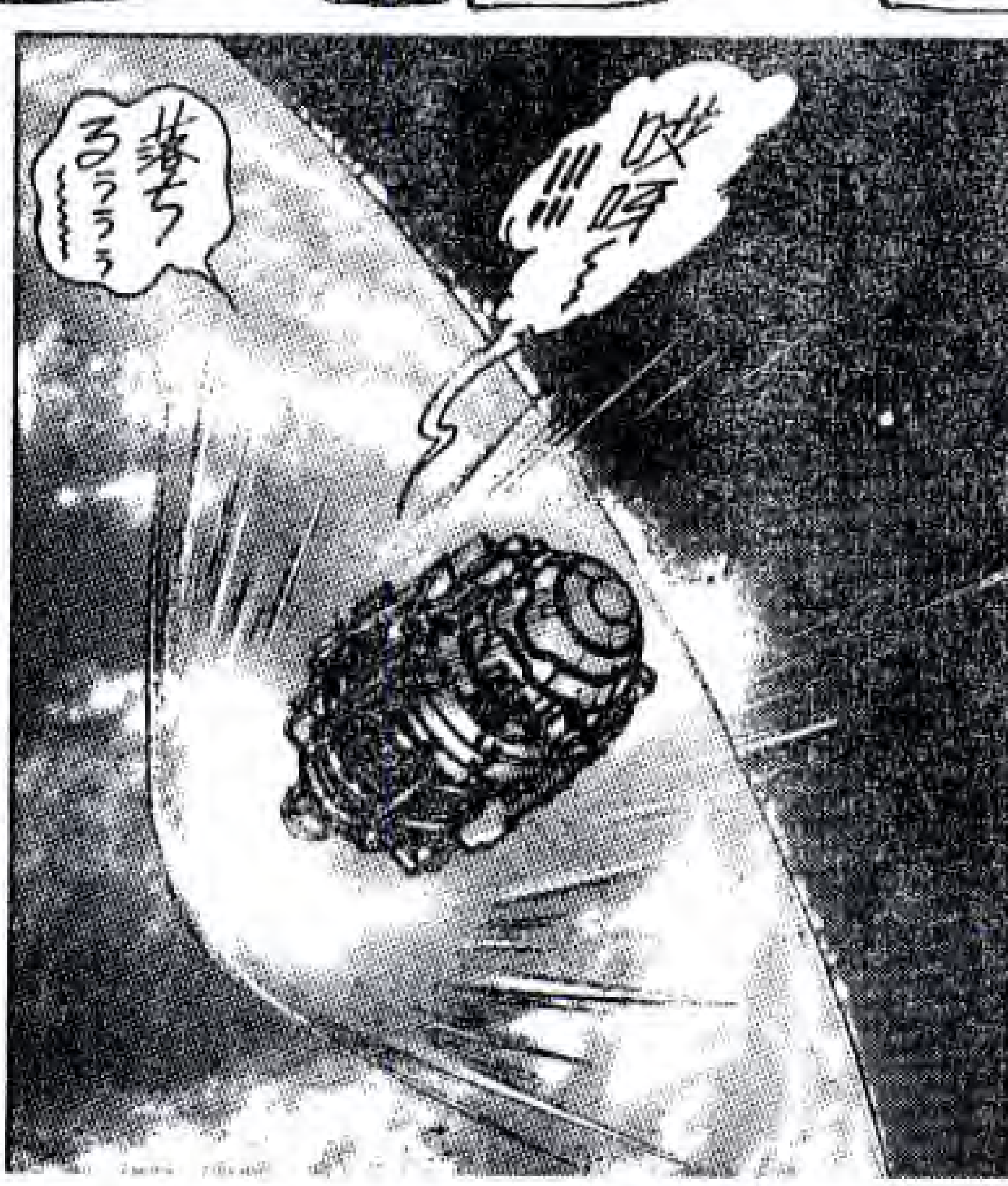


宇宙海賊コロプス
と、その一味

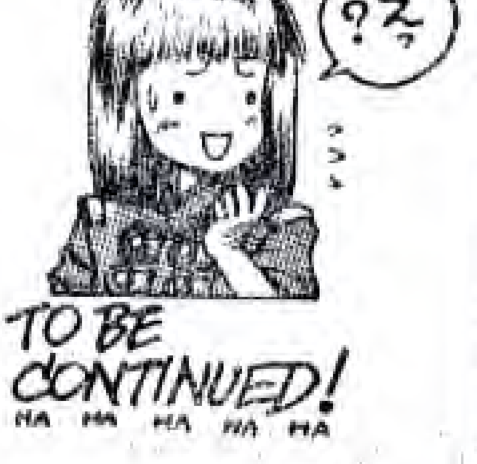
ムロト星とは地球から約１１光年の距離にある「みずがめ座ロイテン７８９－６星系」の第４惑星の名前である。よーするに彼らは海賊のくせに乗り込む船を間違えたのである。彼らは例輪オリジナルではないが、反感星連邦ゲリラとして　増殖とゲリラ活動を推進しているのである。
低精度な弾道兵器を所有している事から、かなりの時間データとして眠っていたと思われる。



テクノレベルがあまりにも違うのでカンタンにつかまったコロプス一味。



かくして惑星アンテイア（花咲き乱れるの意。普語としてはアンテイオかアンテイオス、アンテイオンになるのかな？まあいいか…）の　重力の底へ引きよせられるホウセンカ号の運命やいかに！という所で今回はここまで。
え？　なぜマンガにせずコンテにしたのかって？　この作品はこういう提出のし方が一番よかれと思ったからだよん。まあカタい事言わないで楽しんでね。えへへ
ではまた次号で会いましょう。





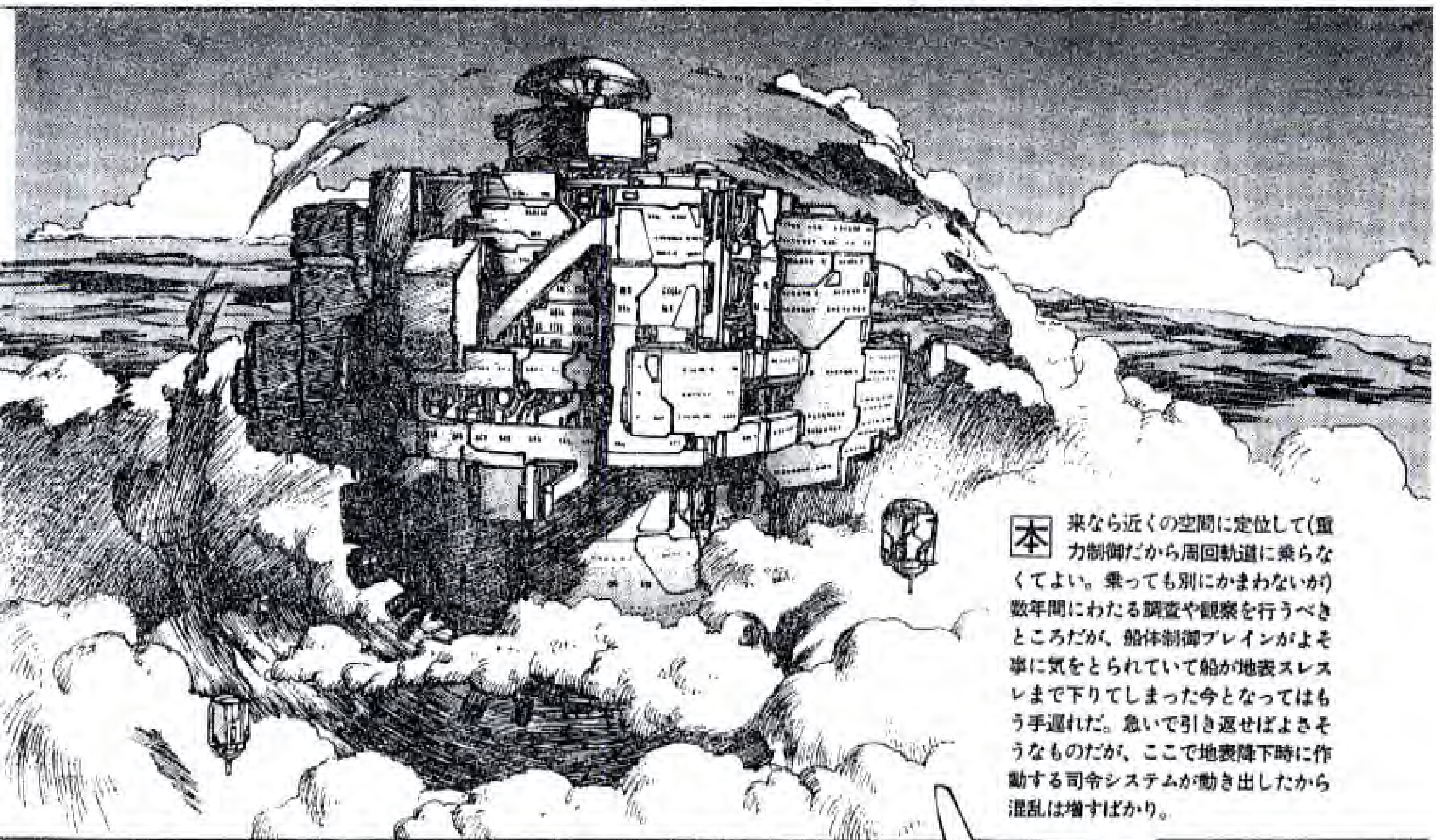
何とか地上200mで落下は止まり、地面との激突を免れたホウセンカ号だが（高度維持で風に流されている）船体にムリな力がかかって各所に歪みが生じている。外見では判らないが中は検査と事後処理で大騒ぎである。



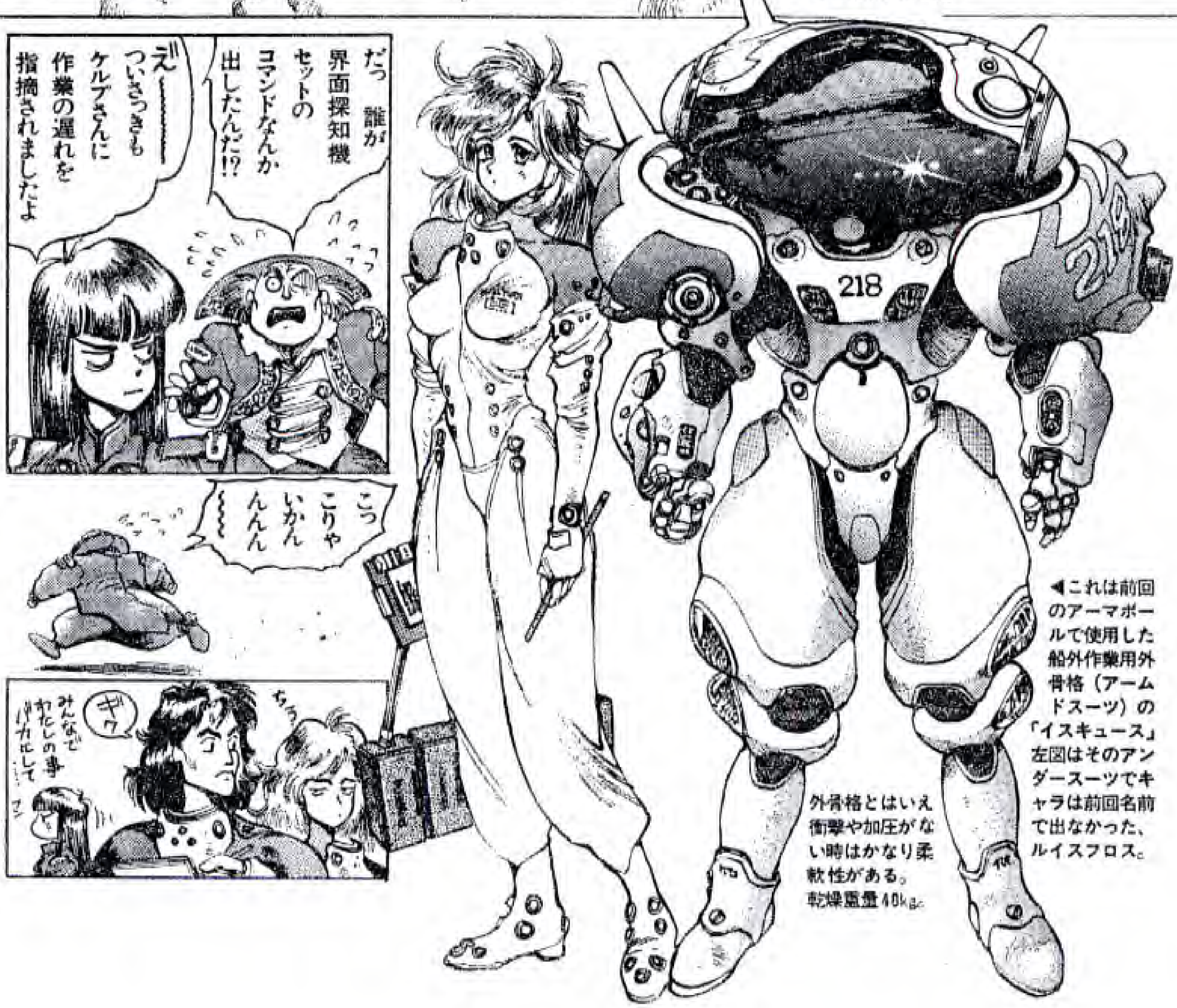
■船艦班は船体検査を手伝っているのだが、メンテクルー程には手際がよくないのだ。

▲上は外装修理作業ではなく、重力界面探知機をポイントごとにとりつけている絵である。なぜそんなものをこんな近距離でいまさらつけていくか…はこの先を読んでね。接合は融接ではなく真空溶接（正しくは溶接とは言えないんじゃないかナ…？）機を使ってくっつける。局所的に真空状態を作る工具を使う。

ところで前回の誤植だが、１回目のポスターでは中央上段最初の文章１行目「航空層」はホントは「航宙層」。
VOL.2＝２回目では１頁目中段４行目「（相対超高速～）」がホントは「（相対超光速～）」、以上２点ね。



本来なら近くの空間に定位して（重力制御だから周回軌道に乗らなくてよい。乗っても別にかまわないが）数年間にわたる調査や観察を行うべきところだが、船体制御ブレインがよそ事に気をとられていて船が地表スレスレまで下りてしまった今となってはもう手遅れだ。急いで引き返せばよさそうなものだが、ここで地表降下時に作動する司令システムが動き出したから混乱は増すばかり。



◀これは前回のアーマボールで使用した船外作業用外骨格（アームドスーツ）の「イスキュース」左図はそのアンダースーツでキャラは前回名前で出なかった、ルイスフロス。

外骨格とはいえ衝撃や加圧がない時はかなり柔軟性がある。乾燥重量40kg。

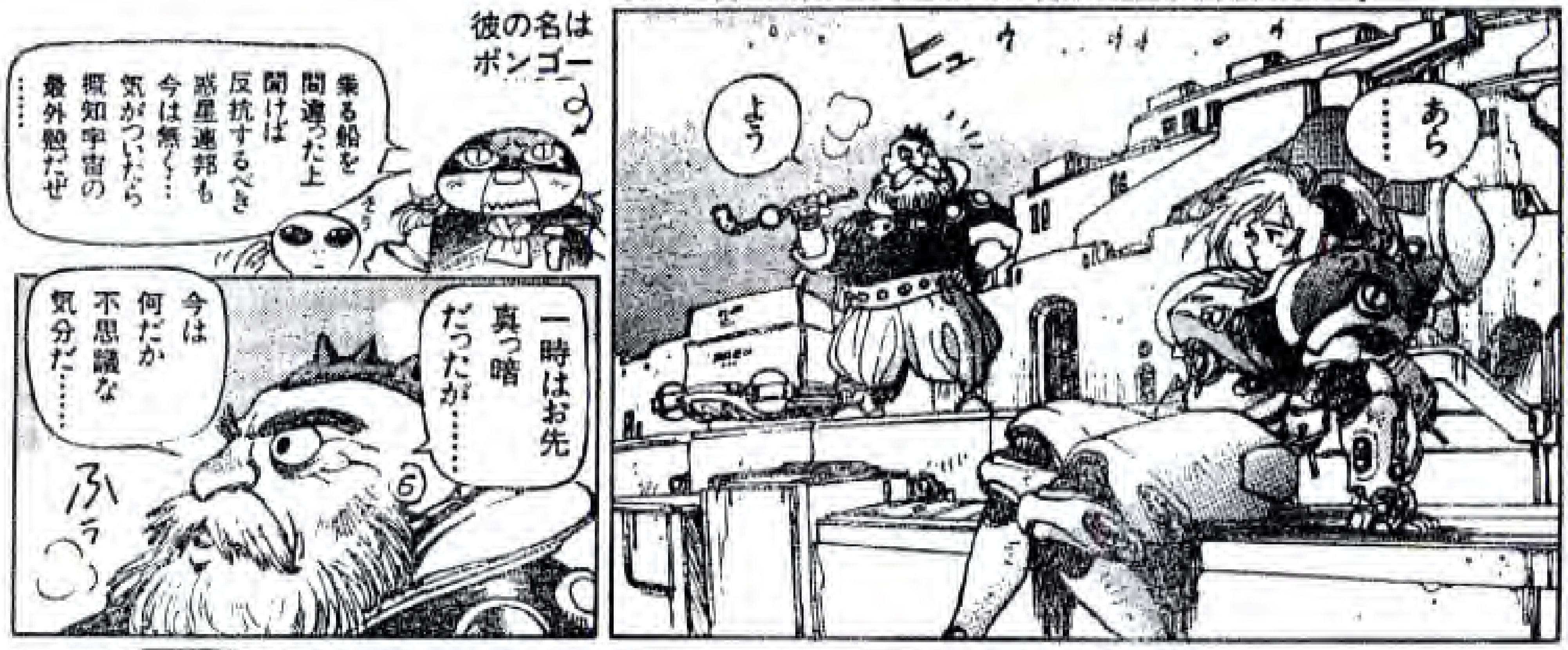


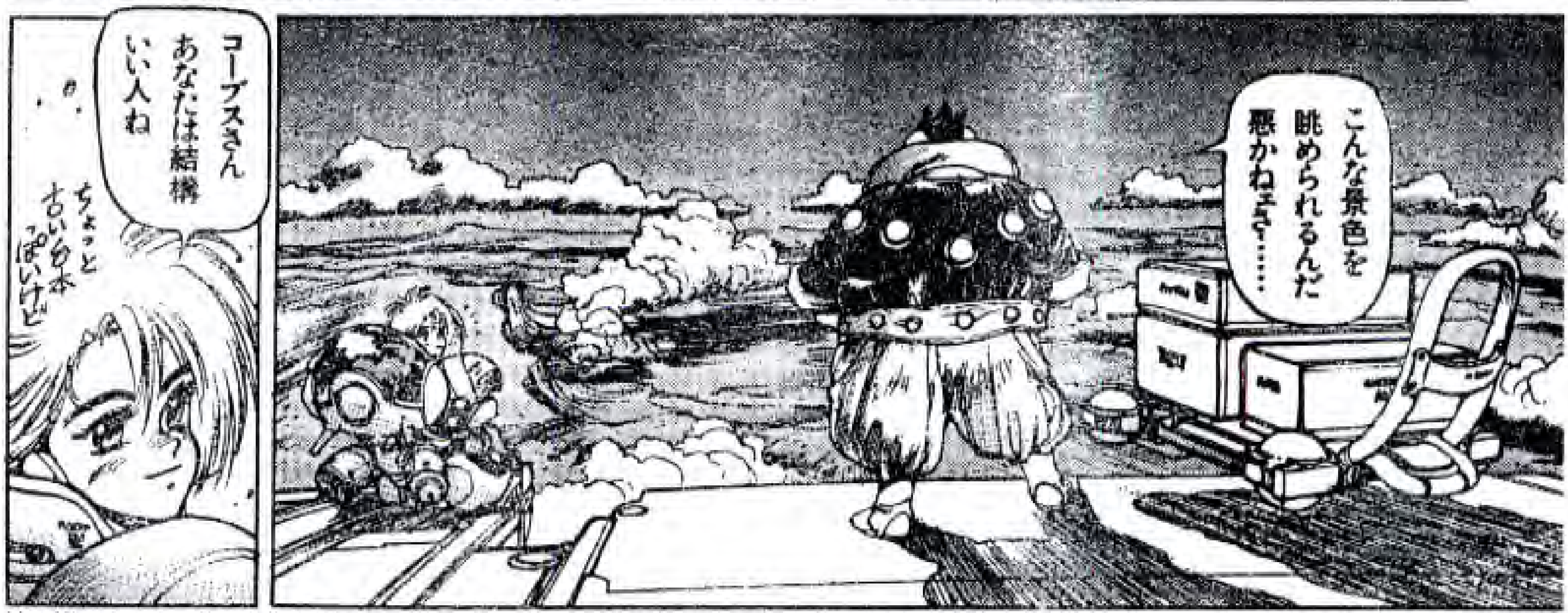
◀イスキュースを着る時、髪はマスクする。汗をかく事は普通ないが、バンダナもする。

■時差の調整もしなくちゃね……対恒星平均運動・周期に合わせて——。

▲書くまでもなく、彼女（彼）らは電脳シミュレーションであらゆる環境や世界を経験している。しかし、現実の微妙なニュアンスは（意識の持ち方も含めて）電脳には無い。

■コロブス一味は一時拘束されていたが、監視プラントを組みこむ事で行動の自由度を上げて貰い、特にする事もないので資材の運搬等を手伝っている。





甘いぞマティ！　世の中善人ばかりなら歴史や技術はこうはならんだろう。

▲台車がシームレスじゃないのは生成器で造ったのではなく基本的備品だから。





■廊下の端でしばし口論の後……



◀待ちきれないバストンは、中央制御脳にアクセスしてアドレスを聞き出す——。





制圧機はリゲリアンの重力制御技術を使ったもので緑色に光るブロックとして現れる。呼吸や思考は制限されない（ブロック内は均一ではなくドット状態という事。勿論ドット密度は可変）。制圧機ではブロックが対象を封じ込めるわけだが、このブロックに対象の動きをトレースする様にプログラムするとバリヤーとして使える（アトレイデスのシールドと同じになるので当作ではしないけどね！）。



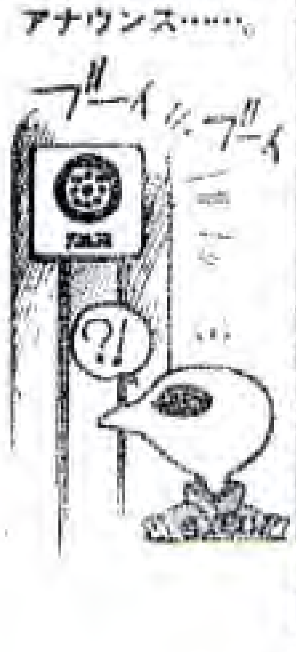
ホウセンカ号のシールドも原理は同じ。（深く追求しない様に）

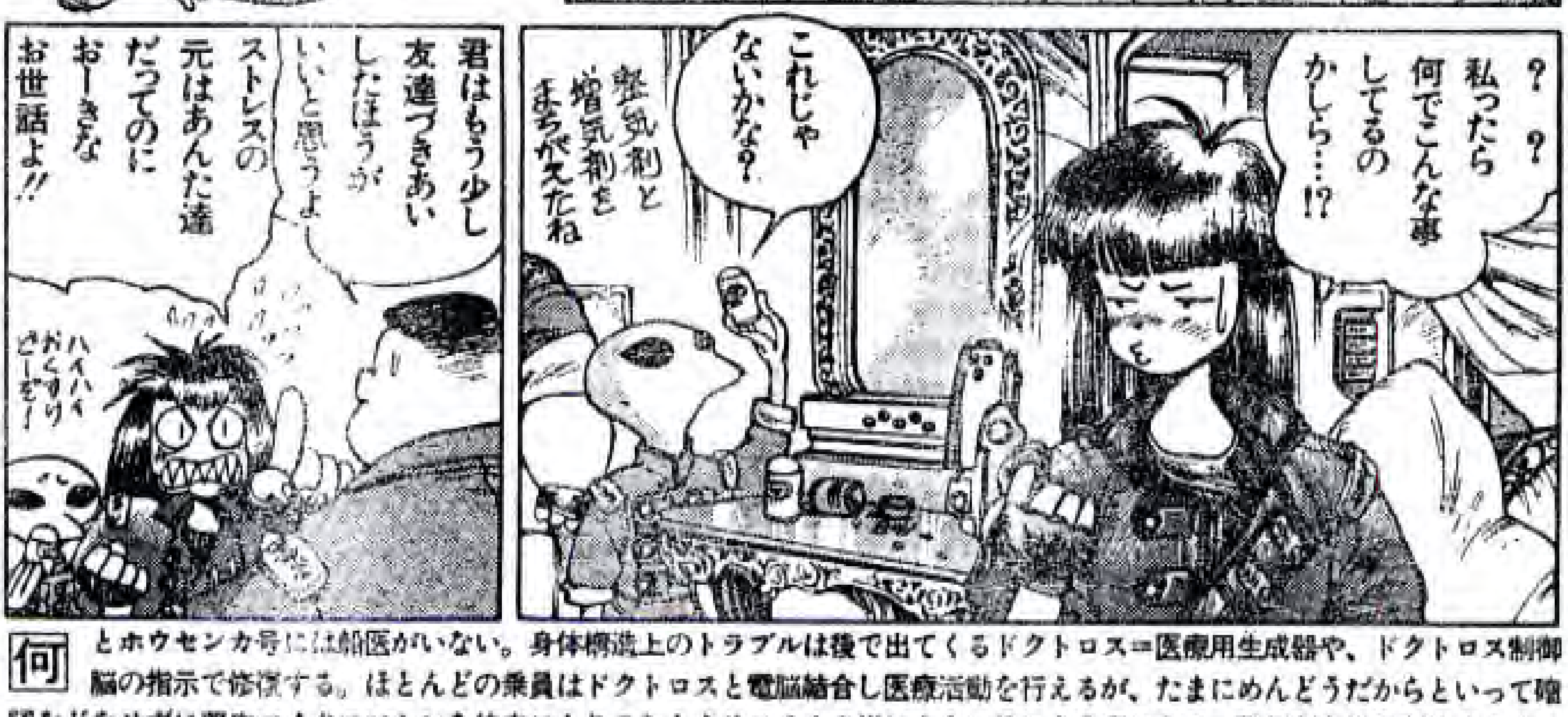
昔今とほとんど変わりない注射器
▲注入したのは整気剤と鎮静剤





▼船内放送で第18デッキ隔離解除のアナウンス……。





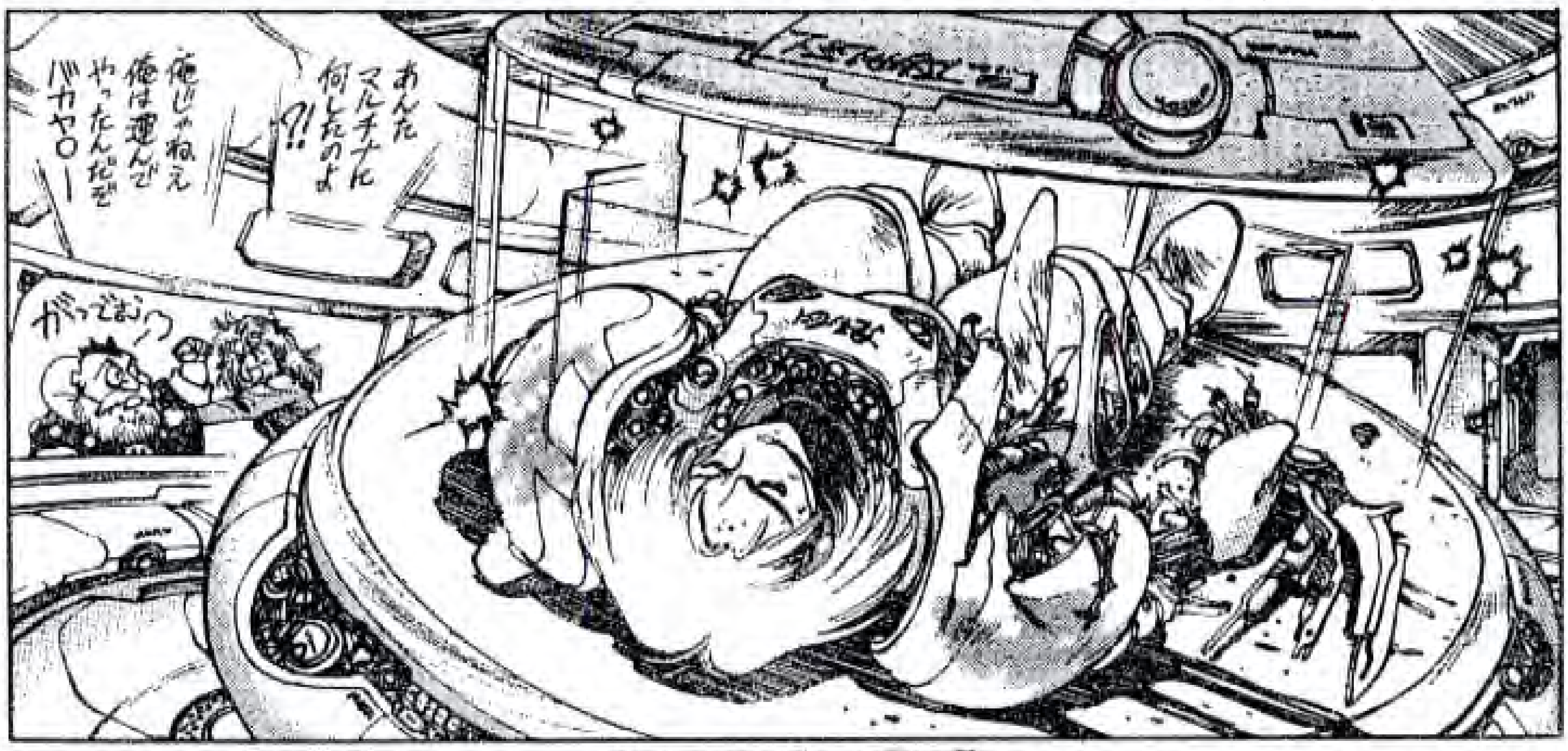
何とホウセンカ号には船医がいない。身体構造上のトラブルは後で出てくるドクトロス＝医療用生成器や、ドクトロス制御脳の指示で修復する。ほとんどの乗員はドクトロスと電脳結合し医療活動を行えるが、たまにめんどうだからといって確認などをせずに薬やマイクロマシンを体内にとりこむとクリスチナの様にえらい目にあう事になる。整気剤と増気剤はリタリン等の降圧剤（副作用で自殺傾向が生じる例もあるらしい）と興奮剤（高揚剤？）の様なもの（原始的対処療法だが……）。

■1デッキ平均3～4フロアある中で、デッキ間用昇降管は重力制御移送。出入口近くは低速で、バーにつかまって管外へ出る。下図は小型の管。





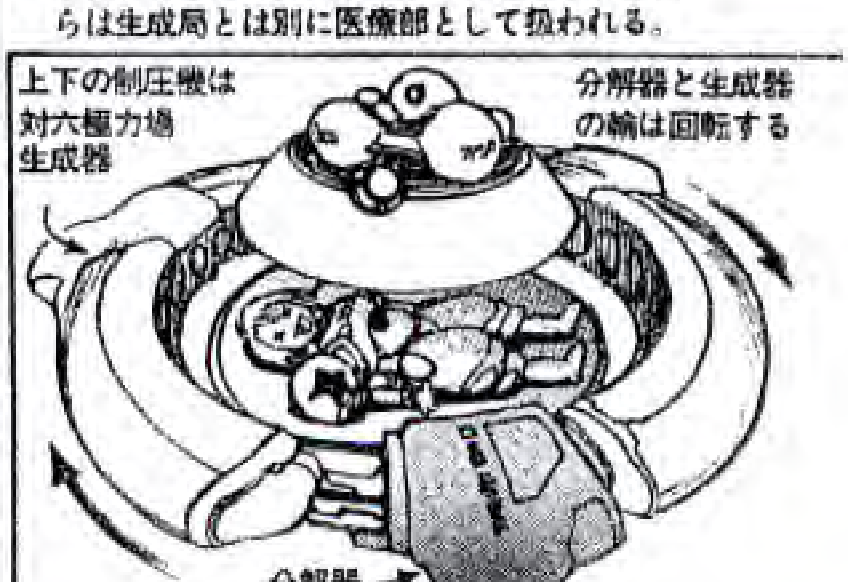
▶デッキの隔壁閉鎖とマルチナの重体は、生物汚染や化学汚染、放射能漏れ等のアクシデントを意味する。



◀コロプスが検疫用トロスを通らなかったので隔壁閉鎖の騒ぎとなったが、チェックはすぐ終わり、閉鎖はドクトロスだけにかわる。



マルチナが乗せられている台がドクトロスのメインベッド。制圧機と同じ原理で患者（部）を固定、物質生成器と同じ原理でスーパースキャンし、登録されているデータを使って患部をごっそり入れ換えてしまうメカである。入れ換えるからにはイカれている患部を除去するわけだが、ドクトロスは生成器と分解器の複合水平面が上下する事でこれを行う。ドクトロスはクルー全員が扱える為、ホウセンカ号に船医はいないが専門のメンテクルーが常駐して原料の管理等を行っている。彼らは生成局とは別に医療部として扱われる。



▶ぶつかって来たモノはドクトロスが分離・記憶している。この時点では分解されており存在しない。



クルーのほとんどは神経系にブレーカー、脳に非常用組織（酸素や栄養等）などを遺伝子の上で持っており、この部分と大脳の大部分をやられない限り深刻な事態にはならないし、構造的には再生成できる（記憶は構造であるとする。従って、ここでもしマルチナが死んで再生成したとすると、最初にファイルアウトした時の記憶・経験に戻る）。



イ スキュースの破損箇所にグチャグチャにつぶれてからまっていたそのモノをシミュレーターで映像再現してみたところ、それはどう見てもハチの形をしたモノであった。

▲マルチナは20cm程と言ったが、頭端から腹部先端まで約18cmである。

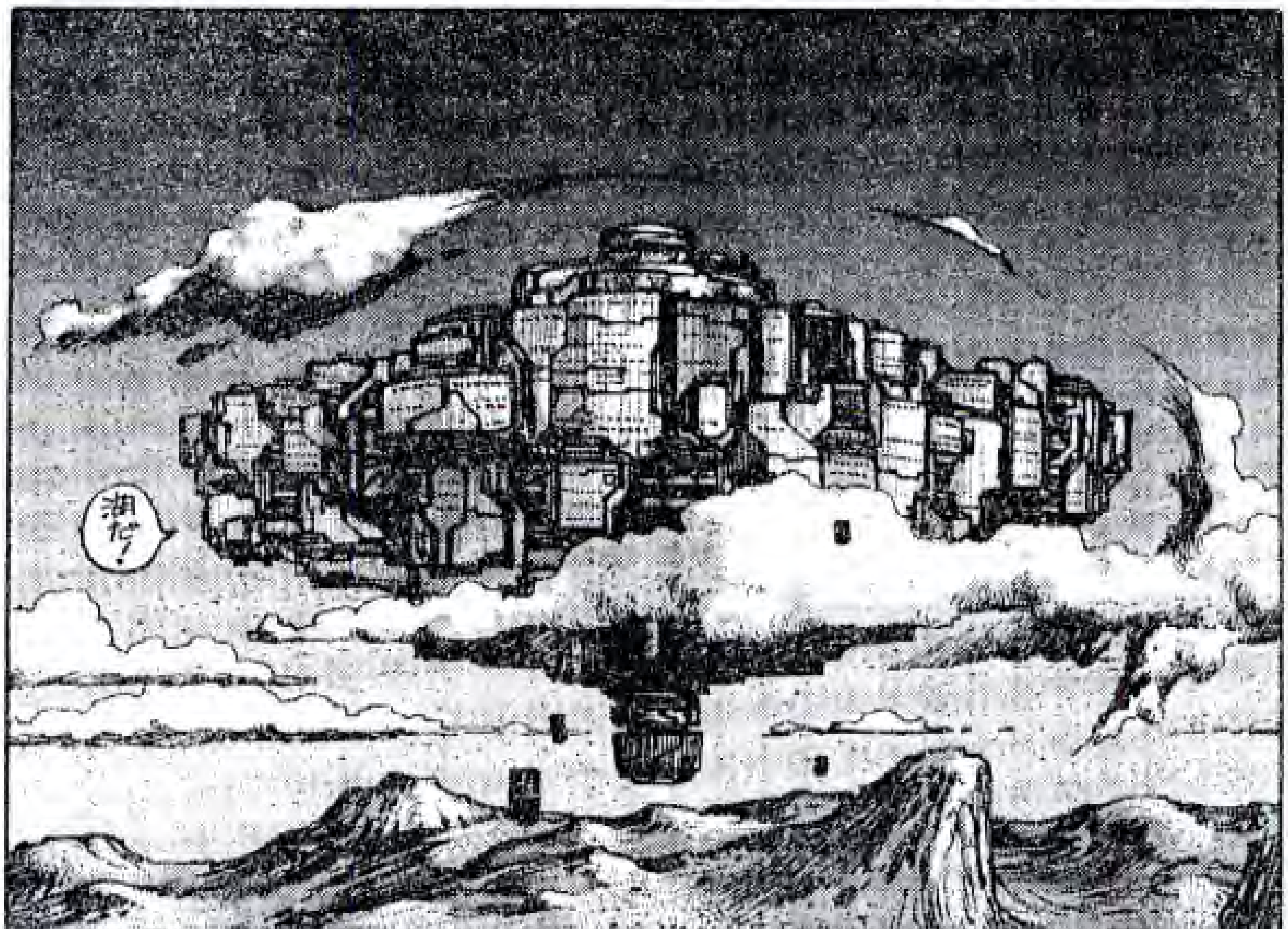


大きなダメージを受けると身体はそれに対応した状態になる。呼吸や心拍、筋の状態、神経etc。ドクトロスで患部を入れ替えて構造的に健全に戻っても、入れ替えた部分の標準状態と、ダメージに対応していた他の部分とが、直ちにうまくかみ合わない為にマルチナは若干の不調を訴えている。



◀踊る、踊る、会議は踊るの役員会。

と いうワケで「作用圏外からの惑星調査段階」はとりあえず置いといて、「地上へ降下した段階」での対応をとる事に決まり、ホウセンカ号は船体生成機で成長を始める。原料は全体が×1.5倍程度まで自分自身の内壁等定められた部分を使う。資材通路や各種メカ用の格納庫、滑走路等を広くとり、検疫ゲートやラボが多数生成されていく。この段階が終了する頃までに地質調査を終え、惑星に害がない様な形で原料を入手しなければ船の成長は続行できない。



▶シールドが強化されている事はいうまでもない。探査ロボットは予定の2倍近く発射され、情報収集を始めている。

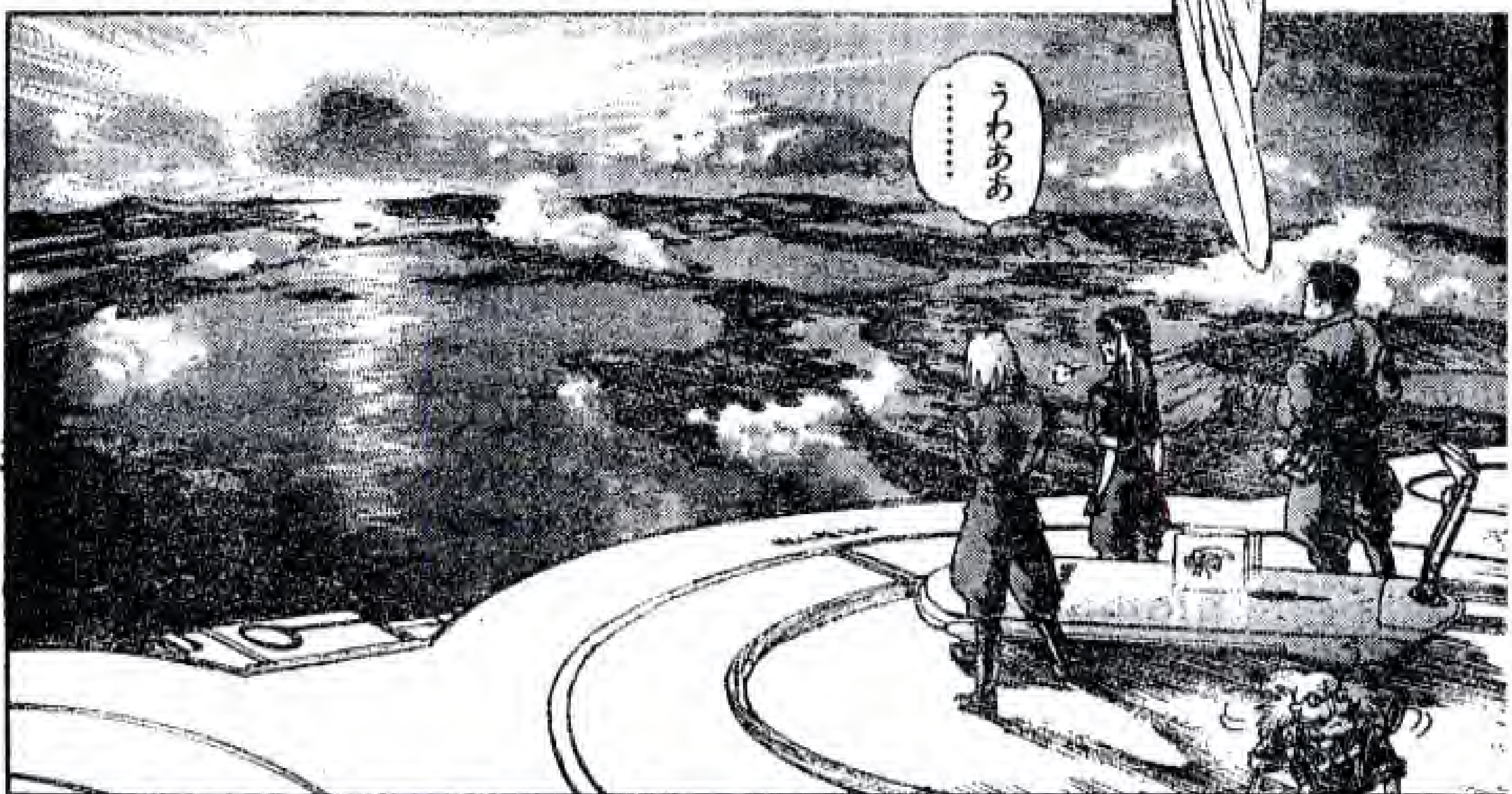
「先行型」とは何じゃらほいと思った人。進化系統上無関係なのに完全に環境に適応した為に形態がそっくりになった2つの種や型で古い方を先行型（種）と言うそうだ。楽しく知りたい人には、ビジネス社刊・實吉達郎著「動物絶亡ミステリア進化史—かつて鳥獣大戦争があった?!—」¥1,300が面白くておすすめ。



放すといっても、勿論外に出るまで制圧機を使って固定しておくわけだ。図はドクトロスで使う固定ベッド。原理は制圧機と同じ。



このハチそっくりな生き物（?）は生殖機能を持たない様だし、軟弱な消化器系と頑強な大アゴの関係を見ても、どうも既知のハチと同様に集団を作り、役割分担をするらしい。と、すればこの1匹は早い所生成器で再生して、外界へ放すのがとりあえずよさそうだ……。ファイリングしたので、調査や研究は個体に関してはできる（必要なら千匹同じ個体をコピーし集団にする事も可能）。飛び散って再生に必要な情報がない部分は他の部分から推測して生成する（ごく小さな器官が丸ごと失われていた場合、オリジナクと違ってしまうが仕方ない）。

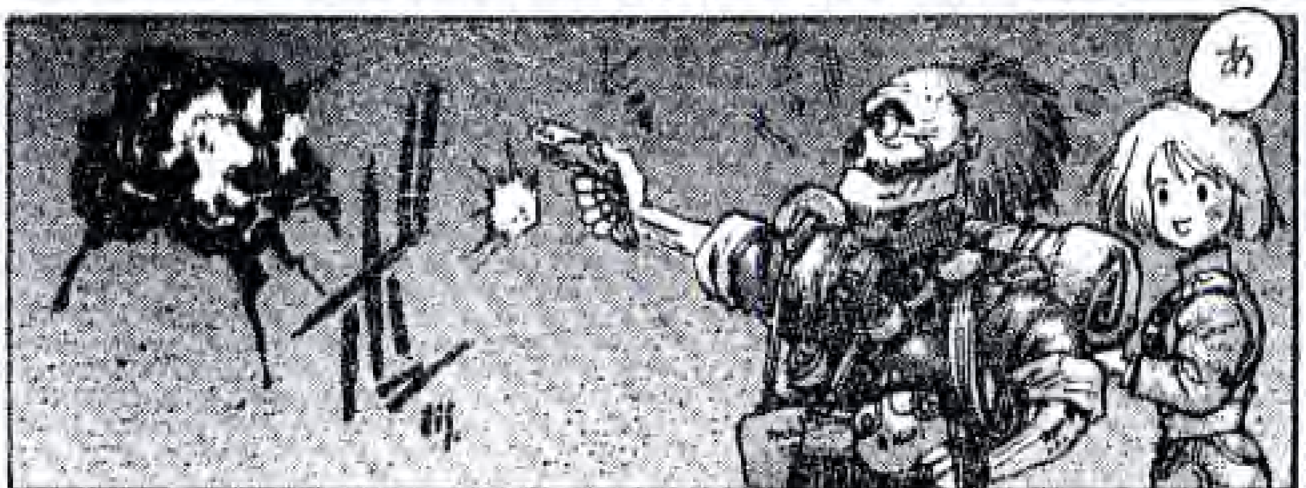


外は丁度夕焼けの時……。暗黒の宇宙を飛び続けて来た者にとって、惑星に対する愛情が生じる貴重な時間。

▶ハチを放すのに同席しているのは、生物部に移動したクラムト氏の息子ヨシュア（オヤジの指示だよ）。



▲この時も安全保障上、一応制圧機がハチに照準をあわせたままである事は言うまでもない、か……。





ゲッベルは船が地上に降りて以来、重戦斗艇に乗り込んで待機していたのだ（ナンギなジーサン……）。ハチはこの後再度生成され、今度は無事に放されるのだが。



彼は結局、再び船内に招かれる事になる。

次回はいかなる出来事が…!?

TO BE CONTINUED!!

ニューロハードVol.3　おわり　コミックドラゴンVol.5（8月上旬発売）につづく



▲上は前号にひき続き成長しつづけるホウセンカ号。

▼惑星調査が始まるとなんでも屋のブリッジクルーはがぜん忙しくなる。今回は定期降下調査１回目である。

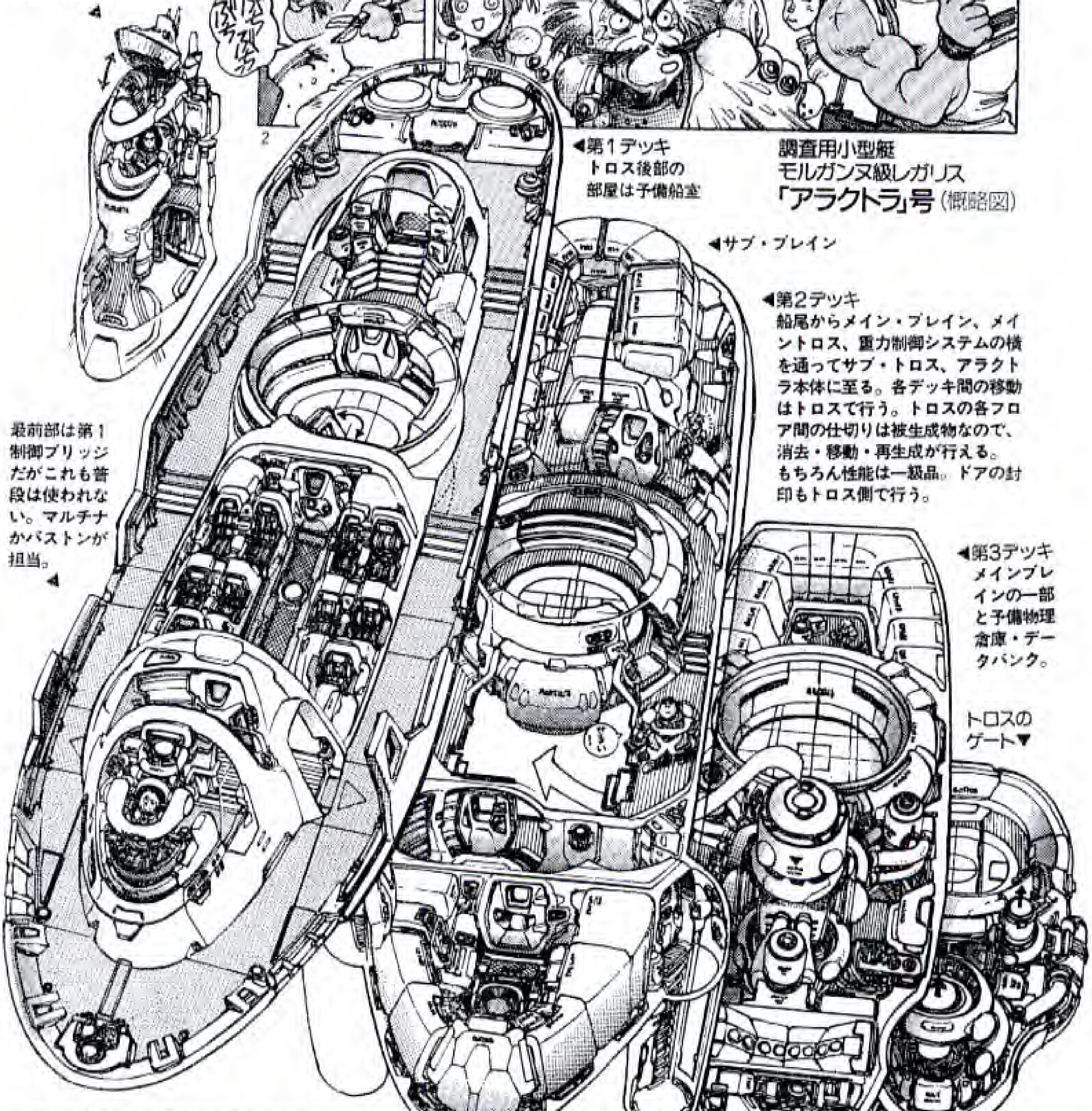
▲この装備は高機能サバイバルスーツ＆ツール。左手のは重力制御用のリゲリウムペレット。

護衛星とは衛星高度にあって本船からのエネルギーを中継してくれるエーセーである。強力なエネルギー兵器としても使える。常にチームを監視し、地理や気象、状況等を教えてくれるたのもしいキカイ生命体（ＡＩＬ）である。ローズが拘束されていないのは生態や知性を観るためである。構造分析はシュミレーターが行っており、分析に実体は必要ないので生成されているのはこの１体、ローズだけである。

この指令塔みたいなものは第2制御ブリッジ。マニュアル・有視界と、非常用のもので、普段は使わない。一応ハシゴもついているが、重力制御で昇降する。つぎのページ中央のコマ天井の穴が出入口。



調査用小型艇 モルガンヌ級レガリス「アラクトラ」号(概略図)



◀第2デッキ
船尾からメイン・ブレイン、メイントロス、重力制御システムの横を通ってサブ・トロス、アラクトラ本体に至る。各デッキ間の移動はトロスで行う。トロスの各フロア間の仕切りは被生成物なので、消去・移動・再生成が行える。もちろん性能は一級品。ドアの封印もトロス側で行う。

最前部は第1制御ブリッジだがこれも普段は使われない。マルチナかバストンが担当。◀

◀第3デッキ
メインブレインの一部と予備物理倉庫・データバンク。

船首寄りにあるトロスは主に乗員のスキャニング(フロ兼トイレ・着替えetc)で使うが、検疫・医療・換装でも性能に問題はない。基本的にはメイントロスと同じモノである(フロ・トイレ、といってもハダカになったりするわけではない。光の平面が頭頂からつま先まで走査、不純物を除去するだけである)。プログラミングや作動命令etcは音声ではなく電脳で行う。もちろん、複数の作業を同時に行っても問題は生じない。

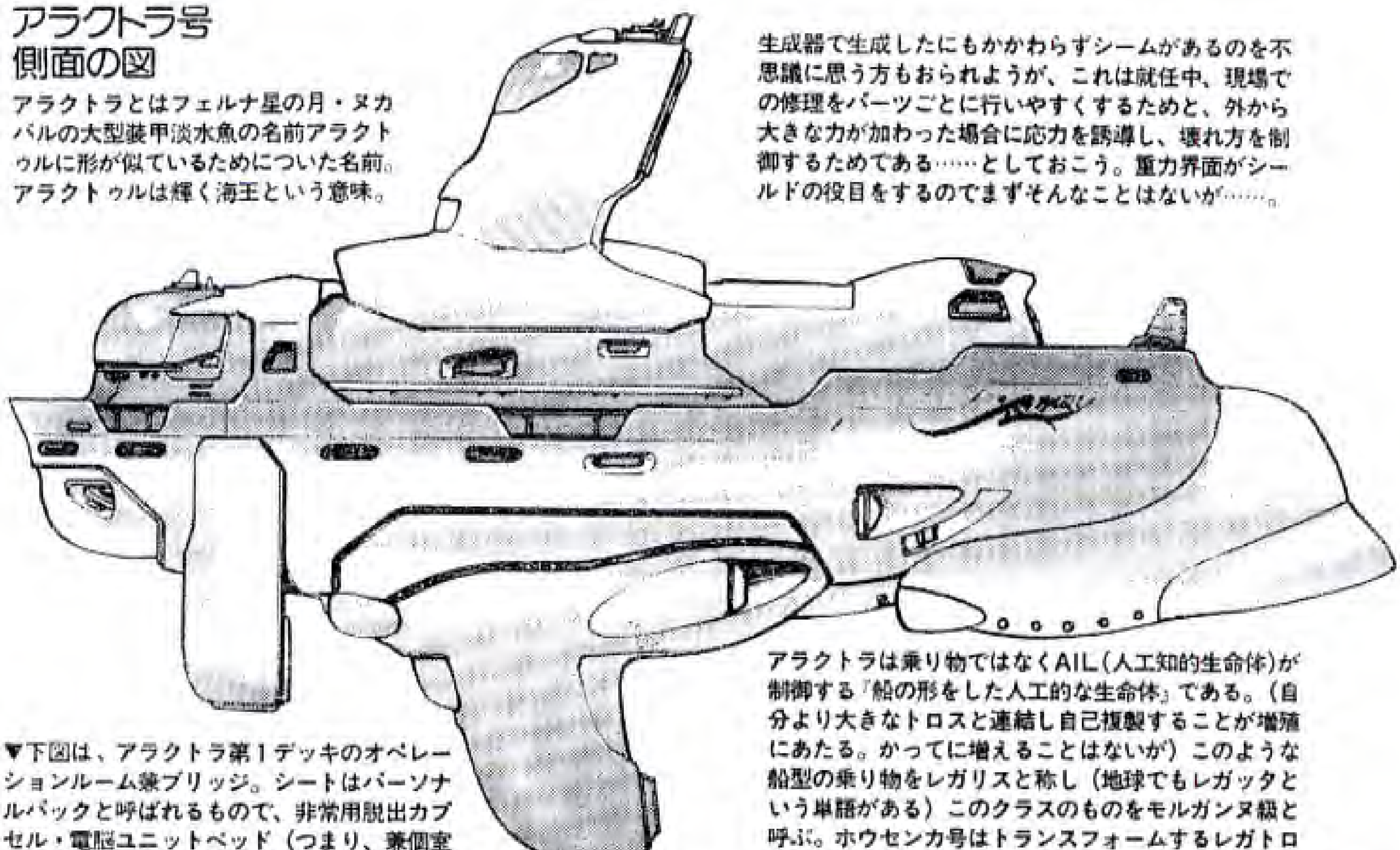
オプチカル▶エレベーター
緑の光で昇降する。200mぐらいまで有効としとこうか……。

第4デッキ▶
重力制御システムでいっぱい。機関室みたいなモンかな……。

アラクトラ号
側面の図

アラクトラとはフェルナ星の月・ヌカバルの大型装甲淡水魚の名前アラクトゥルに形が似ているためについた名前。アラクトゥルは輝く海王という意味。

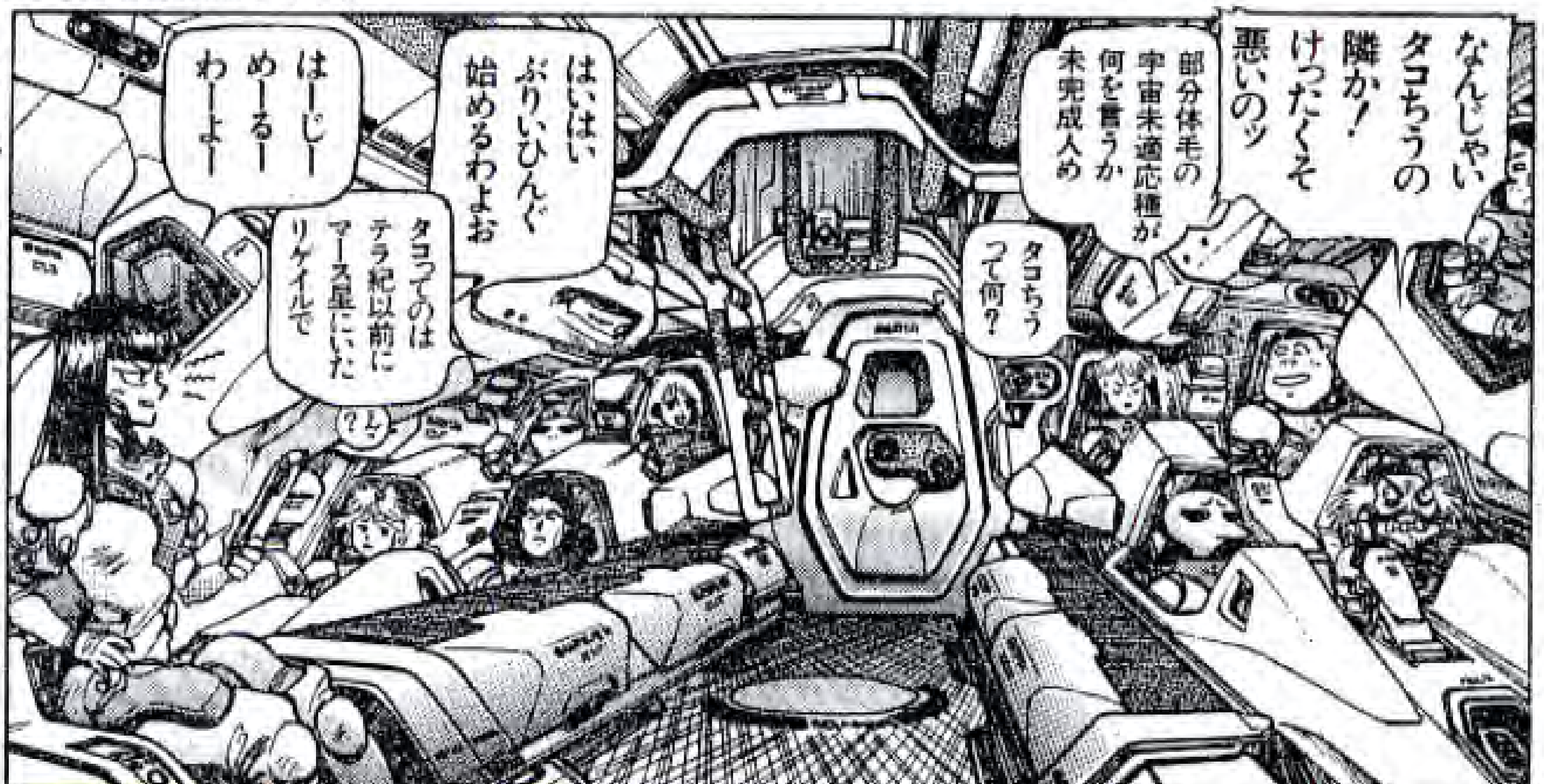
生成器で生成したにもかかわらずシームがあるのを不思議に思う方もおられようが、これは就任中、現場での修理をパーツごとに行いやすくするためと、外から大きな力が加わった場合に応力を誘導し、壊れ方を制御するためである……としておこう。重力界面がシールドの役目をするのでまずそんなことはないが……。



アラクトラは乗り物ではなくAIL(人工知的生命体)が制御する『船の形をした人工的な生命体』である。(自分より大きなトロスと連結し自己複製することが増殖にあたる。かってに増えることはないが) このような船型の乗り物をレガリスと称し (地球でもレガッタという単語がある) このクラスのものをモルガンヌ級と呼ぶ。ホウセンカ号はトランスフォームするレガトロスでありレガリスではない。

▼下図は、アラクトラ第1デッキのオペレーションルーム兼ブリッジ。シートはパーソナルパックと呼ばれるもので、非常用脱出カプセル・電脳ユニットベッド (つまり、兼個室・ラボetc) などを兼ねる複合端子である。

必要最小限要員で言うと、彼らは本来物理的私室を必要としない。サイバースペースに広大な私室があるためだ (たとえばクリちゃんは緑の大平原に浮かぶ白い空中城と庭園を所有している)。ホセンカ号に私室があるのは、物理的に余裕があるからと身体機能を劣化させないためである。



その頃コロプスたちは……



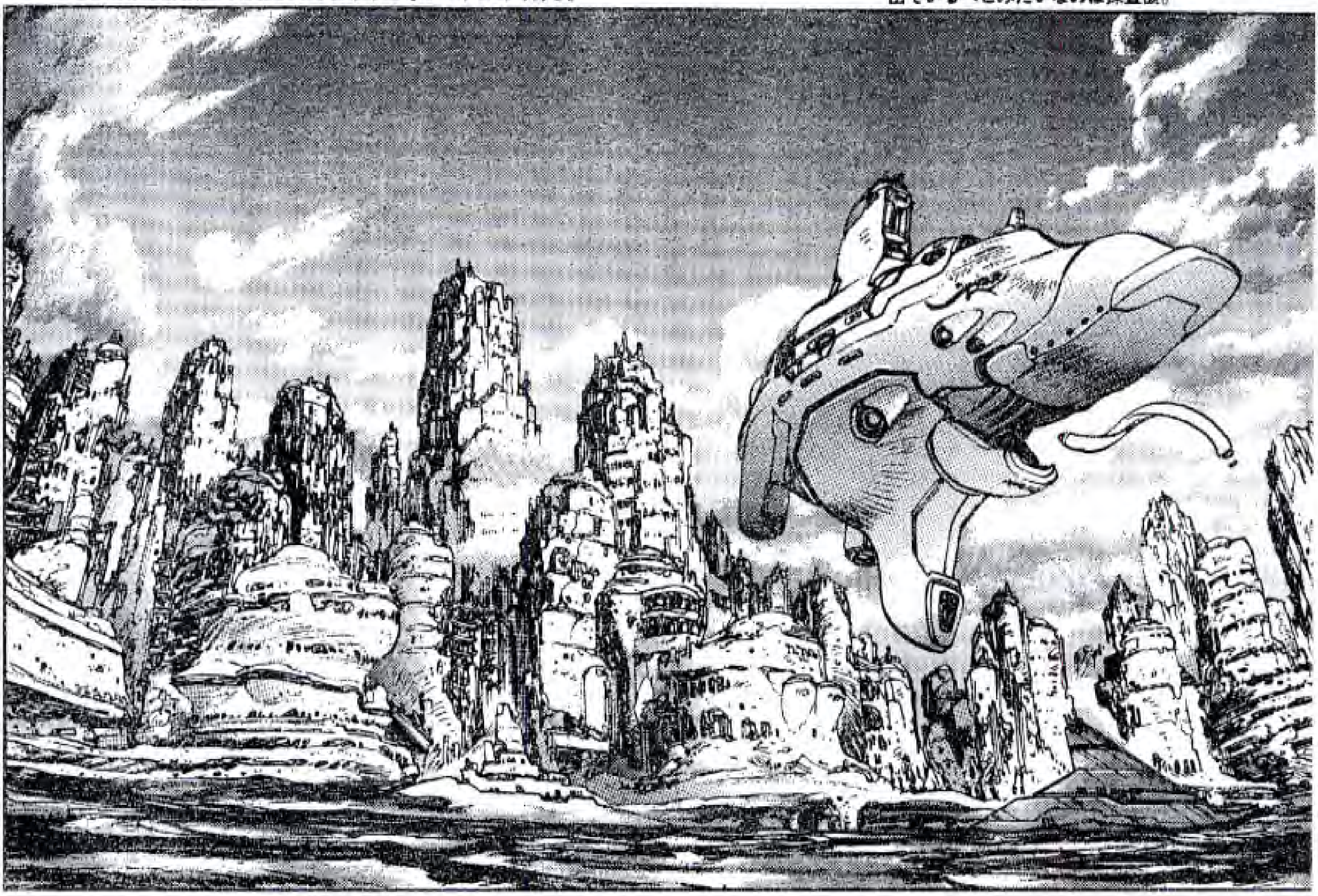
▲ペーパーのように見えるモノはデータフィルムで、表面の文字は記録内容のタイトル項目である。議長はおツムがオーバーヒートした。代理を生成するべし！



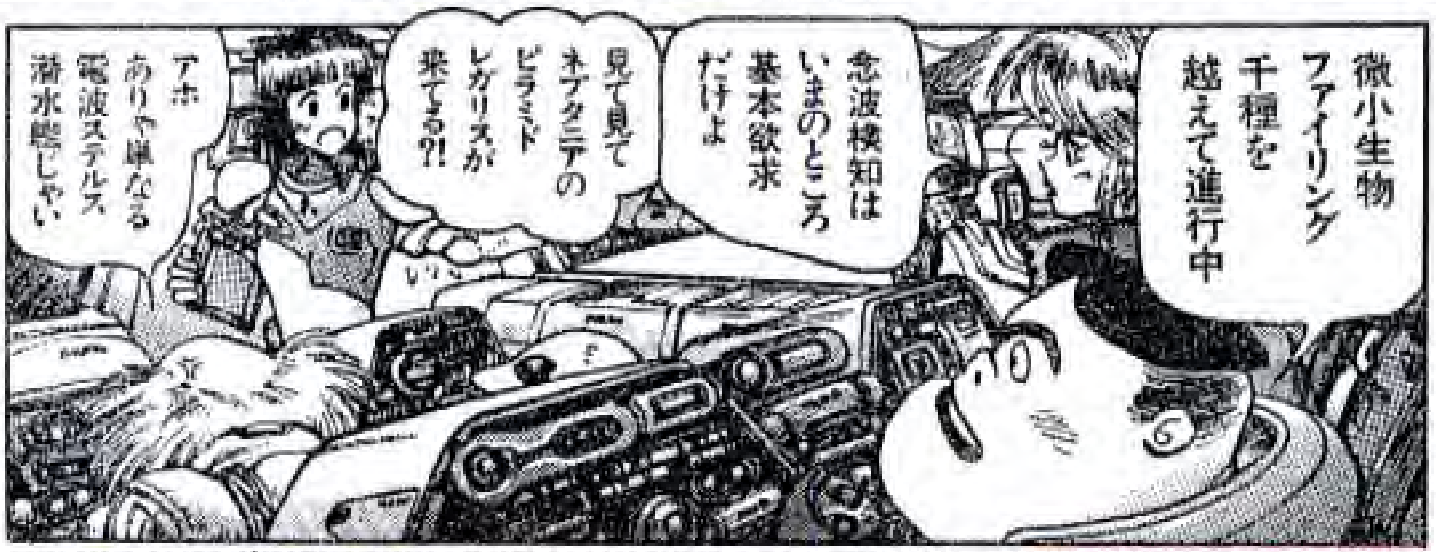
▲この時点でコロプス達はホウセンカ号内で、船体の生成チェックや試動をして回っている。

▼原地の大都市に接近するアラクトラ。アンテイア人は小柄なのか建造物の階数や船のデッキの手すり等やや小さめである。

▼アラクトラのトロスゲートから出ているヘビみたいなのは探査機。

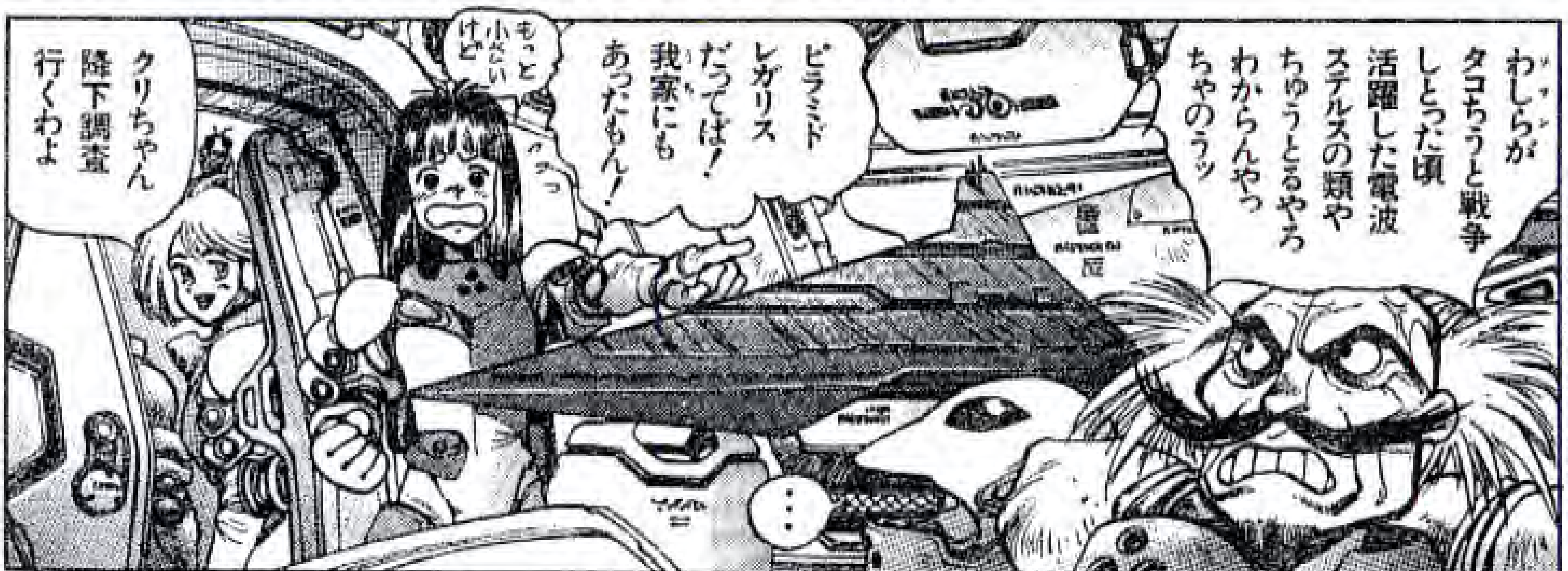


4



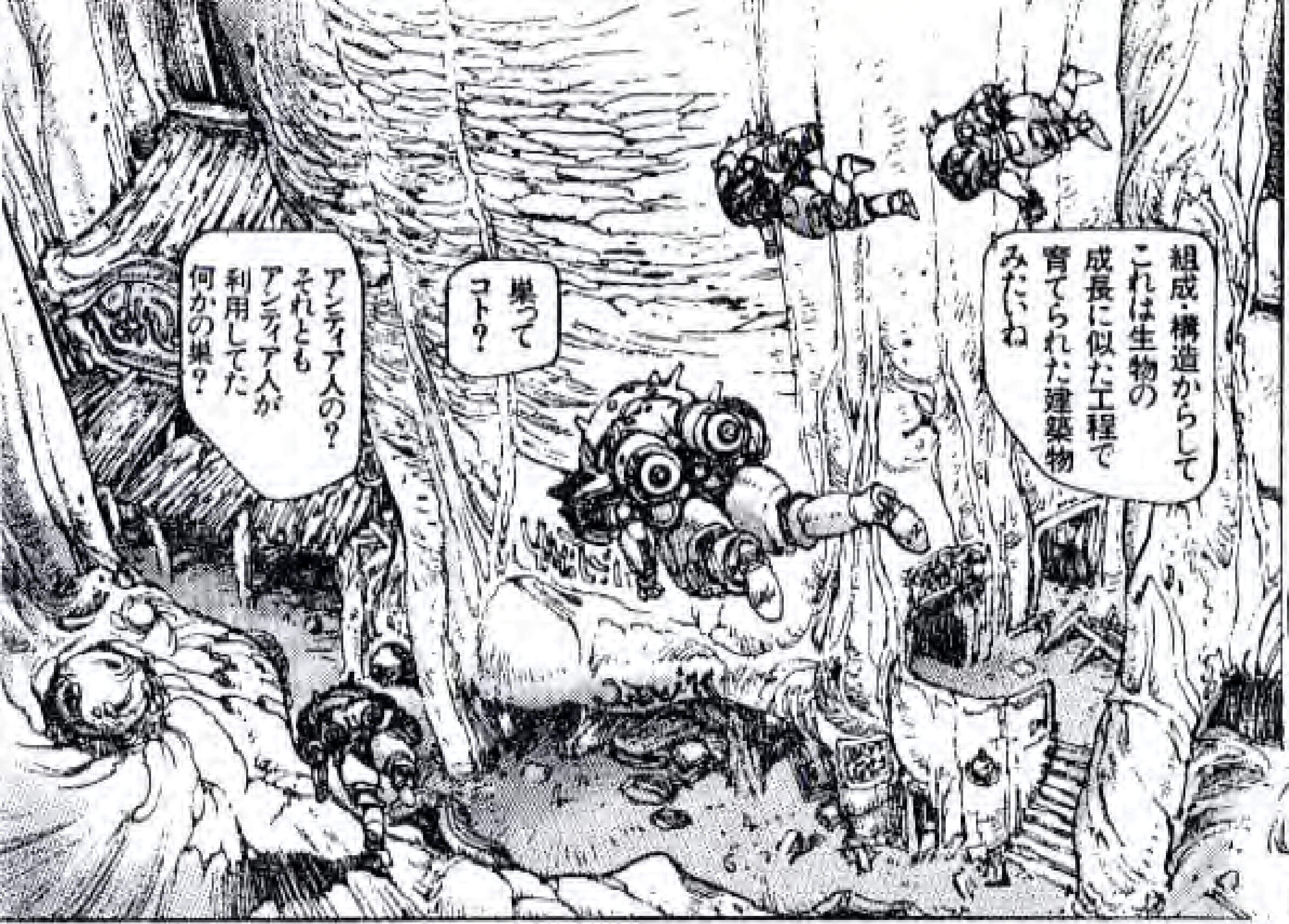
都市の規模はアンティア人の組織力を示し、破壊のキズ跡から「戦術的とは言えない弾道弾戦」をしたことが判る。港に横たわる武装艦や、生存者を検知できない点が実にブキミである。アラクトラは念波ステルスと念波シールドを使用中（光学ステルスも装備している）。

▲このメンバー内ではクリちゃんとソルトがネプタニアン(ネプタニア星系人)である。



◀ゲッペルじーさんは火星生れの太陽系人(ソラン)だ。

立体映像みたいなのはホログラムではなく電脳映像で、脳には見えているように知覚されるが網膜には何も映っていない。現状では全員がフルアクセスしているので見えているが、もし脳内に電脳体組織を持たない者やアクセスしていない者がいると、2人が何もない空間を指示して口論しているように見える。前にも書いたが彼らは遺伝子の上で電脳組織を持っており、生まれたときから完全サイボーグ状態なのである。メンバーのうちマルチナは念動体と呼ばれるサイキック組織（クラスは違うがホウセンカ号やアラクトラ号が航行に使うシステム）も持っている。電脳体がもっとも発達しているのは当然ながら情報係のクリちゃんである。



降 下調査はマルチナ班が行い、パストン班はバックアップを行う。タテ型のトロスでイスキュースを装備し、緑の光に乗って地上へ――。
『記念すべき第1歩』が大騒ぎにならないのは「誰が〜」ではなく「自分にとって最初の1歩」が重視されているからである。



た だ、やみくもに都市へ降下しても意味がない。探査機や衛星の情報をまとめ、交通ネットワーク（道路や通路の網）の状況がよいブロックにもっとも多い同じパターンの部屋または建物を捜す。住民にとってもっとも便利な所には、もっとも必要なものがある、との判断である（必ずしもそうであるとは限らないが）。そして割り出されたのが下図。どうも見た目はコンビニエンスストアのようだ。特徴的なのは、おそらく衣・食にかかわると思われるモノモノにまざって置いてある輝白色の半装甲スーツと、それに描かれているハチのマークである。



■その頃、ホウセンカ号のコロプス達は中央制御脳の端末の1つと会話していた。



▲そのココロは痴的欲求なのだが、ブレインは生物の要求にちゃんと応える。



▲彼らの目には武器でないものもすべて武器に見えてしまうのだ。再度言うが人間は目ではなく脳でものを見ている。認識が物の正体を作るのだな。

調査されているすべての視聴触覚やスキャンｅｔｃは、アラクトラのメインブレンとサブブレインの１つに送られ分析される。文字の登録、解析や社会システムの推測、そして何が起こって住民は、いつ・どこへ・なぜ・どのように去ったのか?!　他の地域の住民は？

ゲッペルじーさんの通信→





6





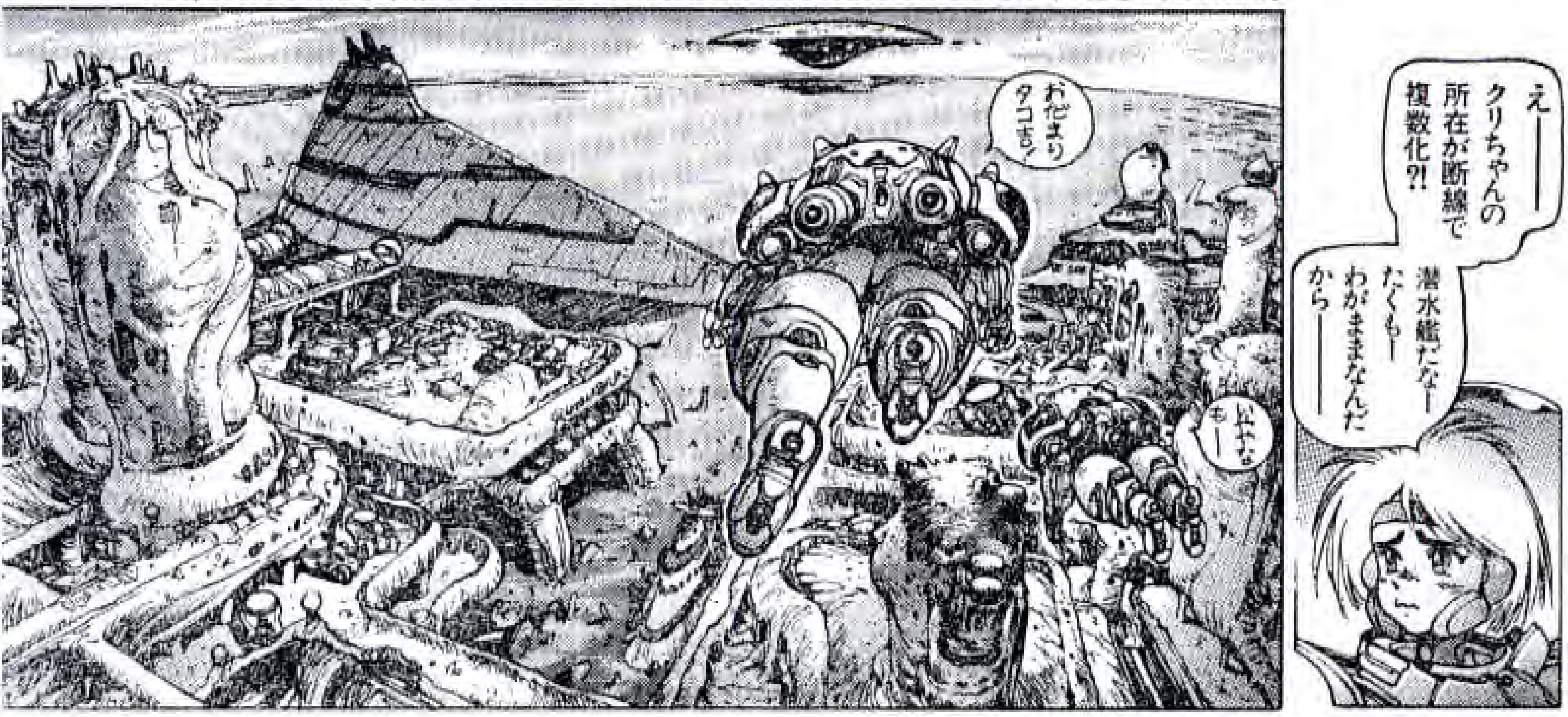


知的生物だからといって必ずしも文字や言語が伴うとは限らないが、判りやすくするため、アンティア人の文化は現在の我々に極めて似かよったものであると設定する。ま、しかし文字や言語がないと知的生物であるかどうか判別し難いし、ここはひとつよしとしておこう。（え？　電磁波の加工？）え？　このように地球ショウヴィニズムに、どっぷり漫った異星文明など見たくないって？　しかし、ホウセンカ号が目的地を決める段階で既に「地球に似た条件の惑星―重力や太陽からの距離、組成ｅｔｃ」を選んだので、そこで発達する生物の型は、長期的変化を乗り越えられる適応力ｅｔｃの条件によって、おのずと限定されてくる。成功している炭素生物の例作は、我々が知る古生物や、現動・植物・微生物ｅｔｃなので、既知の理屈を適用すると「どこかで見たような姿」にしかならない（想像力をいくらバタつかせたところで、現実の生物の妙の足元にも及ばない）。したがって本作ではそんなに凝るよりは、別のテーマを追う（とんでこともない生物を知りたい人は、図鑑を見るか、アマゾンへ行くかするとよい。別に異星人でなくても、とんでもない生物が地球上にゴチャマンと存在している。「知性」ということでいえば、イルカの霊長、イヌｅｔｃ未知の生物がたくさんいる。一番面白いのは人間のコドモだが――）

▲上のコマで本のように見えているのは我々の知っている「本」である。これで言語や文字、また、それらによって記された膨大な情報が手に入る。そのことは大きなことだが、ここで重要なのはそれらが風化していないことである。気象の変化が乏しいのか、アンテイア人がいなくなったのがごく近日なのか……。

情報収集は上空からアラクトラのトロススキャナーで行い、メインブレインで分類・解析する。出入口のレジらしきものから、ここが本屋で砲弾をうけて壊れたことが判明した。

▼クリちゃんの所在が正確に把握できないのは、霊能探査の時間軸が前後して同時にあちこちに反応が出るから。フルコンタクト中なら反応の強度や衛星中継で、たとえ地下にいても場所を推測・特定できるのだが。



ル イスフロスとソルトはとりあえず仲直り(?)する。しかし、お互いに自分らしさを相手に投影しているうちは、2人の危機はいつまでも続くのである。寛容さや忍耐がなければ「自分らしさ」や「自己主張」は単なる自分勝手・わがままでしかない。



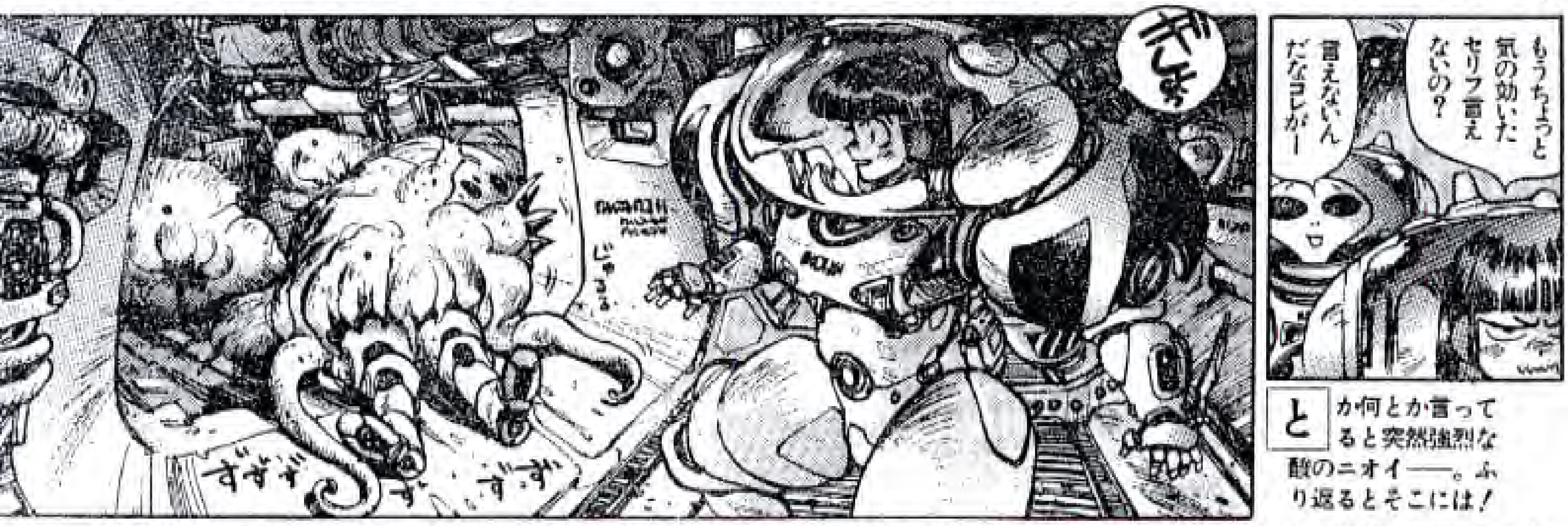


マルチナのように念動体が発達していると、思考が漏れ出して相手に伝わってしまうという弊害が起こる。制御は非常に難しい…。当物語世界のように超教育システムや生態電脳・外念伝達が発達していても、やはり「愛」は「正義」よりも罪の深い言葉なのである。しかしながら残念なことに「愛」は士郎正宗の得意分野ではないので深くは追求しないでおく。

▶タコ吉の反応は、対ヘクタクラン用マニュアル通りのもの。



浸 水している船に潜入したクリちゃんだが、ピラミドレガリスの場合、重心位置に必ずあるはずの正水晶がこの船にはないので少々あせりぎみ……。ただの箱船となればゲーベルじーさんにあわせる顔がない――!



と か何とか言ってると突然強烈な酸のニオイ――。ふり返るとそこには!

前回誤植のコーナー:2p目上段「『航空暦』はホントは『航宙暦』」という文が、実は「『航空暦』はホントは『航宙暦』」という文。ややこしー!7p目2コマ目下「蜜蜂の蜂とは違うぞ」は「蜂蜜の蜂とは違うぞ」。8p目3ツ目のフキダシ「蜂蜜には見えないよ」が「蜜蜂には見えないよ」。何?写植屋さんだけでなく読者も読みづらいって? コンテなもんですみませんねえ……えへへっ。

▼我々のよく知るスズメバチもカチカチと大顎を鳴らして威嚇音を出す。賢明な動物はこの段階でその場を立ち去るべし。

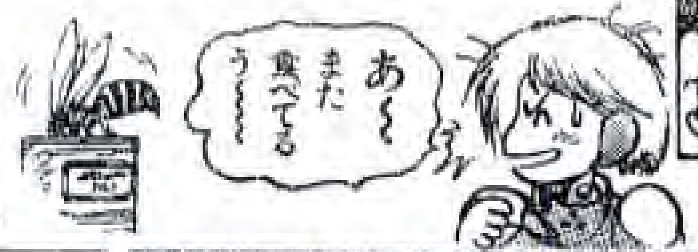
パニくって制圧機のセフティを外し忘れている▼



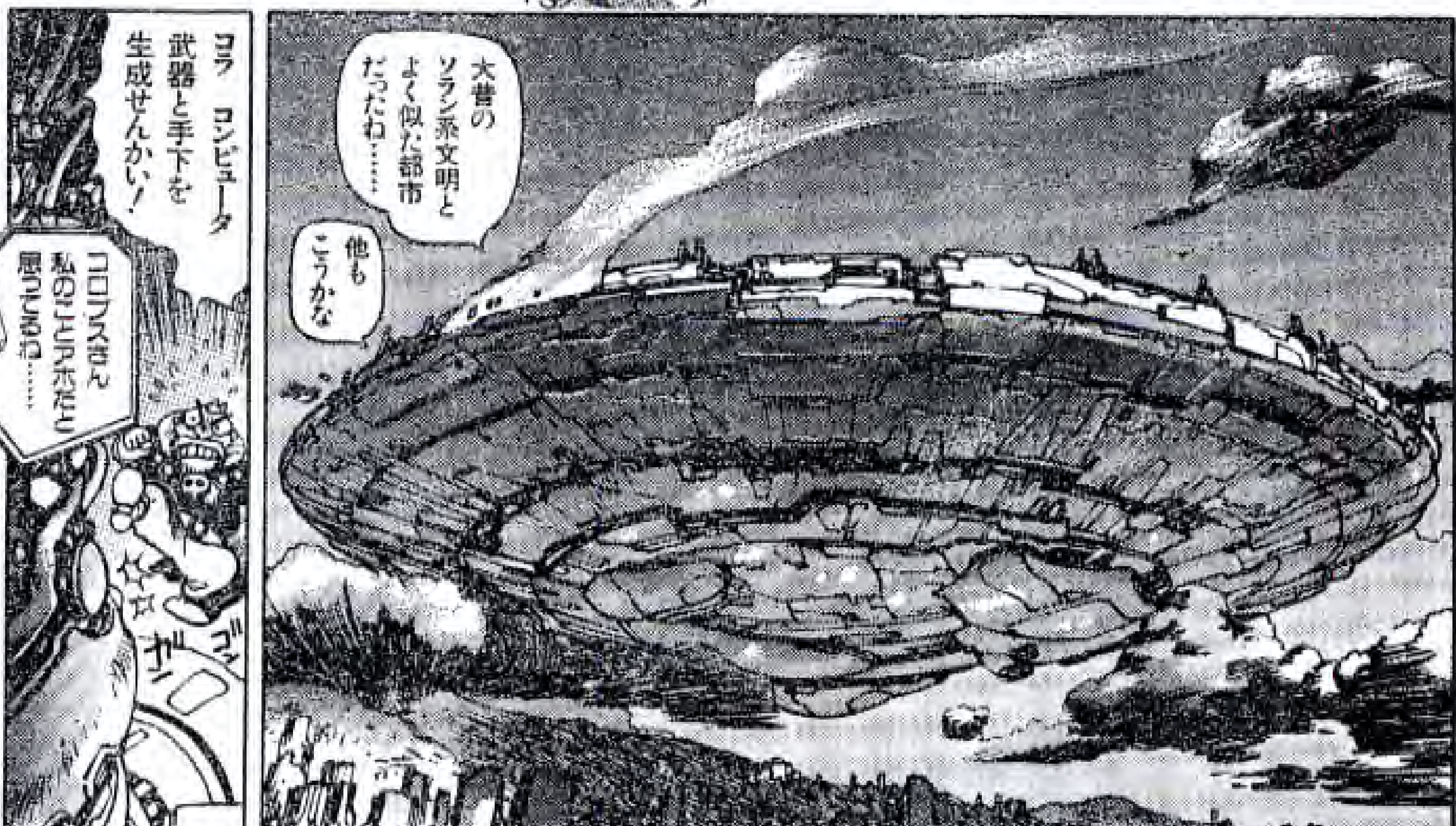
◀操護の不手際は、クリちゃんがフルコンタクトしていないためである。

リ ゲリアンは元来、爬虫類型生物が進化した種だが、牛の子宮十脳を応用した「大量生産」を始めて以来、氏族を重んじるシロアリのような存在となっている。したがって個人の名はない。ローズ、リゲリアンハナナシ共にメインブレインとフルコンタクト中だったので、死の直前の状態で再生成が可能である。死因を調べるためにシュミレーターで、出会ってから1時間ごとのローズを再構成し変化をみたところ、コンビニで食べた物質が体内で硬化したのが死の原因と判明した。個体の記憶を少しでも多く残すため、死の直前のローズを生成し同時に体内の物質を除去し経過を観るが……。

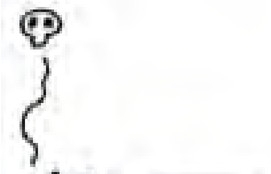




よほど強烈な誘引物質らしい……。



ロ ーズが食べていた物質の容器に表記してあった文字が「ハチごろし」であることはこのあと16時間後に判明する。このハチはアンティアにおいて相当優位を占める生物らしい……。



てなトコロでホウセンカ号は都市の上空を通過し、次なる座標へ…。

つづく　次号11月上旬発売

前回までのあらすじ
西暦二千二百年、人類は生命体との出会いを求めて、地球より遥かかなたのヒューストン星系に調査団を派遣した。調査のために5番星に接近したシャトルはトラブルから地表へと…。

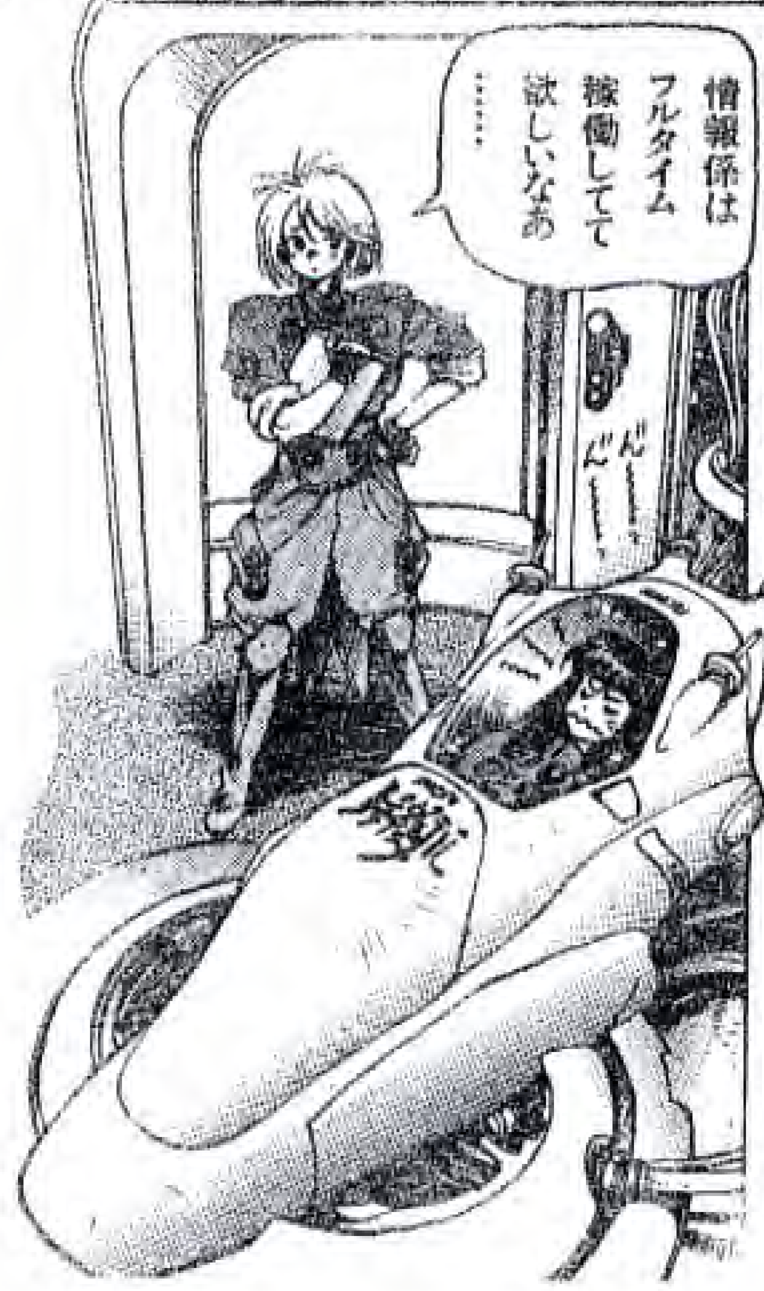


1

▲サイバースペース内にあるクリちゃんの私室。物理的クリちゃんは自分の部屋のパーソナルパックで寝ているわけだ。



◀そのスペース内でくつろいでいたら中央脳の教育システム「反省機」がやって来てお説教をたれているというところ。



◀私室のパーソナルパックでうなされるクリステナ。理屈では電脳ダイブ中うなされることはないはずだが、なぜかこうゆうことは起こる。マルチナとアクセスすれば電脳私室へ入れるが、うなされるような世界に入るのにいまひとつ気がひけているわけだ。

▼ソルトは第１回降下調査時のデータを検討中。特に大量の本の中から信頼性・データ性の高そうな情報を光速で選別する。

マルチナの私服。着換えはトロスに登録してある▼

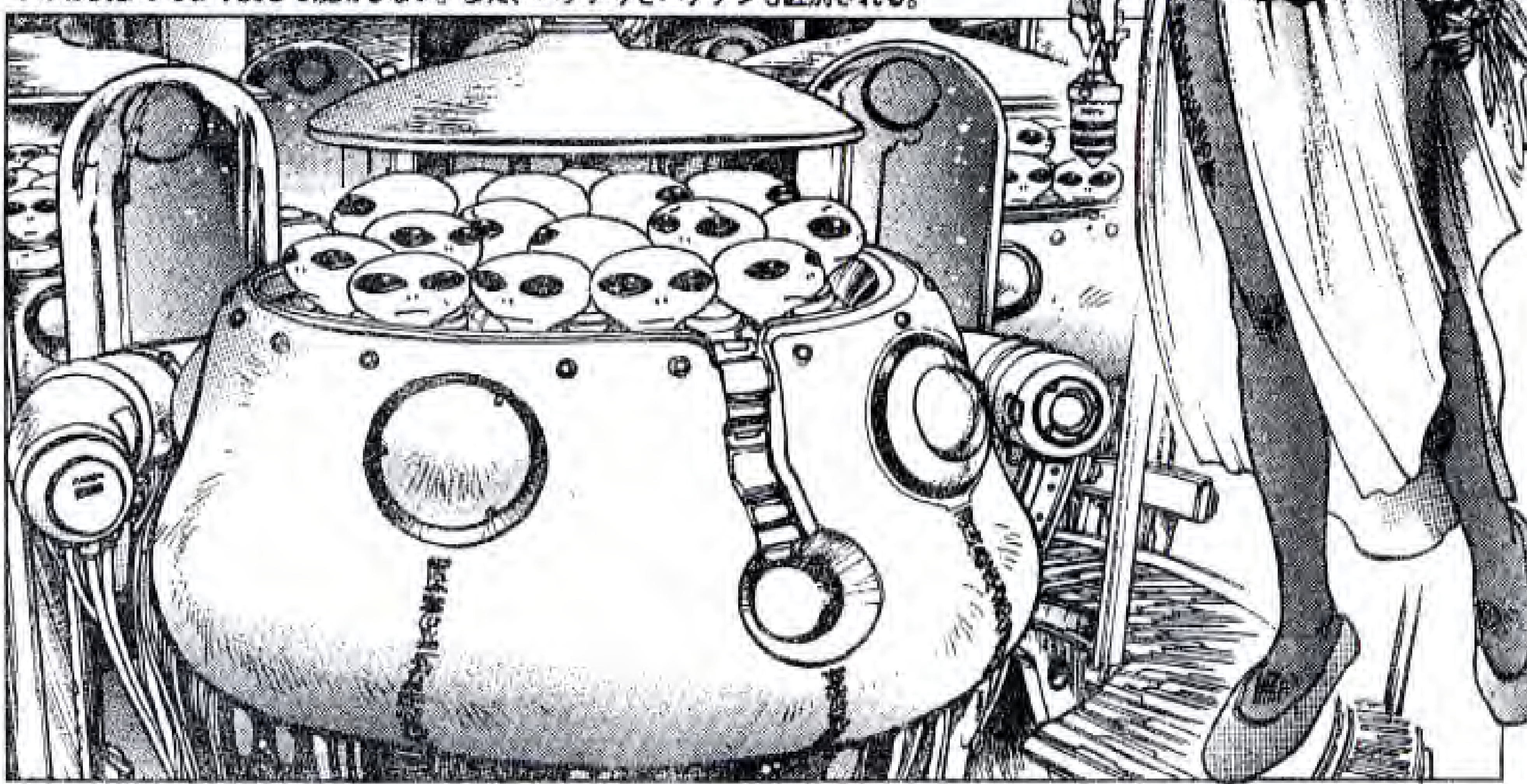
■個人の名がなくとも、電脳化・智能化の進んだ彼らには、対象の概念や代名詞があれば意志の疎通は十分である。

■「タコ吉」や「タコちう」というのは地球系人が使う差別用語なので一般的には使用されない。





▼リゲリアンの栄養補給タンク（風呂状のもの）で通称「ヘモツボ」。氏族ごとに使用ツボは決まっており決して混用しない。また、ハナアリとハナナシも区別される。





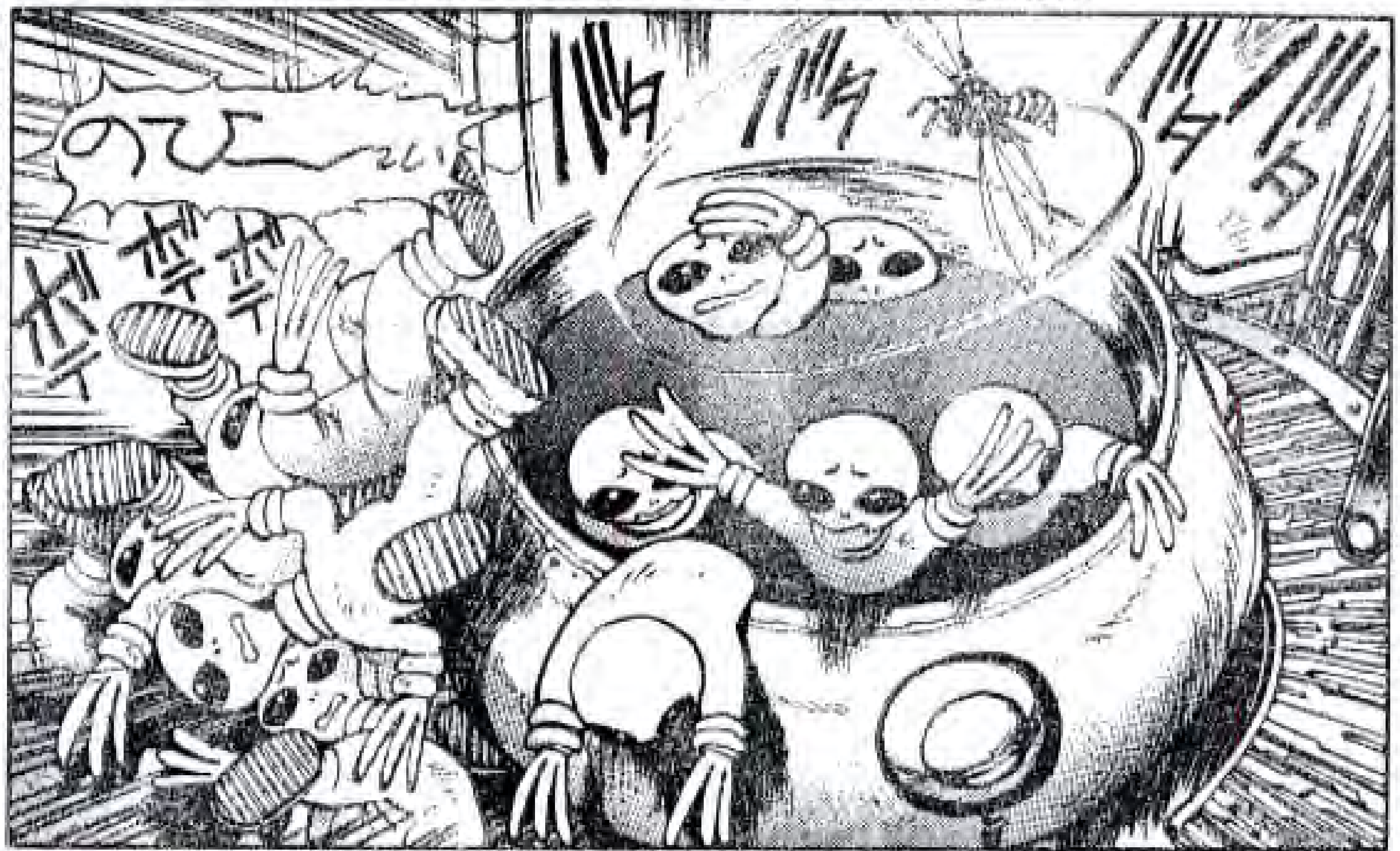
リ ゲリアンが浸っているのは我々が知るところの「血」である。彼ら自身の血は緑色なのだが、赤い血の栄養・生気をヒフから吸収するそうな。よく知られたところでは牛の血を根こそぎ抜いていったり、人の血を喉の奥の小穴からちょろちょろと抜いたりしているそうだが、当作ではフェルナ星の食用生物ロフスから採血したものを使用しているとしておこう。（トロスで生成するのだから何の血でも問題はないわけだが）

彼 ら（彼女ら？）は元気なとき、緑っぽい顔色をしているが生気が失せてくるとヒフがグレーになることから一般的にはハナナシをリゲリアングレー、ハナアリをラージノーズグレーと呼ぶ。どちらも元来のリゲリアンではなく、その大量生産アンドロイドで消化機構や生殖機能はない。ハナアリのほうが指揮系統の上位にあって偉いらしい。女王こそいないがシロアリやハチを連想していただくと理解しやすいと思う。



▼怒ったローズの反響の図。音声・思考どちらを読み取ったかは判らないが知能は高いらしい（ただカゲキすぎるのは困るがー）。血ナベの血が飛び散っていないのは彼らの超ハイテクのタマモノ。水面3センチより上に血の分子が出ることはない。風呂上がりは常にドライなのだ。ああ便利。





ローズは基本的にはミツバチに似た構造なので刺しても自身が死ぬことはない。毒は我々が知るところのアンボイナガイと同様のコノトキシン主体の物質であるとしておこうか……。もちろん上図のリゲリアンが死亡・再生成されたことは言うまでもない。



■リゲリアンは既知種の中で特に歴史のある種というわけではないが、このメンバーの中ではどちらかというと歴史の長い種族である。かつてソランへの干渉法をめぐってヘクタクラン〈六種族系〉と争った時期もあった、としておこう。

■こちらはさまよえるニッキ。手には彼女の宝である清水晶。





前回の誤植コーナー：3P目中段「必要最少限要素」「ホウセンカ号」、5P目中段「関連物質」下段「相反則不動制御装置」「小火器」、6P目「聞こえとるぞ」「イルカや霊長」、7P目中下段「ゲッベル」以上かな……。

▼ゲッベルの私室。メカはベッド代わりにしている戦略中の軍艇（内容は別モノ）スターエース攻撃機。



TO BE CONTINUED!

※雑誌がめでたく月刊化したので、わしは減ページね。このほうがお手ごろかな……？

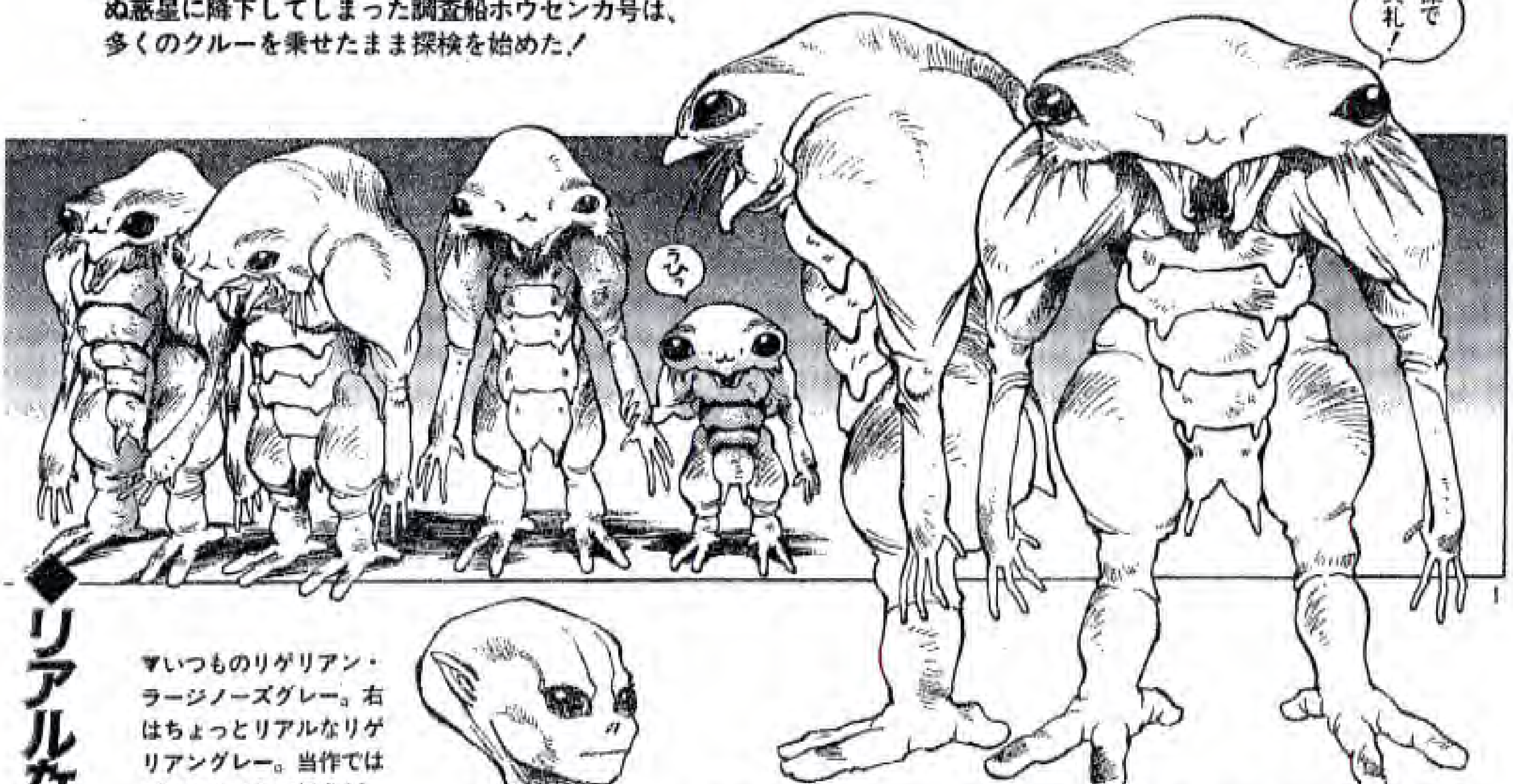
好調・士郎正宗の描くリアルイメージワールド!!

NEURO HARD 蜂の惑星

第6話「水棲種」

士郎正宗
MASAMUNE SHIROW

前回までのあらすじ/海賊の襲撃によって見知らぬ惑星に降下してしまった調査船ホウセンカ号は、多くのクルーを乗せたまま探検を始めた!



▲アンテイアンの形容。胴と肩甲部は外骨格、四肢は内骨格で二脚二腕のよくある形態である。性は三種あるらしく、仲間づきあいに関する書物が非常に多く発見された。(性が二つでも大変なのにな!) しかし、フィクション・ノンフィクションの区別がまだつかないので情報の整理に手間取っている。

◆リアルなリゲリアン…ちょっとコワイ……(笑)

▼いつものリゲリアン・ラージノーズグレー。右はちょっとリアルなリゲリアングレー。当作ではデフォルメして扱うが、本来は右のような形状ね。



ここで是非とも読者諸氏にお勧めしておきたいのが早川書房・刊「ワンダフルライフ」スティーブン・ジェイ・グールド博士著である。本当にワンダフル!



▲テーブル上の小型種は探査体で、通常はこのような所で働くことはないのだが、ローズの件といい、リゲリアンの抗議の件といい、ブリッジクルーはトラブル続きなので、メインブレーンがクリちゃんをさしおいて送り込んだのである。クリちゃんピンチ! 不適合と判断されればファイルに逆戻りだ。

下図の白い円の中心部にホウセンカ号は浮いており、矢印の方向に進行している。



マルチナたちが平面地図を用いることはまずない。立体場図をそのまま電脳体で記憶するのだ。念のためアラクトラ号には予備の地表データが取ってあり、無接続で保存されている。この地表情報は立体でホログラフ化することもできるし、平面図にすることも、模型地図を造ることもできるが、地表データ単独で使うよりは、その上に他のデータや自分たちの座標を写し込んで使うのがフツーである。この概略地表の最小要素は1ミリ角であり、それ以下のサイズの情報は含まれない。



▲このクレーターをはじめ海や山に名前はつけられず、結局あの山とかこの海とか概念伝達されることとなるが、いずれ俗称は発生する……。



▼こちらはバストンたち「水棲種」の生活区画。出入りのたびにトロスで構造変換して行き来する。



■ズイズイとは深度30ｍあたりに暮すバストンたちイベリット族の俗称である。バサバサとは空気中に暮す生物一般の俗称。バストンの外見は我々もよく知る人型だが、肩関係の骨格が頭骨と関わっており、脊椎は大型で助骨はエラのスリット下部から脚のつけ根（左右両骨盤）まで続いている。大気中では厚い脂肪を削減して重量を落してある。おとし過ぎると冷えてマズい——。



■空中生物の生活層が高度ごとに大体決まっているように、彼らも深度ごとに民族や生活が少しずつ異なる。彼女らは、浮き藻で暮すイルベットという親しみ易いが口も悪い民族である。イルベットは雪白く夜光し、水中歌は宇宙一美しいらしい……。





■ダイブとは精神感応によって行う「肉体を要しないＳＥＸの一種」である。当事者のうち少なくとも１人のエンメヘス種かあるいは念動体をトロスで増装した者でなければダイブは不可能である。

次々と明らかになるクルーたちの意外な生態！次号ではなにが？

ところでベッソンのアトランティスは必見!!!!　創作や発明や人がいかに自然や発見や神に遠くおよばんか…しかしなあ……。





デフォルメしてあるので判らないが、イルベットはアシカやオットセイに似たカオつきで、アゴが小さく瞳が大きく美しい。髪のようなものは太硬く発達した知覚系で、頭部で起こる水流の乱れを緩和する働きもある。バストンたちイベリットは水底種なので、足があり、顔もヒトに近く偏平である。ニッキがイルベット型に変容したのは、水中案内という目的から移動を伴うからで、特にそうでなければならない理由はない。

■バストンたち（イベリットやイルベット）は大気中ではマテューンと呼ばれる。両性がゼラチン状の物質で包まれた卵を体外に放出し、水中で卵が結合。結合卵は一方、また２つの場合、双方がハラの袋の中でしばらく育てる有袋種である。座標感覚が特に優れ、念動システムによる航宙では彼らマテューンの存在は実にありがたいものである。バストンがニッキを招待して幸せ一杯な頃、マテューンの特別班はアンテイアの水中へ次々と降下、調査のために惑星中に散開して行っている。



メインプレインのお陰でコロブスの手下ボンロクの容疑はすぐ晴れた。それよりも大問題なのはマルチナの不調である。特に呪いをかけられているわけでもないのに構造上のトラブルが続くのはトロスのファイルにバグが出ている可能性がある。もちろんトロスはかなりの数があるのでなんとかなるが、異常があるとなるとフロ、トイレ、食事、着替えetcすべてに影響が出るし他のクルーにも同様の支障が出ないとも限らない！　あるいはトロス以外にマルチナに何かが起きたのか?!
以下は次号にて――。

TO BE CONTINUED!!



ポリガミーとは一夫多妻制のこと。クリちゃんにとってイイ男とは、複数の女性を等しくかつ十分に養い、また愛せる男であり、ソルトにとってイイ女とは、独占欲控え目で協調性があり、かつ経済効率の良い淡泊な女である。どのような条件がこのようなシステムを導くのか考えてみよう！ 生物学的要因？　宗教？　生態学的圧力？環境？　etc……。
（いろいろ想像して楽しむための問いかけなので解答は用意しないよ）



好調・士郎正宗の描くリアルイメージワールド//

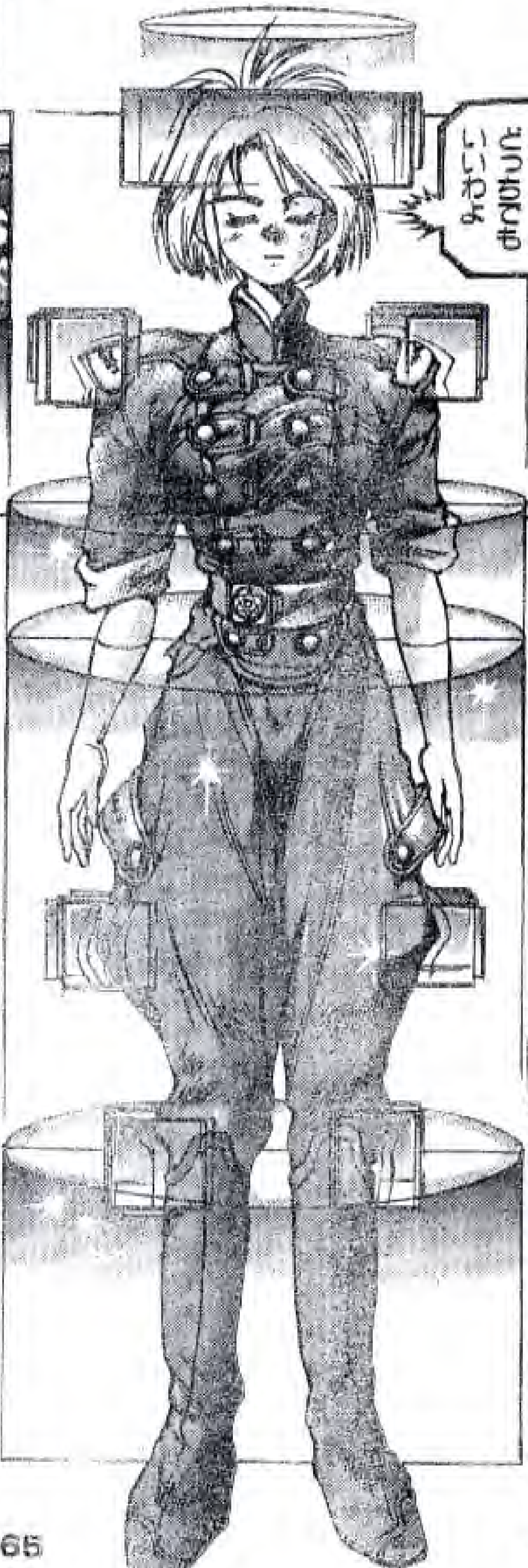
NEURO HARD 蜂の惑星

第7話「アンテイアの謎」

士郎正宗
MASAMUNE SHIROW

マルチナの調査結果や如何に？

前回までのあらすじ／マルチナが原因不明の不調を訴え出し、ホウセンカ号内は大騒ぎに。トロスのバグなのか？　それともアンテイア蜂・ローズになにか原因が……？





異常をきたしたマルチナは、チームのルイスフロスとリゲリアンによってドクトロスでスキャンされている。上のコマで一緒に分析を行っているマルチナは、新しくファイルアウト・生成され、事の次第やいままでの経過を客観学習（電脳入力）したマルチナで、スキャンされている倒れたマルチナではない。新しいマルチナを便宜上マルチナ'と呼ぶ。

オリジナルのファイルから、日々トロスを使用するごとの各状態、倒れた現在の状態を順に比較すると、ローズとの衝突以後に体内に混入した物質が体質を変えていっていることが判明した（事故の時、部分取り換えしかしなかったので、血液に乗って体を巡ったこの物質は除去できていなかったのだ！）。この時点でマルチナ'はマルチナの主観記録を学習（電脳&霊能入力）し、2人の差は「ローズ衝突による体の変化」と「倒れたあとの記憶・行動」だけになる（主観情報は100%複製できないので完全に差がないワケではない）。

注：我々が「魂」と呼ぶところの場、または現象は等しく生じる。魂は構造物ではなく、言語や論理・知識を含まないとしておく。

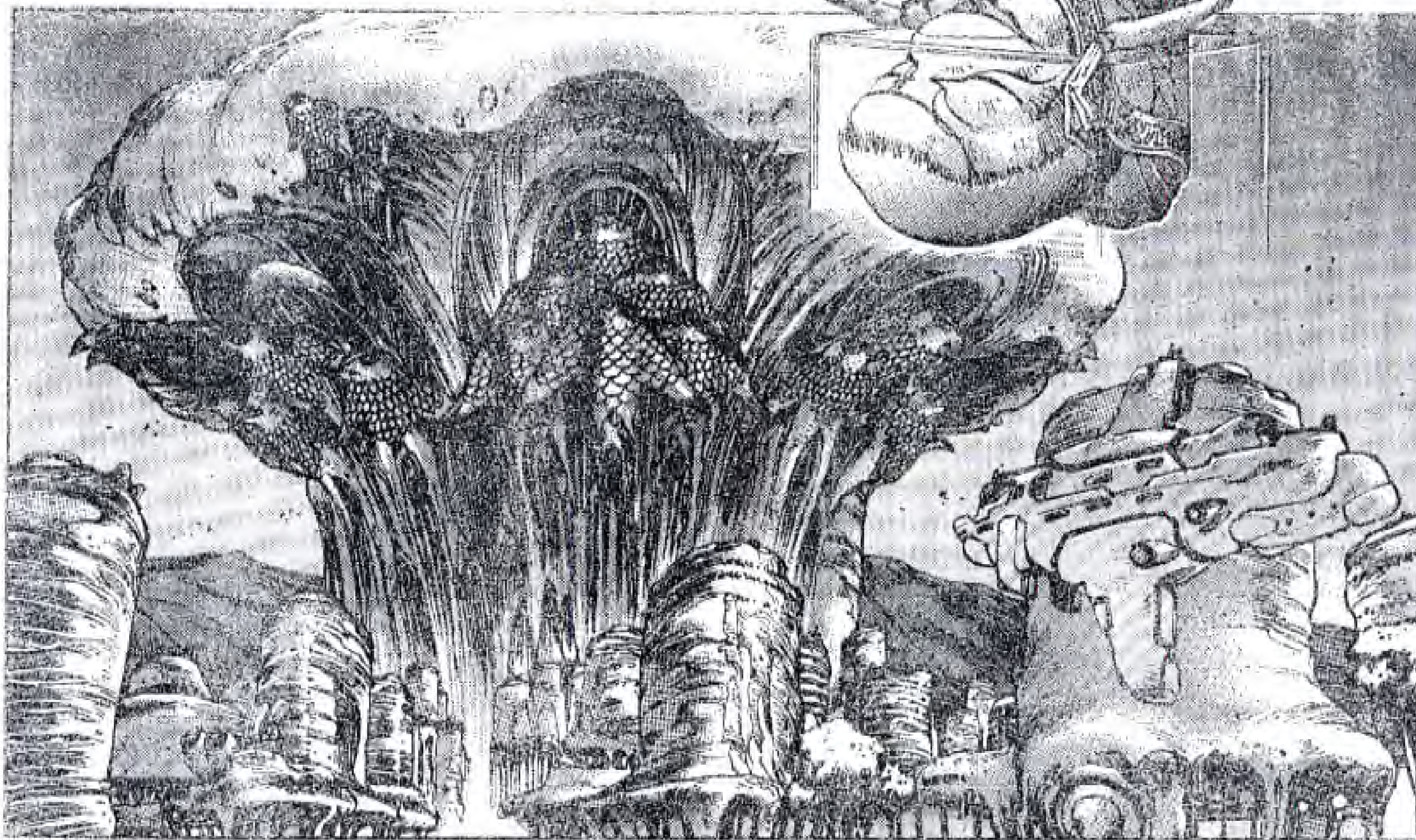


▲右のキャラは学者のクーヒッポス氏。研究対象はもちろんローズを始めとするアンテイアの蜂である。このあと、生態や生化学等、各分野に応じて順次ファイルアウト（複製）されてくる。腰から下の四角いのはグリーンライトで、浮遊車イスみたいな物だと思っていただきたい。彼は宙に浮いて移動するものだ。

12月号（前前回）の誤植すみませんのコーナー。3P目・5段目・上段、ミツバチ→スズメバチ（ワシとし[illegible]

クーヒッポス氏は、ヴォーム星のインキュラムスという知的生物である。頭部がデカいからといってそのぶん賢いというワケではないが、かつて、ある種の菌が脳を発達促進させるとわかり、次々と身体改造を進めた結果がコレである。彼女は電脳化（これはヘクタクランの技術）もしている。われわれソランと同じ大気中で喋ると、ボーッボーッという低く響く音ばかりでほとんど聞きとれないので、会話はすべてこの電脳体に依存して行う。ヒフはかなり固く、イルベットはインキュラムスをカキンコキンと呼ぶが、これは外骨格ではなく非常に細かい表皮の構造に由来するものである（ウロコみたいなもんかな）。





マルチナたちが一息ついたころ、バストン班はアラクトラ号で2回目の降下調査を行っていた。今回の調査対象はひときわ装飾？が凝った大型建造物である。スキャンした情報ではわからない、威圧的なイヤーなムードのところだが……この近くはほとんど壊れていない。

ちなみに海に出たマチューンたちは、ヌカバル星のタンギュという鯨のような海生爬虫に乗って調査を続行している。彼らは他の星でも見られるような水中生物を多数調査していたが、途中一つのチームがニルヴァーナという巨大生物に食われ（デューンの虫みたいなヤツね。もっと柔らかくて口器が肥大しとるけど）、それ以来緊張が高まっている（食われたあと、とりあえず脱出したが）。

基本的にマチューンは知的探究心や、生物学的必要性に迫られて外宇宙船に同乗しているワケではない。元々高度な知性は持つが、われわれの言うところの科学技術を持たなかったマチューンは、人生面白ければそれでいいだけなのだ。もちろん面白さの中には事故等のリスクやスリルも含まれる。日々是好日である。したがって、海洋調査もヘクタクランやリゲリアンが言うような調査ではない。楽しみ遊びながらのものなのだ。だから効率は悪い。

■ニルヴァーナは地球の海では激ｍ級だが、多くの星のさまざまな海で見られるポピュラーな生物の1つで、異種同型も多くある。われわれの知るところではマグロ、サンマ、イクチオサウルス等、クラゲ類、ウミユリ類などがアンテイアでも見つかっている（ニルヴァーナはイカに近い生物だよ）。

▶右のコマのニッキの発言は、バストンにとって「ヒマワリの花とヤツメウナギの口が似ている」と言われたのと同義である。バストンは反応しきれず絶句……。



▲装飾ビルの調査中、ニルヴァーナのニュースを聞いて電脳アクセスして資料を観ているバストンとニッキの図。ニルヴァーナの腹にくっついているのはヒルの一種。

■こちらはホウセンカ号内、手伝いの合間に非合理的・原始的な食事をとるコロブスの一味。

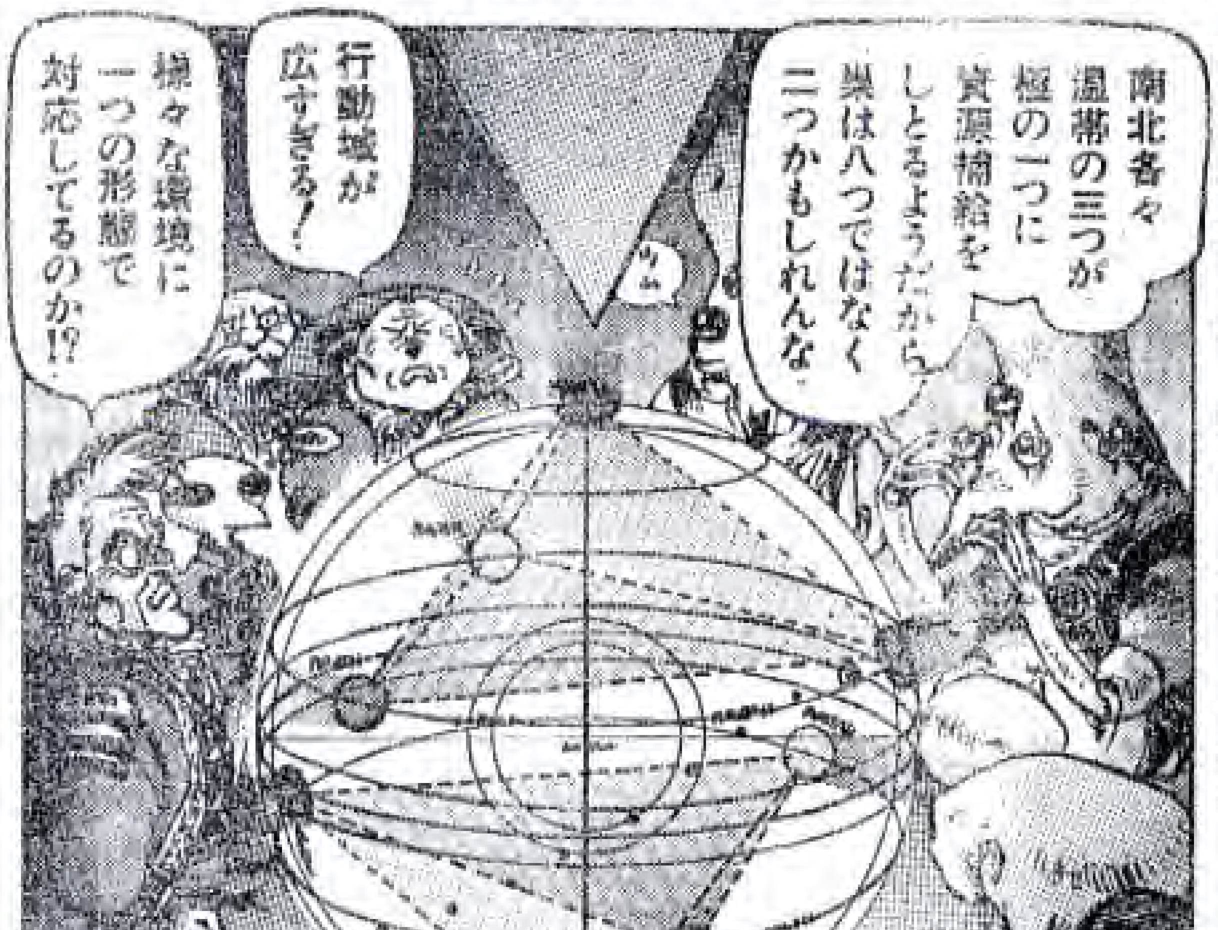


コロブスたちの不満足感は、長いゲリラ生活と、現状の満たされてはいるが制御された生活とのギャップにある。彼らが反対し、破壊していた惑星連邦は理合主義中心であった。合理主義ではない。個々人の自由や権利、責任を重んじ、そのために大量の食いはぐれ者（運が悪かったり、能力競争で敗れたり、やる気がなかったり）が生じ、ゆえにトラブルも多いが、都合の理屈を並べてどうにでも処理してしまう。本当にどうにでも理屈をつける（ひどい時はルールを作ってそれに合せる）ところから、合理主義ではなく理合主義という。当作現時点で惑星連邦が存在しないのはトロスの発明によるスターシードの流行でネットワークが崩壊したことにある（テレポート航法にも、イメージできる距離に限界があるため、たとえば同じ出発点から正反対の方向へ飛んだ船がどうなったか永遠に知ることはない）。

しかしそうならなくても、連邦はあまりに個人の自由を尊重するがゆえに、家族や男女関係、親子、教育、経済が崩壊しつつあり、瓦解は時間の問題であったと言われている。

対してコロブスたちは情理主義とも呼ばれていた。社会主義に近い考えで、多少非合理的ではあっても、できるだけ多くの関係者が、みな利益を得るようにしようというものである。身内主義・談合主義とも言う。はぐれ者を出し難いが汚職や密室性の温床となりやすいことから少数思想だったが、「浪花節」性ゆえに支持は硬かった。いずれの思想も遠い昔の話……いまはただ、さまざまな思想のネットワークと共理共存があるだけである。

注：ここでは共利共存という言葉を「互いに干渉しないことで生存という利を得ること」を含む意味で使う。しかしこれがなかなか難しい問題なのだ。たとえば、ライオンがシカを間引くのは共利共存であるが、個体にとっては……食われたシカは共利どころではない。人間と動物園の動物たちは、娯楽や知的探求心・愛情を満たす代りに安定した生存を約束されているために共利共存と言えるが、その関係は一方的に人間にゆだねられているものなので真利真存ではない。この共という言葉、非常にあいまいなのだな。



そのころホウセンカ号では、アンテイアの蜂への注目が急速に高まっていた。

惑星の表面８カ所に１万５千立方ｍ級の蜂の巣が確認され、しかもその周囲のアンテイア人都市の破損が著しく、壊れた兵器も多いからである。アンテイア人の行方不明と都市破壊の原因がどうやらこの蜂と関係があるらしい——。

アンテイア人があらゆる兵器を駆使してこの蜂と戦い、アンテイア人が消え、蜂が栄えて？いることは間違いない。

このことはアンテイア蜂の存在理由そのものにナゾがあることも示している（新造種なのか外来種なのか……）。

なお巣は都市構造物の上にあるので、「蜂が元来そこにいてアンテイア人が外来種」ということはない（この時点ではアンテイア人自体が外来種かどうかはデーター不足で不明）。

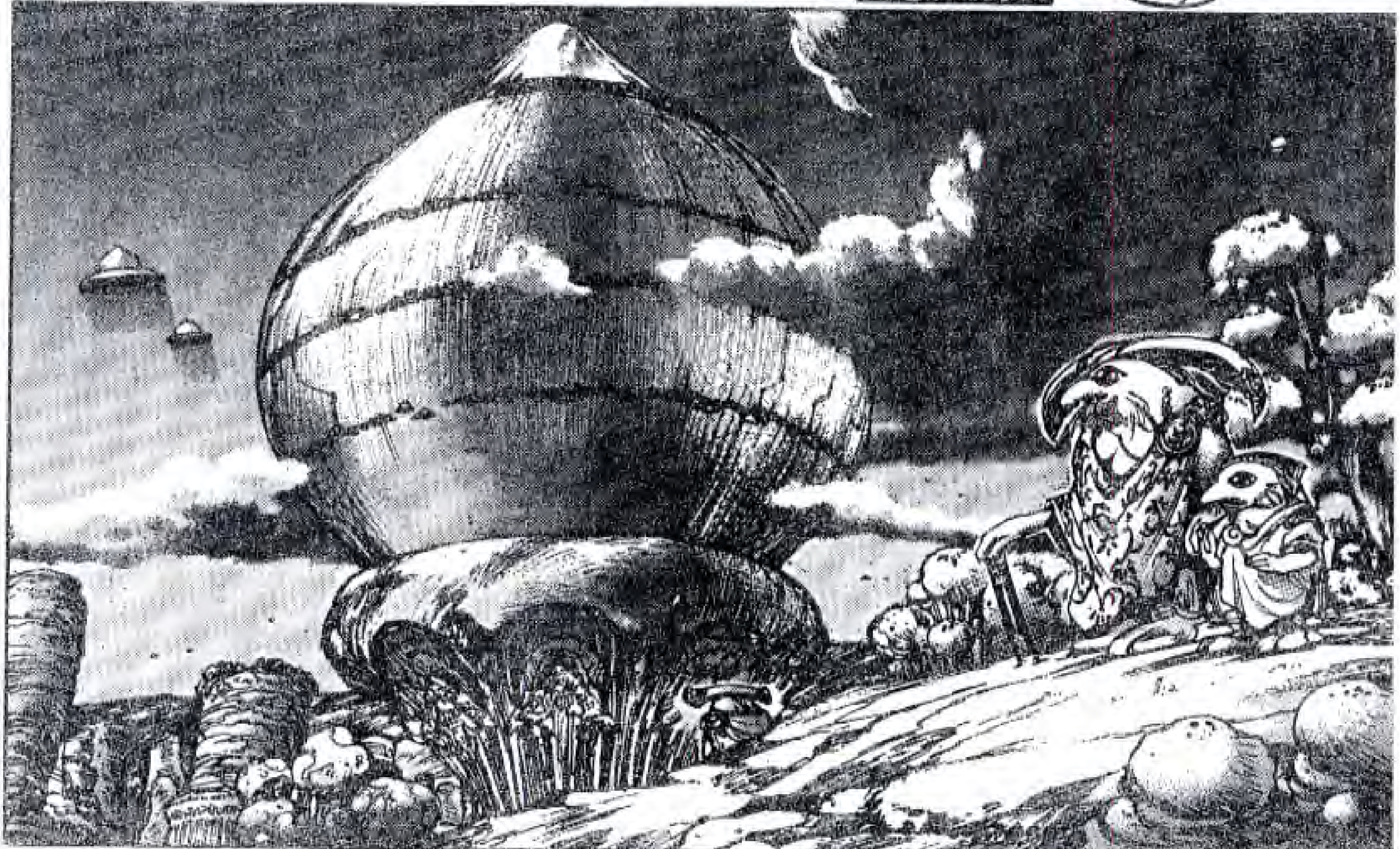
にしてはホウセンカ号と蜂とのコンタクトはローズ１匹だけである。巣には数えきれないほどの（スキャンが終わった時点でも増殖の動きがあるので正確な数は不明）蜂がいるというのに……。

◀ホウセンカ号内では、例によってあーでもない、こーでもないとやりあっている……。

▲見かけ上、蜂のテリトリーでないのは海上、水中だけのようだ……。文字通り惑星中に存在するアンテイア蜂!? 外宇宙からの透視探査で反応があった霊的障壁は、この蜂の巣の配置によるものだったらしい……。温帯の巣はわかるとして、両極の巣はいったい何をイミするのか……!? 温帯の蜂が極地の巣をバックアップする理由は……!?

▼アラクトラ号が調査中の大型建造物は、上から見るとコップのように中央部がくり抜かれている。アンテイア人の資料によると、そこには長径約2kmのラグビーボール型重力制御船がドッキングするらしく、中断された通路やチューブが多く見つかった。下図はその資料に基づいたラグビーボール船の想像図。アンテイア人はこれに乗って（各地に同様の建造物が残っている）宇宙へ出たのか……？　とするとどこへ？　近くの惑星へ？　遠くの星へ？　その辺の空間へ？





ローズを呼ぶのは何なのか？





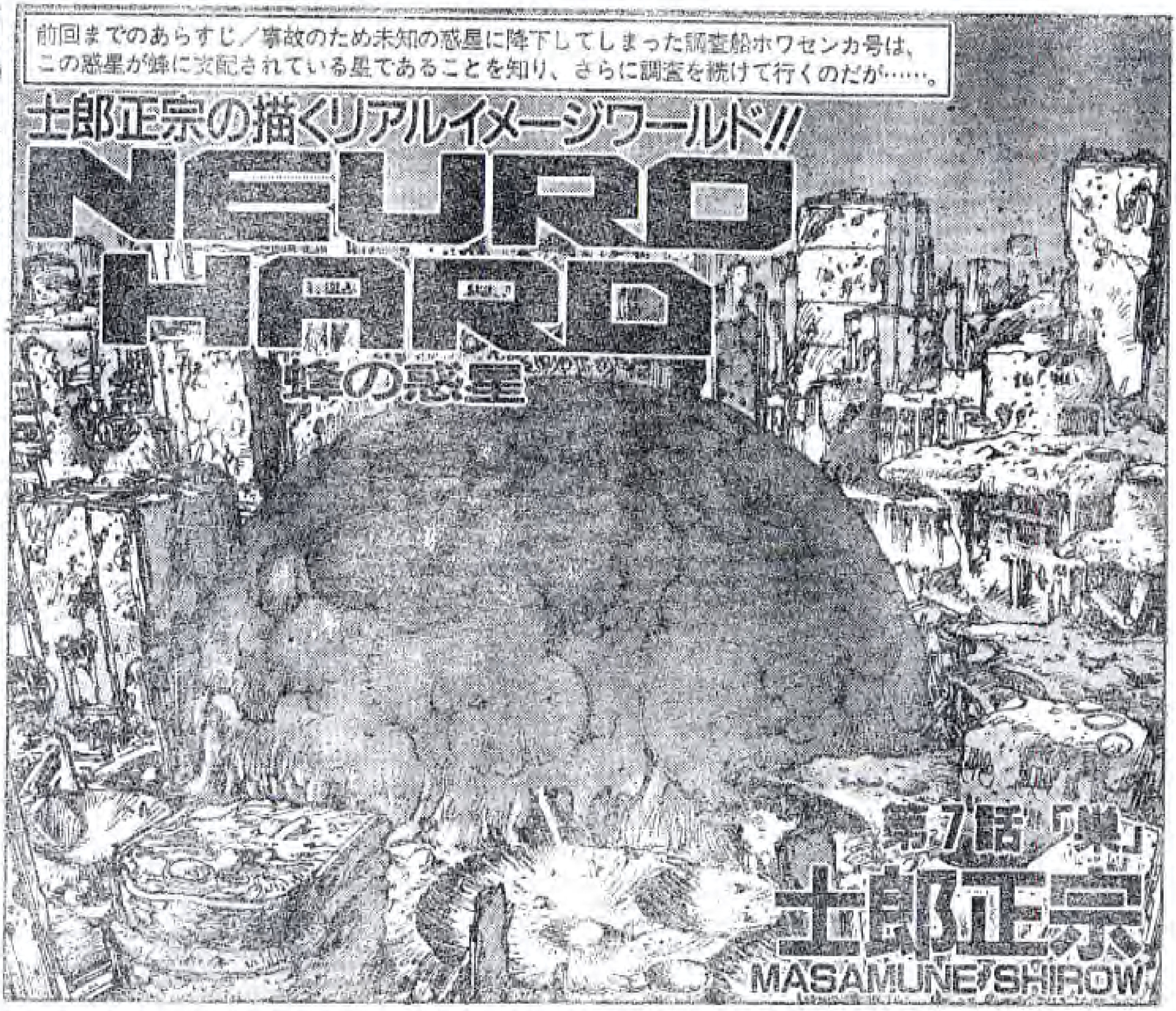
▲資料指定というのは、高精度の脳内プラントによりすべての行動と、担当の監視者による心理監視で、すべての心動を監視の対象にするということである。われわれが言うところの24時間監視の超ハードなヤツという感じか……。

このプラントは知る人ぞ知る針状のもの。脳以外のは身体制御監視用。自分の行動を客観的に見ると、普段自身では気づき難い喋り方やクセが発見できて面白い。最近はホームビデオも普及しとるようなのでこの感覚を知る人も多いのではなかろうか。

ク ーヒッポス氏が気にしているのは、マルチナと例の物質がなじんだということと、マルチナが見かけ上元に戻ったあと、ローズがマルチナ'よりマルチナにくっついていることである。マルチナとマルチナ'の、ローズに対する感覚にどういう差が生じているか——。そのしくみは？　その意味するところは？　その結果生じる自体は？　呼々……は次号にて。

TO BE CONTINUED!

ついに発見された蜂たちの巣……マルチナたちが調査に向う！

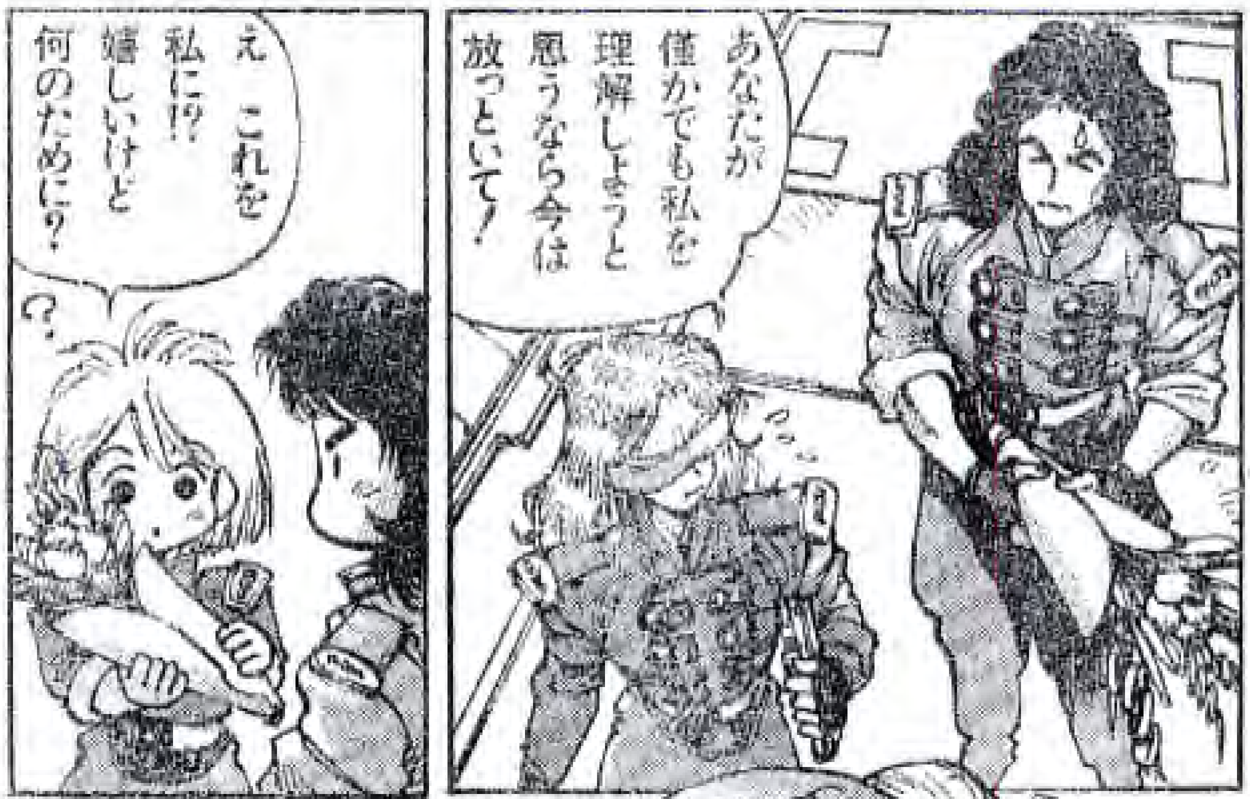


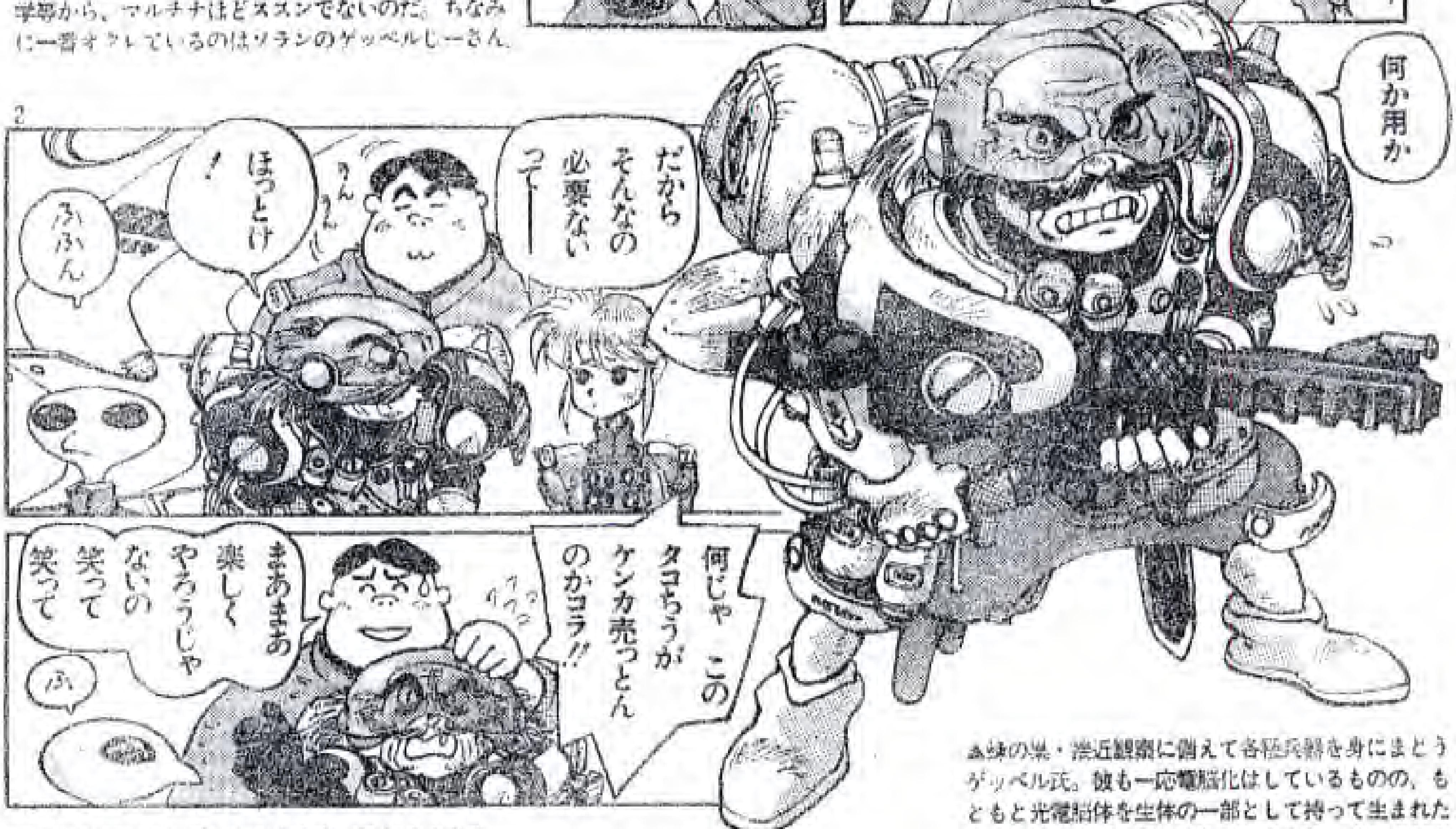
▲図は約35万㎞のハチの巣の上部。カーボンファイバーと高分子系材料で編み上げられたカゴであり、虹色に燐光りしている。かつてソラン（我々地球人のことね。名をつけたのはソランという言葉が月人・火星人・各コロニー人・木星衛星人を含むからである。）が戦時中に装甲服として用いた材質とほぼ同じもの。上と同様の巣が約40kmの間隔をおいて16基で1つのブロックを形成し、3つのブロックが約250kmの間隔をおいて1つのエリアを形成している。このエリアは惑星上に8ヵ所確認されている。つまりアンテイア上にはこの巣が384基存在することになる。巣の周辺では妙なことに兵隊だけでなく無数の蜂が飛び交って羽音が轟音となって周囲に響いている。



▲毎度のミーティング。ルイスフロスのカオのスクリーンは精神的なダメージを受けた状態であることの意志表示。一種の喪服のようなものか……。クリちゃんの意識は船のメインデータベースであるファイルにアクセスしておりここにはない。体はプログラムされた行動をとっているだけである。装備の白色化は対ハチ用である。ハチは黒い物を攻撃するという。これは主な敵が同じ昆虫などではなくクマだかららしい。香も対ホニュー類用のカクテルであるという。アンテイア蜂がクマを知っているかどうかは判らないが、アンテイア人に習って白くしておくのがブナンだろう。

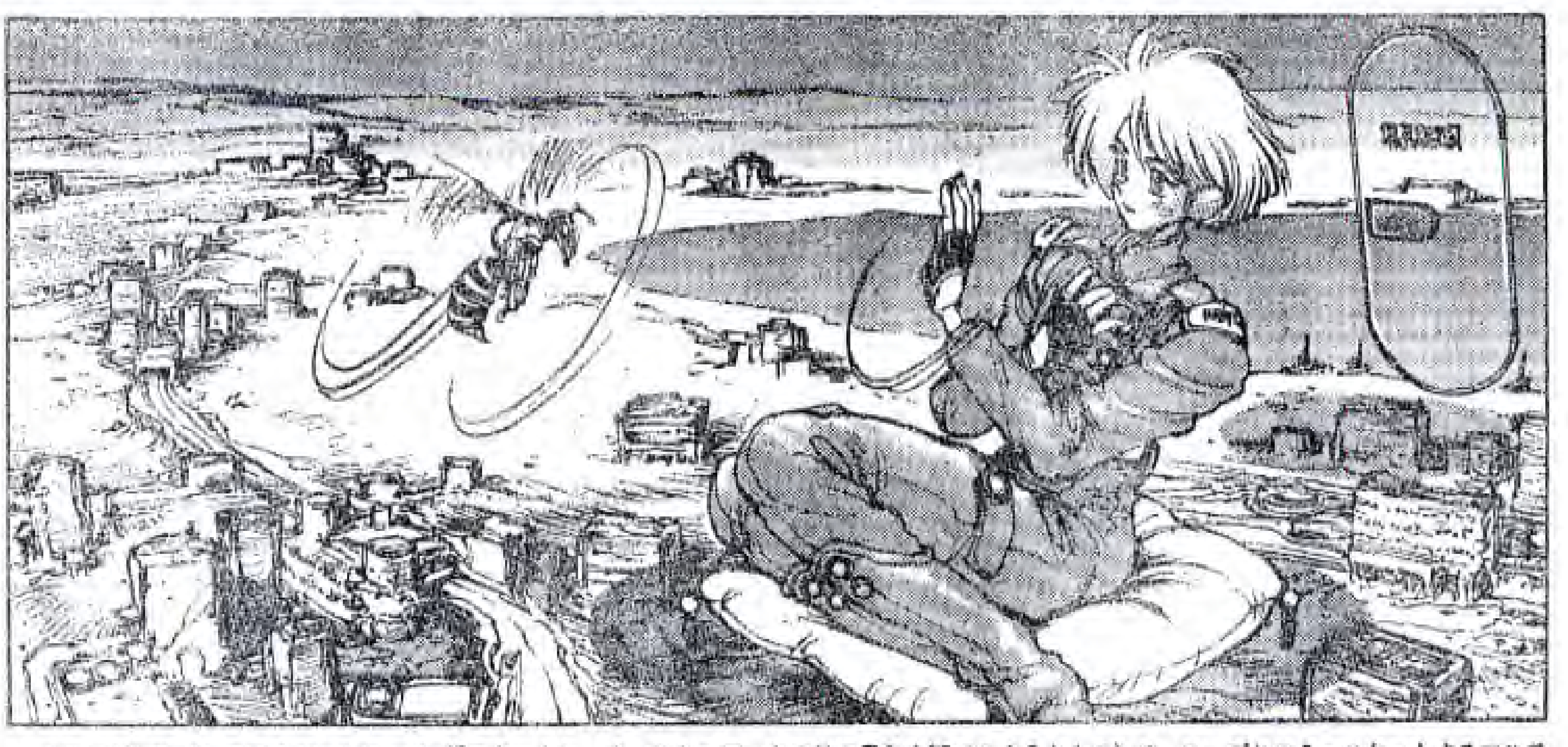
マルチナはある意味で、ヘクタクラン主体のチームの中では一番リゲリアンに近い感覚を持っている。特定の個人に対し、支配を目的としたつき合いや、精神的に特別深い愛情や安らぎ、共感を得る、といったつき合いをする必要性がないのだ。念動体や電脳体を使って、誰とでも精神的に極めて深いつき合いができるし（そうでなくてもメインブレイン「マザー」と常に直結できる）、トロスがあるのでもはや支配に大した意味がない。相手のゲノムさえ揃えば、何世代も進んだ型の子孫を生成することもできるばかりか、加工・改造して異種体も創ることも、自分自身が異種に変身（マテューーンになったニッキみたいにね）することも可能だ。性交渉による快楽も、電脳体等を使うと脳の許容限界までエンドルフィンに浸ったりもできるし何の不足もない。他のチームクルーも基本的には電脳体、念動体、トロス等の情況は同じなのだが、種族の慣習や様式、哲学等から、マルチナはどスススンでないのだ。ちなみに一番オクレているのはソランのゲッベルじーさん。



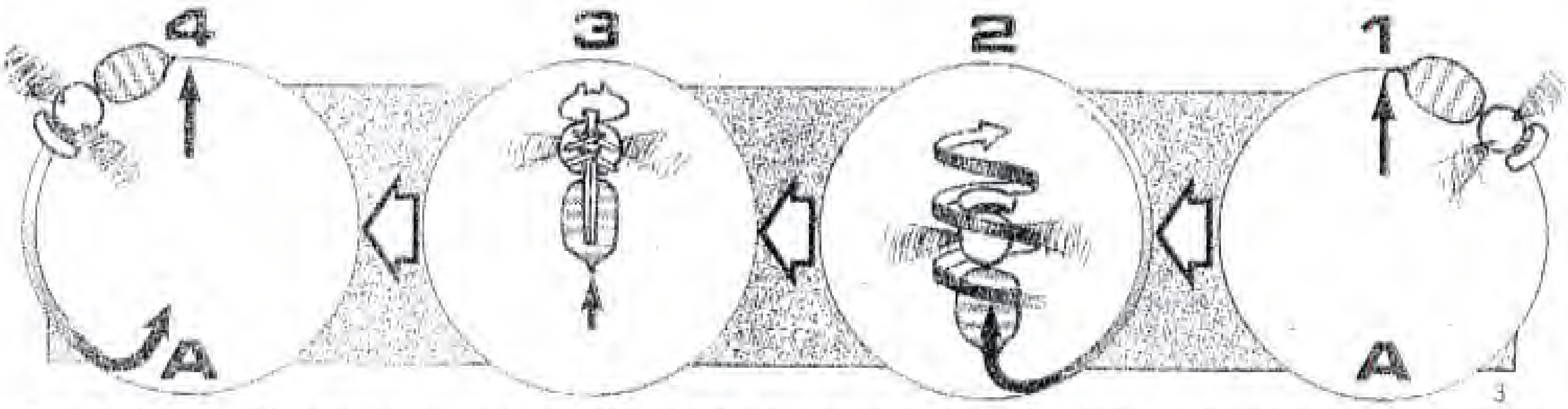


▲リゲリアンとは更にかみあわない時がよくある――。

▲蜂の巣・接近観察に備えて各種兵器を身にまとうゲッベル氏。彼も一応電脳化はしているものの、もともと光電脳体を生体の一部として持って生まれたマルチナやネプタニアンとはいまひとつピッタリかみあわない時がある――。



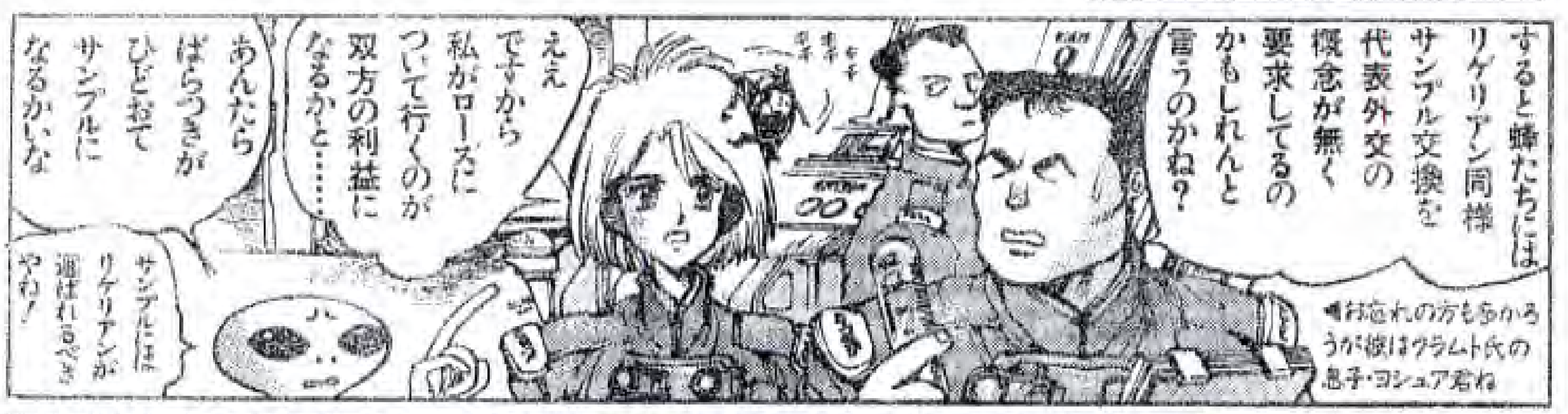
▲ベランダと呼ばれるスクリーンルーム（『スタートレック』のホロデッキで外の景色を観てるようなもの）で、ローズとコミュニケートするマルチナ。資料指定が出ているので彼女は完全監視体制下にある。地球のミツバチなどではエサや環境にかかわりなく「孤独」が死因になりえるとかいう話もある。スズメバチなどもそうかどうかは判らないがローズは無事であるとする。上図のコミュニケーションはいわゆる8の字ダンスではないが、ボディランゲージの1種である。旋回は全体的な意図を、中央での行動が伝達内容や具体的データを示している、としておこう。

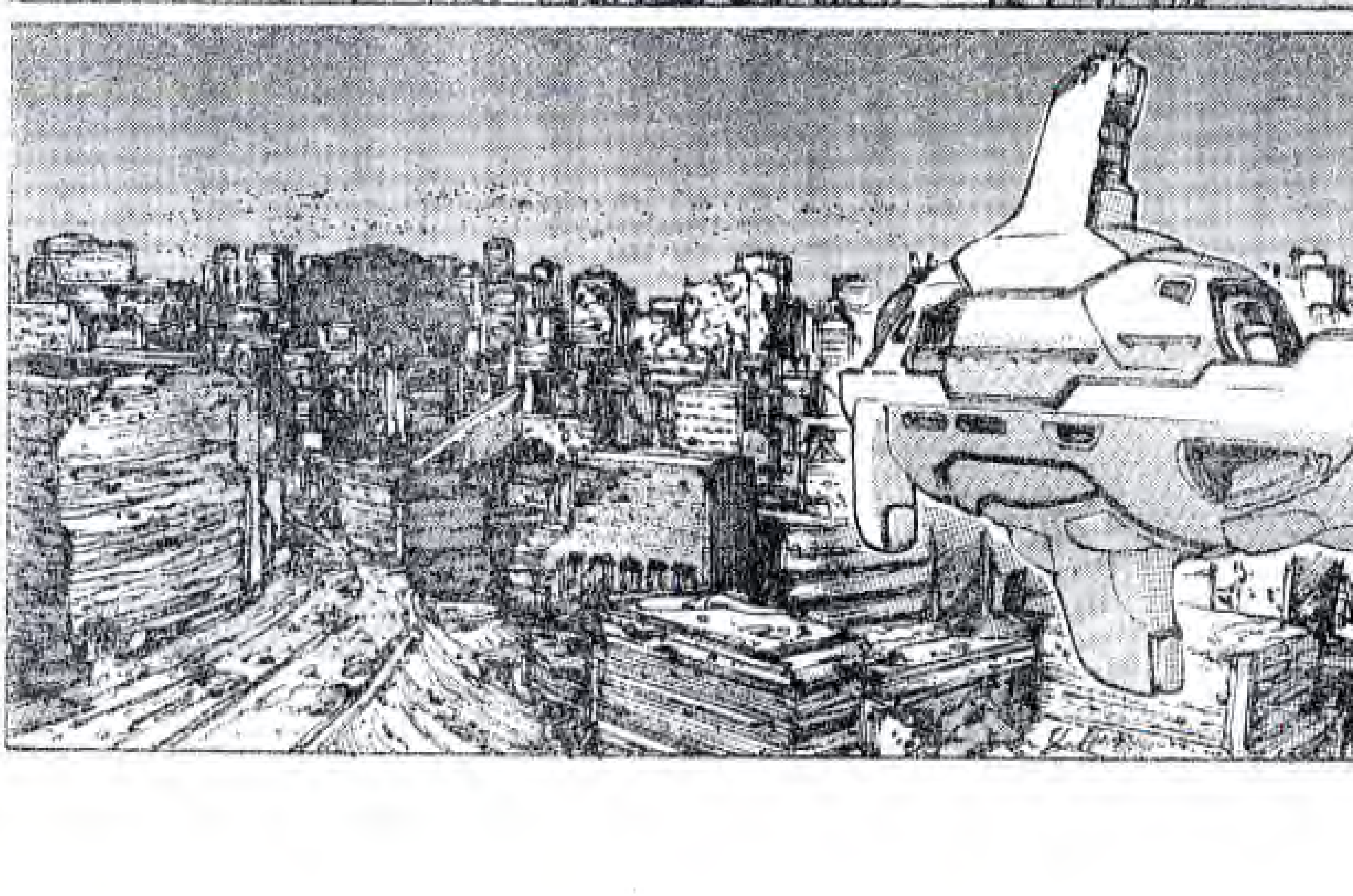


■ローズのダンスの１つは上図のようなものである。基本は８の字ダンスに似ているが中心部での行動が違う。１と４は単にスタート位置に戻る行動としておく。２では体をロールしながら上昇、（回数は毎回同じ）３でホバリングしながら反ってハラを見せる、４でサイドをチェンジしてスタート位置（Ａ）へ――。マルチナが忘備体に可能な限り神経を集中（神経は集中したり分散したりしない。気を集中させるわけだ）させて読みとったところでは１と４は行動をうながす、あるいは誘うしぐさ、２は歓喜、またはパワー・生命感等の概念、３は服従・誇示といった内容らしい。

■しかし考え方１つで、自分たちハチがこの星を支配する強大な種であり、ホウセンカ号に服従することを求めているのかもしれないし、自分たちがハチがこの星の代表者でありホウセンカ号を歓迎するといった意味かもしれない。３はノド元をさしだしているのか、毒袋と針を見せているのか不明である。ソランやネプタニアンにも「剣を捧げる」や、「ツカに手をかける」といった伝統的概念があるが、部外者がその二者を見分けることは難しい。このハチの毒は9000±300MU/mg（１ミリグラムでマウスユニット9000匹±300匹殺せる）のモー毒であり、その毒袋を見せるといった行為の真意は計れない。ちなみに毒剣（針）の構造はスズメバチ同様、２枚の外刃ノコギリが交互にスライドして目標のヒフを切り裂き、ノコギリのサヤにつつまれた毒ストローを伝って毒を切り裂いた傷口に注入するタイプである。念のため書いておくとミツバチの針は刺したら最後、付属器官ごとハチの腹から抜けちぎれてそのハチはお亡くなりになる。スズメバチではそんなことないので何度もブスブスと針をつき立ててくる。スズメバチの場合、死体でも安易に触れると反射し刺してくる場合があるので気をつけよう。普通はイカクや警戒は２〜３匹の斥候が大アゴをパチパチ鳴らして行ってくるがその段階でゆっくり後に下がれば事なきですむ。ローズがホウセンカ号をイカクした事実はないが、なぜマルチナに向かって体が潰れるほど突進してきたのかよく判らない。外界からホウセンカ号の重力フィールドに入ったので減速できなかったせいや、アームドスーツ「インキュース」が大きなハチに見えたせいもあるかもしれないが、ゆっくり接近して観察もせず、イカクもせずとは妙である。ローズはまぎれもなくハチ全体のメッセンジャーであり、何かを伝えようとしているのだ。そしてそのメッセージは、全力で突進してくるほどに重要なものであることも間違いない！



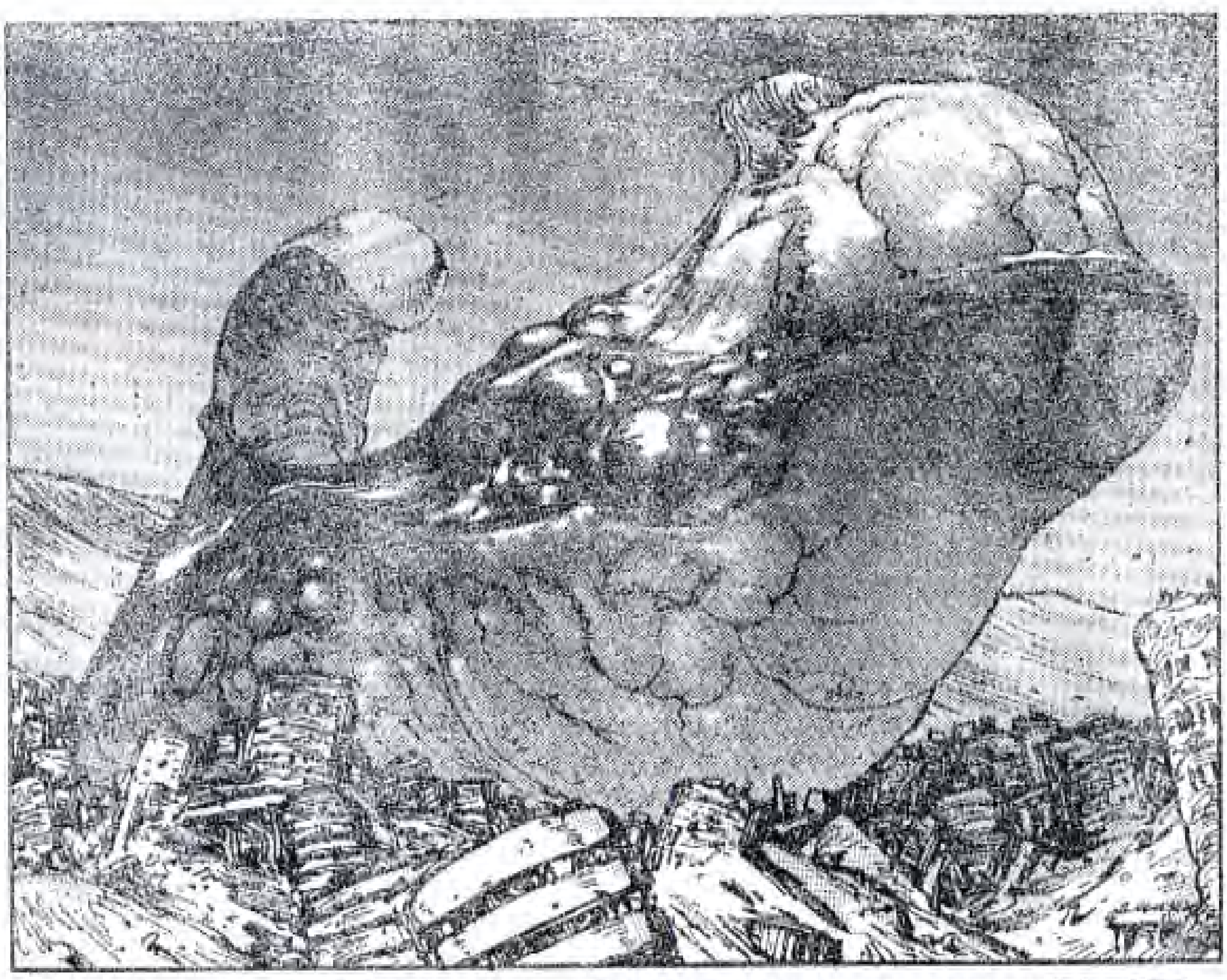




▲こちらはマルチナを含むブリッヂクルーの乗ったアレクトラ号。巣の１つに接近中である。

蜂達も気付いたのか、アレクトラ号へ向かう流れが出だしている。

蜂の集団に包囲されたアラクトラ号の運命やいかに……!!

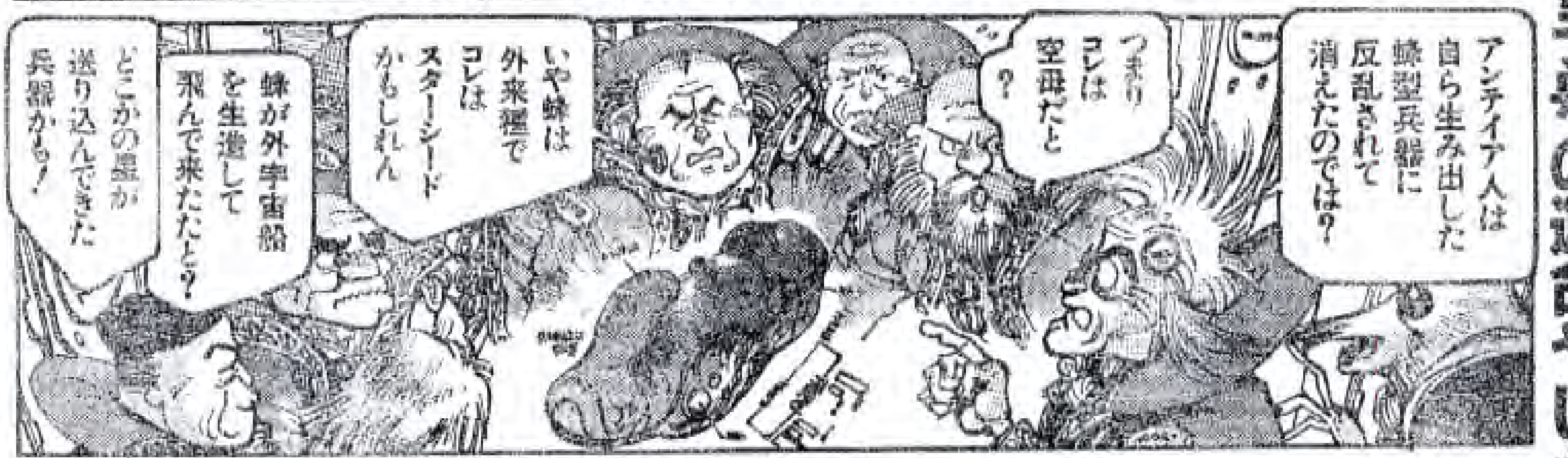


ブリッチクルーが蜂の巣の調査に向かって出発してしばらくした頃、地表調査チームは別のヘンなモノに注目していた。それは蜂の巣とよく似た材質でできた直径1kmほどのモノで、表面は装甲化しており被弾痕がいくつかあるのだ。

表面には重力制御を用いたと思われる放熱キズが無数にあり宙に浮くモノらしいが、内部に動力反応は一切無い。

内部は多くの複雑な層から成り、中央部にはごく小数の六角の小部屋がある(ハチの巣だ!)そのほとんどが菌や小型生命の生活の場と化しており、その定着の具合から見て、そう遠い過去に稼動停止したものではないらしいことが判る……。

厚い装甲に覆われた巨大な重力制御体……その中央には小数のハチの部屋……被弾痕……これはハチの使った戦闘艦なのだろうか? あるいは移動用のハコブネ? 蜂の生産基地?



いずれにせよアンテイア人はハチと戦い、そして消えた。重力制御技術をもつ文明が1つ敗北したのだ。ハチを甘くみないほうが確かだ。しかしそれにしてもハチたちはホウセンカ号の来訪を知っているはずなのに、なぜローズ1匹とのコンタクトしかないのか…? 攻撃のタイミングを見計らっているのだろうか、それともホウセンカ号の出方を観ているのだろうか……。





一方、こちらアラクトラ号でハチの巣の接近調査に向かったブリッジクルーたちは奇妙な事態にそーぐーしていた。蜂たちがアラクトラ号の周囲を、極めて非効率的な飛び方で取り囲んでいるのだ!

非効率的な飛び方とはエネルギー効率の極めて悪い不規則で、コースの定まらない……失速したりロールを繰り返したり——そう、まるでムチャクチャに踊っているような飛び方である。攻撃してくる様子ではないが、ニッキは圧倒的なプレッシャーに頭痛を訴えている……。

てな所で
TO BE CONTINUED

◆次回'94年4月9日(土)発売 5月号につづく◆

いままでのあらすじ 惑星調査を進めるホウセンカ号はこの星を支配していると思われる蜂たちの巣を発見。そこに調査隊を向かわせるが、そこでは大量の蜂たちが乱舞して彼らを待ち受けていた。

巣の前に停泊したアラクトラ号は調査隊を派遣する



▲図は蜂の巣の1つに接近、情報集収中のアラクトラ号。相変わらず蜂たちは攻撃して来るでもなく、ただ周囲を乱舞している。リゲリアンの知る「蜂と同型の生物・ヒガリィ」の場合、このような乱舞は自分たちの女王に対してのみ行なわれるものである（リゲリアンにもかつてこのようにマザーを賛美する目的での運動が存在した）。しかし巣の中央には女王らしき巨大なハラの蜂がちゃんと存在しているし、アラクトラ号を自分たちの女王とカン違いするような原因は何一つ無いように見える。



お詫びと訂正
巣の容積について色々と表記ミスしましたのでまとめときます。だいたい直径150〜200メートルの球と思って頂きたい。いやーバタバタして申し訳ない（地中や、内部の密度に関する考慮はもうパスね）。





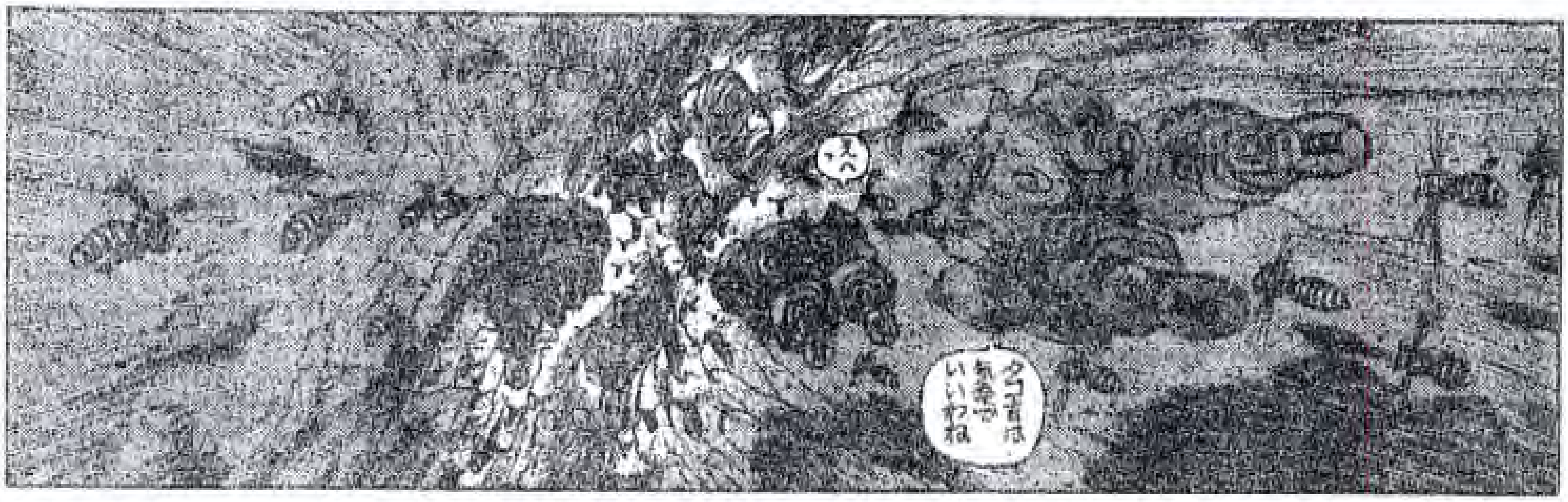
◀最近すっかりとやる気のないクリちゃん……。

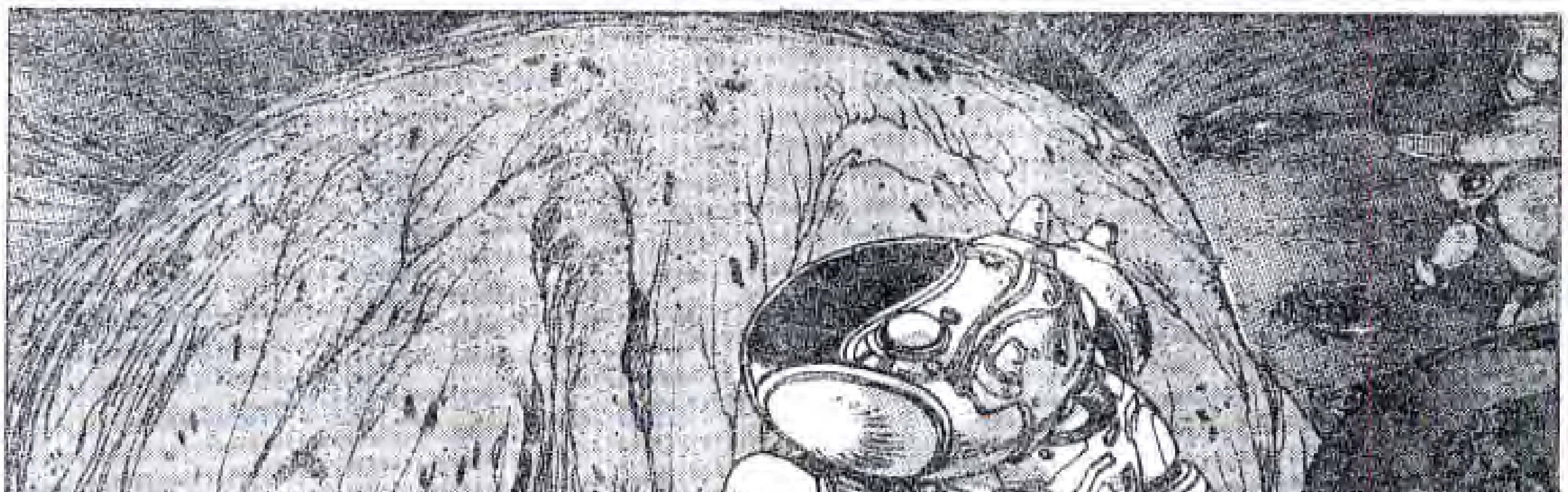
▲この時点でCモードスキャン、サンプリング、音や各種フェロモンを含んだ希ガス（空気ｅｔｃ）ｅｔｃの採集は終っており帰ってもよいのだが、蜂の反応からして何か行動に出るべきだとの判断でマルチナは喋っている。2度目は蜂の反応が違うかもしれないからだ。



マルチナ案は反対1名で採用され、アラクトラ号は停止、ゆっくりと後退してみる。すると蜂たちはダンスをやめ、アラクトラ号前方にチューブ状の通路を形成するような形で列を成し、効率的な飛び方（いつもの）を始めた。ハチの通路は巣の入口へと続いており、これはどう考えても「どうぞ中へ」という意思表示である。この反応はフェロモンや、上位の蜂のシグナルによるものではないところから、かなり個体が確立し、統一された行動であることが判る。こうなってはもう行って調べるしかない！　バストン班はバックアップとして船に残り、マルチナ班はイスキュースを着てフルコンタクト状態で蜂の巣に入っていく――。

巣巻き貝状態で、周囲の回廊を回って中心へ向うようだ。内部へ進むほど、空気はドライで、温度も一定に保たれている――そしてミードのよい香りが辺りに満ちている。巣の周辺には花畑らしいものもなく、蜂はスズメバチに似、ミツバチとは思えないが、何かミード状のものを採集しているのか。巣の中の蜂たちは落ちつきはらっている。アラクトラ号の周囲の蜂たちは半分ほどはマルチナ班について巣の中へ、半分ほどはアラクトラ号の外装の掃除!?をしている。アラクトラ号は「大切なお客」らしい。





巣の内部はほぼ同じ構造のブロック6つから成り、いわゆる「女王」……生殖個体は各々に1体・計6体いるようだ。どうやらこれは蜂やヒガリィとは違うタイプの生物らしい。巣の形状は惑星ムロフシュのサンドラーニという植物にそっくりだが、支柱が少なく、古代アップク期のリゲリアンの共同シェルターによく似ており、緻細な制御はなされていないものの、重力緩和されている！アンティア人が「ただの小型生物」となめてかかって、ひどい目にあったであろうことを想いマルチナ班は気をひきしめる――。

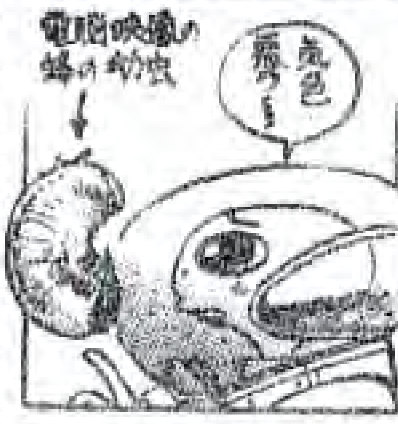


巣内はスターライトスコープで充分間に合うほどに明るく、イスキュースの知覚機の性能ならば行動に何ら不便は無い。アラクトラ号との連携スキャンでは、さきほどのミードの香りは幼虫の分泌物であり、また「ハチ殺し」によく似ていることが判った。巣内はハチだらけ！というほどに蜂がいるわけではなく、また運動量も少ないようだ。

巣に侵入（歓迎されている？）したマルチナ班の情報は個別にアラクトラ号に送られるが、情報系のクリちゃんだけはアラクトラ号の直線の端末知覚器として働いてる。

▽巣内はドライで、我々テラン（地球人のこと。地球人「ソラン」のこととは違う）の大阪人にとっては「やや温かめ」の温度である。基本的にヘクタクラン（水を主体とした炭素系生物etc）にとっても快適温度である（テランはヘクタクランの亜種の1つだから当然か――）。

パストンはニッキへの対応にも気を使っているが、何より蜂とのコンタクトのあり方に不足を感じていた。マチューンのうち約3分の2の部族が、「初対面の相手とは歌を交換する」のを習慣とし、その歌のあり方で相手方の住環境や思想、その時の気分、互いに対する意識を確認するのが常だからだ。歌の交換無しに相手の家（巣）に侵入するのは、マチューンにとってドロボーや侵略と同義なのだ。しかしあまりサイズの違う生物だと、話法や環境感も異なるので、歌がどれほど共通の言葉となるか極めて疑問だし、不安定なニッキの横で自分1人ハナウタを歌うわけにもいかないし、それそも大気中で歌うのに彼はまだ慣れていない……パストンはこのようにしてストレスを味わう。



▷巣は当然のことながら外殻・内殻共に外側より内側のほうが古い。材質については次の機会に――。





圖アンティア蜂は雑食・主に肉食である。とはいえ、他の動物をムシャムシャ食い、消化し、栄養とするのではなく、細かく咬みちぎって胃に貯え幼虫に与える。幼虫は肉食で、これを栄養を変え、糖分10〜30%・可溶性蛋白2%の甘い分泌物として成虫に与える。これを栄養交換というらしいが実にユニークなシステムといえよう。我々ヒトも栄養交換はしているが機能支援もできるのでアンティア蜂のように明確な分業は無い。その点リゲリアンでは機能的な差が明確にあるのでヒトよりは蜂に近い。ちなみに我々の知るスズメバチも幼虫は肉食、成虫は流動食なんだとさ。

◆果たして蜂たちとのコンタクトはうまくいくのか?以下次号

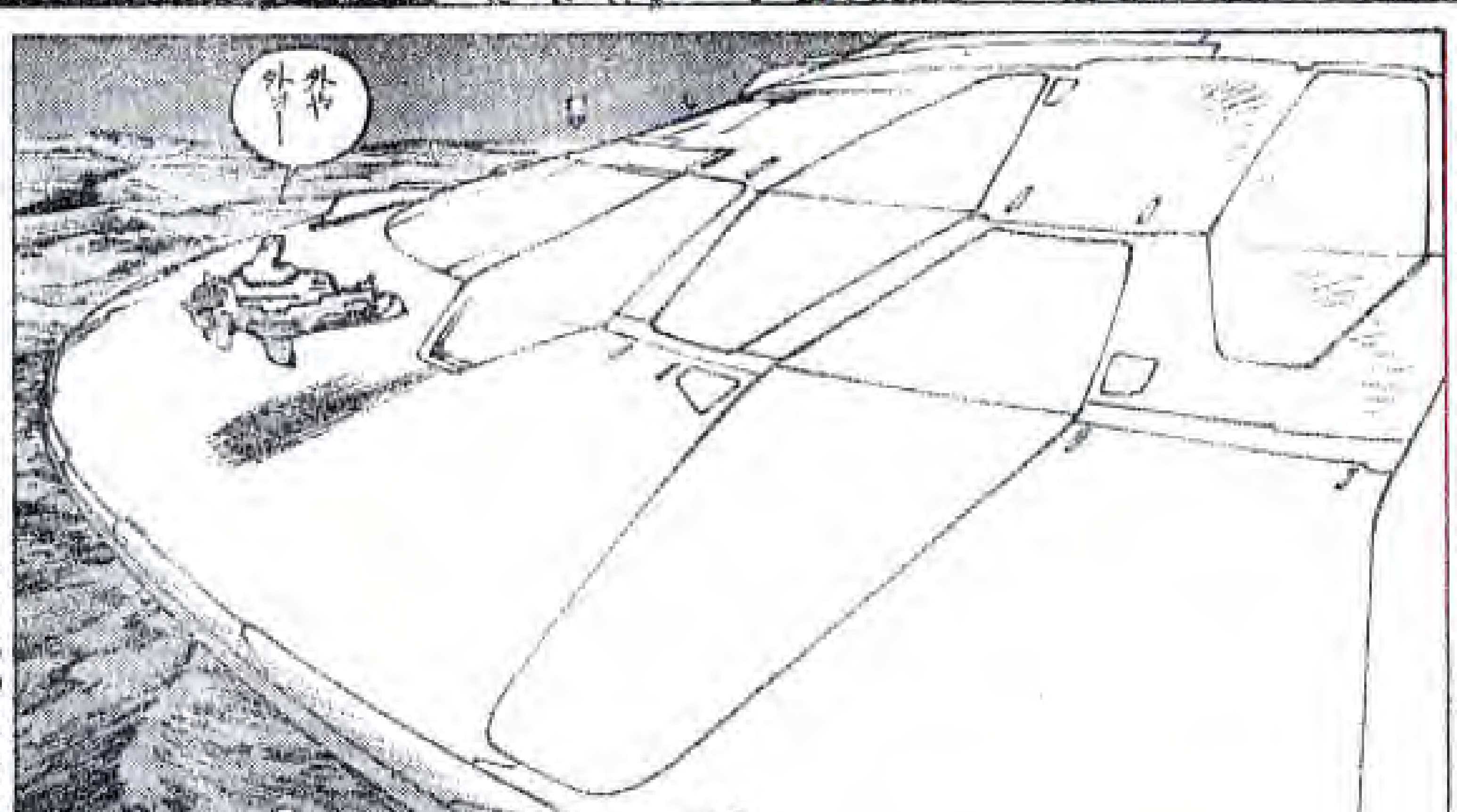
対応ゲー２とは、対象となる生物の生命維持にとって最も重要であると予測されるモノ(この場合ミードと呼んでいる幼虫の分泌物のことである……我々が知るところの「ミード」とは意味が異なる）をプレゼントし、友好的態度をとりつつも手早く撤退することである。プレゼントのミードは、アラクトラ号のトロスで生成され、以前描いたドクトロスで使う固定ヘッドと同じ原理の小さなボートに乗せてマルチナたちの元へ届けられる。しかし、いくら最重要物質でも本来は幼虫から口移しでわずかずつ供給される物質なので、いきなり容器に大量に入ったものを相手に渡すのは危険が伴う。場合によっては「このようにミードをさし出せ」や、「マルチナたちがどこかの巣の幼虫からしぼり取ったものを見せている」と受け取られかねないからだ。古代アップク期からコスモロ期の初世紀にかけてリゲリアンのある家系では、「ファーストコンタクトでは、いくつかの（普通20から多い時で50）個体を相手方にサンプルとして提出し、ときには解体して見せたりする。コンタクトそのものに価値が失せたらすべて略奪してよい」といったコンタクトルールを採用していたと記録に残っている。当時、まだ恒星間航法が無かったことは実に幸いであった。また、エンメヘス種にも初めて出会う異能力者を解体して食べ、その本質的能力や霊力を自分の身につけようという部族がかつて存在した。いずれも大昔の話ではあるが、外宇宙ではどんな種族がいるか判らないので様々な対応型が用意されているわけだ。ゲー２は、シュミレーションでは５回とも脱出に成功したよ、２度目のコンタクトでも１度目と同じように蜂たちが歓迎してくれるのだが、必ずしもシュミレーションが現実を予測しているとは限らない。構造が脳神経に至るまで同じだとしても、大気中のフェロモン分子１コを見逃して次の行動の誘導に差が生じるかもしれない（そりゃちょっと大ゲサに言いすぎだけどね）！果たしてマルチナたちは、シュミレーション通り無事に帰ることができるか!?（できなければ本船のトロスで再生成するだけだが……）



話変わってこちらはホウセンカ号内。先に生成されたマルチナと、ローズである。これから「前回の最終ページで出てきたハブゴネ?」へ出かけるところである。







てなわけで、マルチナ＆ローズはコロプスたちやリゲリアンと共にアラクトラ号で調査に出かけるのである。

■マルチナは２度にわたりコロプス一味に助けられており、他のスタッフよりは彼らを信頼しているのだ。

調査の対象となる例のモノを、とりあえず「ペリオド」(ヌカバル盗の淡水ナマコの一種の名前）と呼ぶことにするところで、今回はここまで。

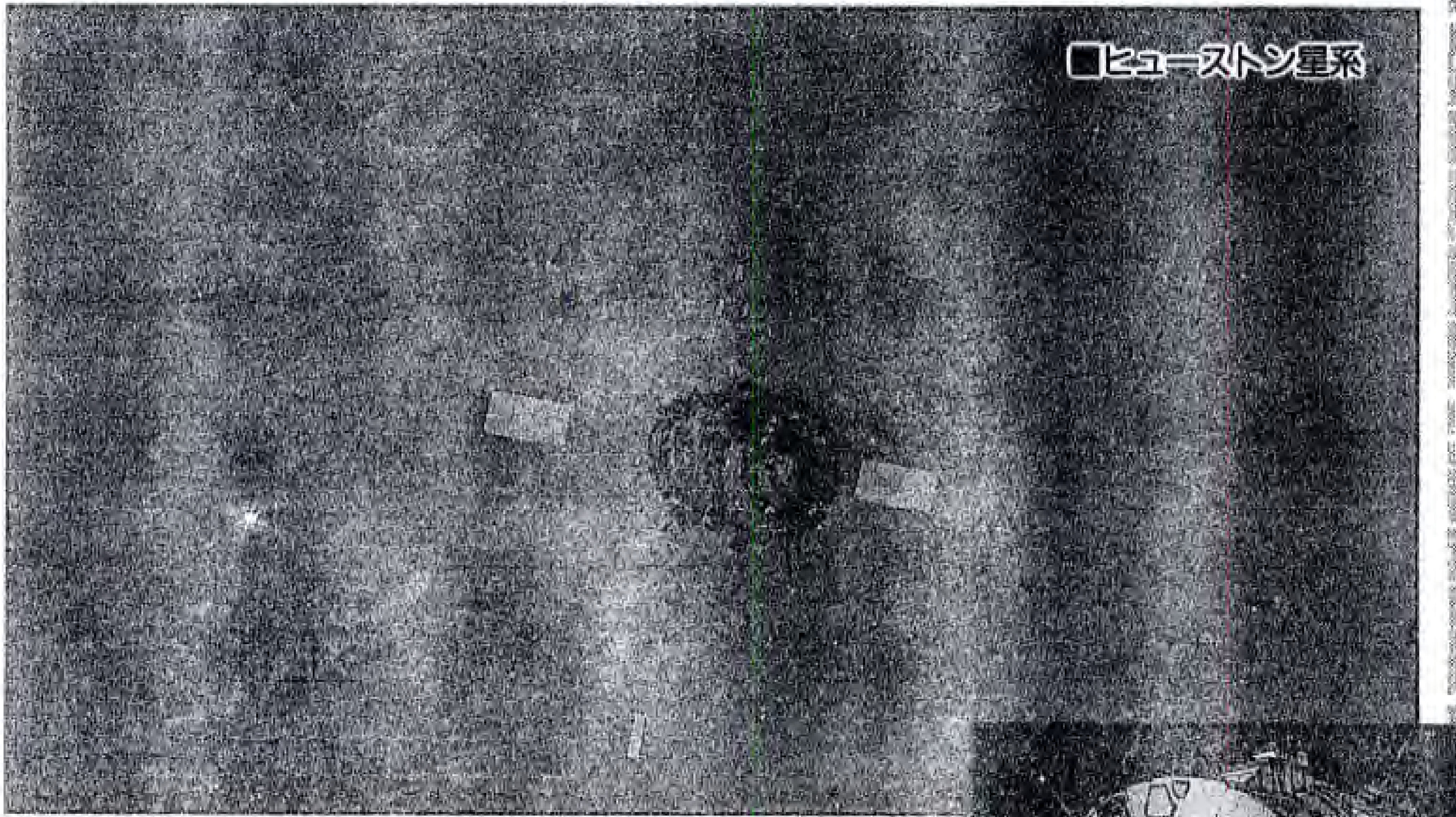
TO BE CONTINUED!

◆次号'94年5月9日(月)発売 6月号につづく◆

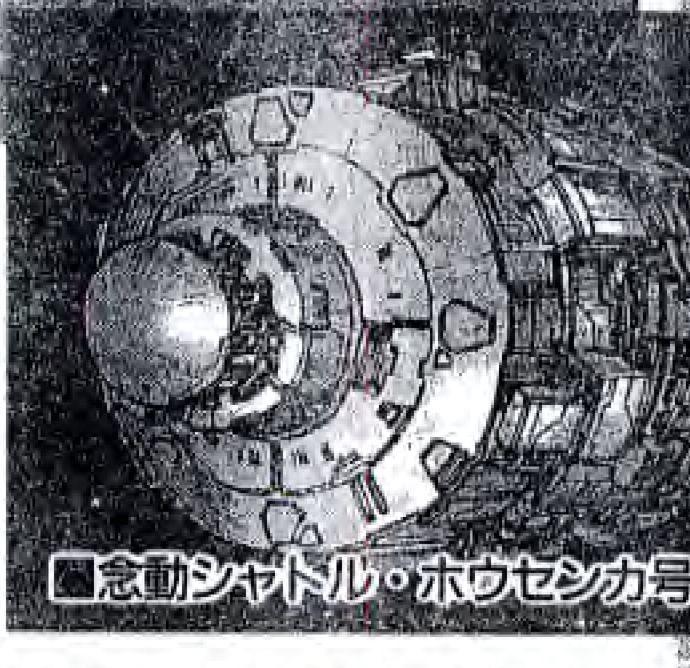

士郎正宗
NEURO HARD 蜂の惑星
透徹したスペース観を君たちへ贈ろう
士郎正宗の世界がまたひとつ拡がる!!
コミック
ドラゴン

サイバースペース通信 SPECIAL

好評連載中の「NEURONHARD」だが、「よくわからない」「どーいうストーリーなの?」という御質問もいただく。そこで今回は連載10回目を記念して…ってわけでもないけど、今までの展開、登場人物などを簡単に、わかりやすく紹介するぞ！ これを読めば、なんだ、こういう話であったのかと納得してもらえるはず。それを理解したうえで改めて読んでもらえば、登場する惑星、人物、メカなど士郎氏が設定したこの世界をより楽しんでもらえるはずだ！ まずは読んでみて!!



▲光っているのが目標のヒューストン星系の太陽。星系内には機動惑星では近づけないのでシャトルで行く。





西暦二千三百年、人類は幾多の他星系の生命体との接触をすませ、共同で宇宙探査などにあたっていた。そんななか、外宇宙のヒューストン星系の五番惑星に知的生命体の存在が確認され、新たなコンタクトへの期待が高まった。さっそく先遣隊が組織され、機動惑星フレマ・ヒュトンに乗船して出発。しかし、ヒューストン星系に接近し、調査隊を乗せて5番星へと向かったシャトル・ホウセンカ号は、海賊の襲撃によって予定外の惑星へと落下してしまう。

▼軌道がくるってホウセンカ号は未知の惑星に落下。

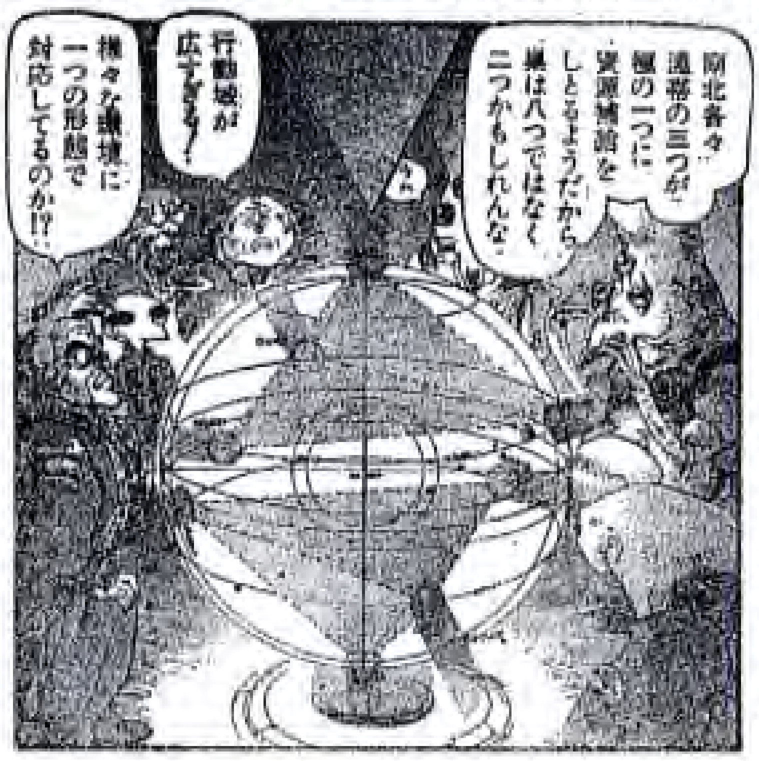


▼宇宙海賊の襲撃(笑)



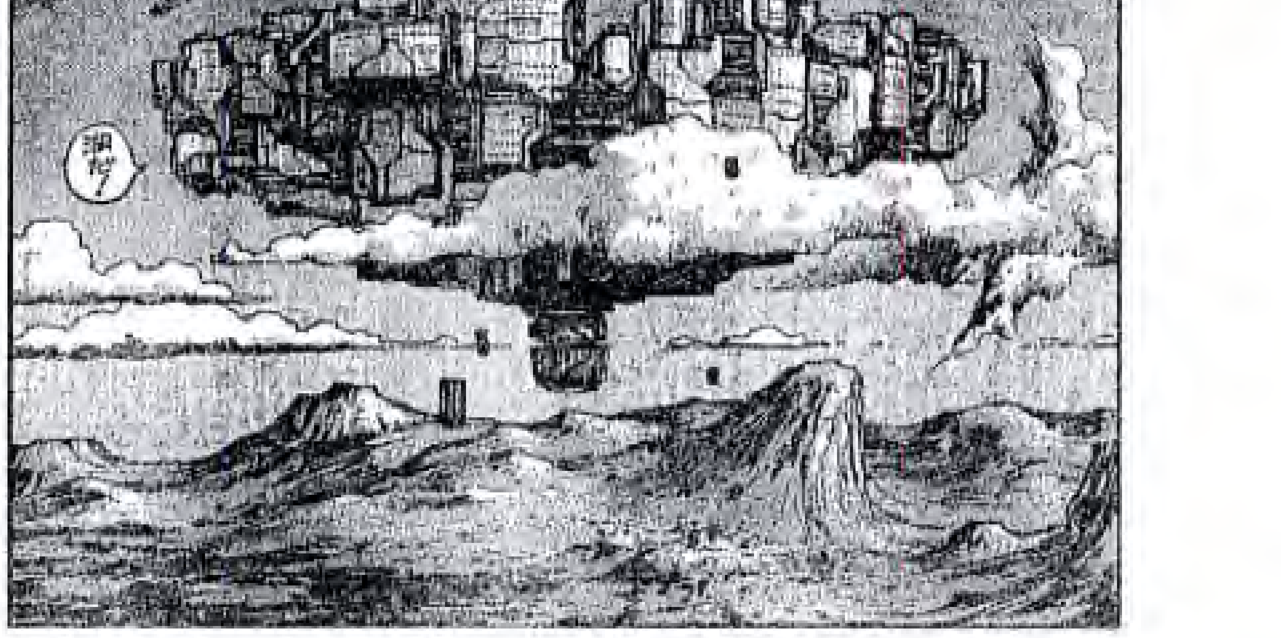
インフォメーション

士郎正宗ファンへの情報。「アップルシード」がスーパーファミコンのゲームとして株式会社ビジットより今夏発売が決定。内容は「アップルシード」の世界観を舞台にしたアクションシューティングゲーム。詳しい内容等はまた、お知らせする予定。



▶委員会は混乱の中、惑星をアンテイアと名付け調査に乗り出し、ホウセンカ号もどんどん改装されて行くのだった。

■惑星アンテイア上のホウセンカ号



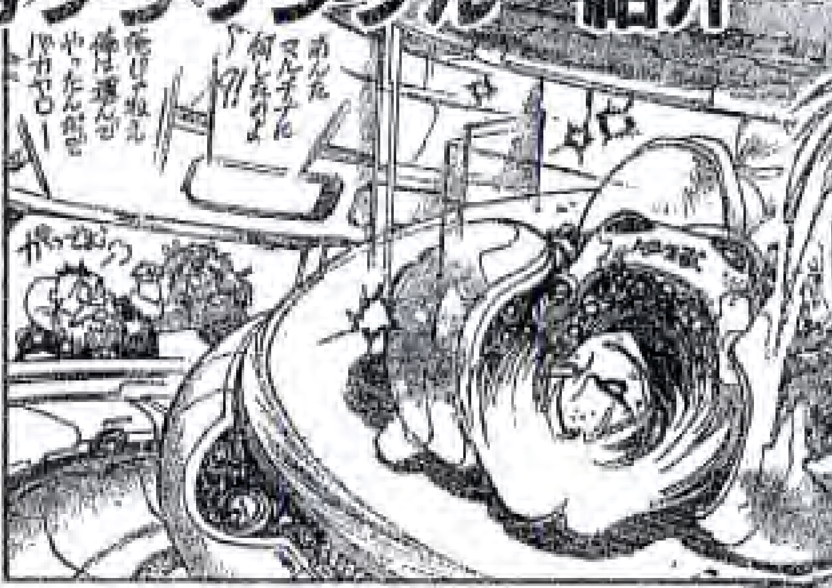


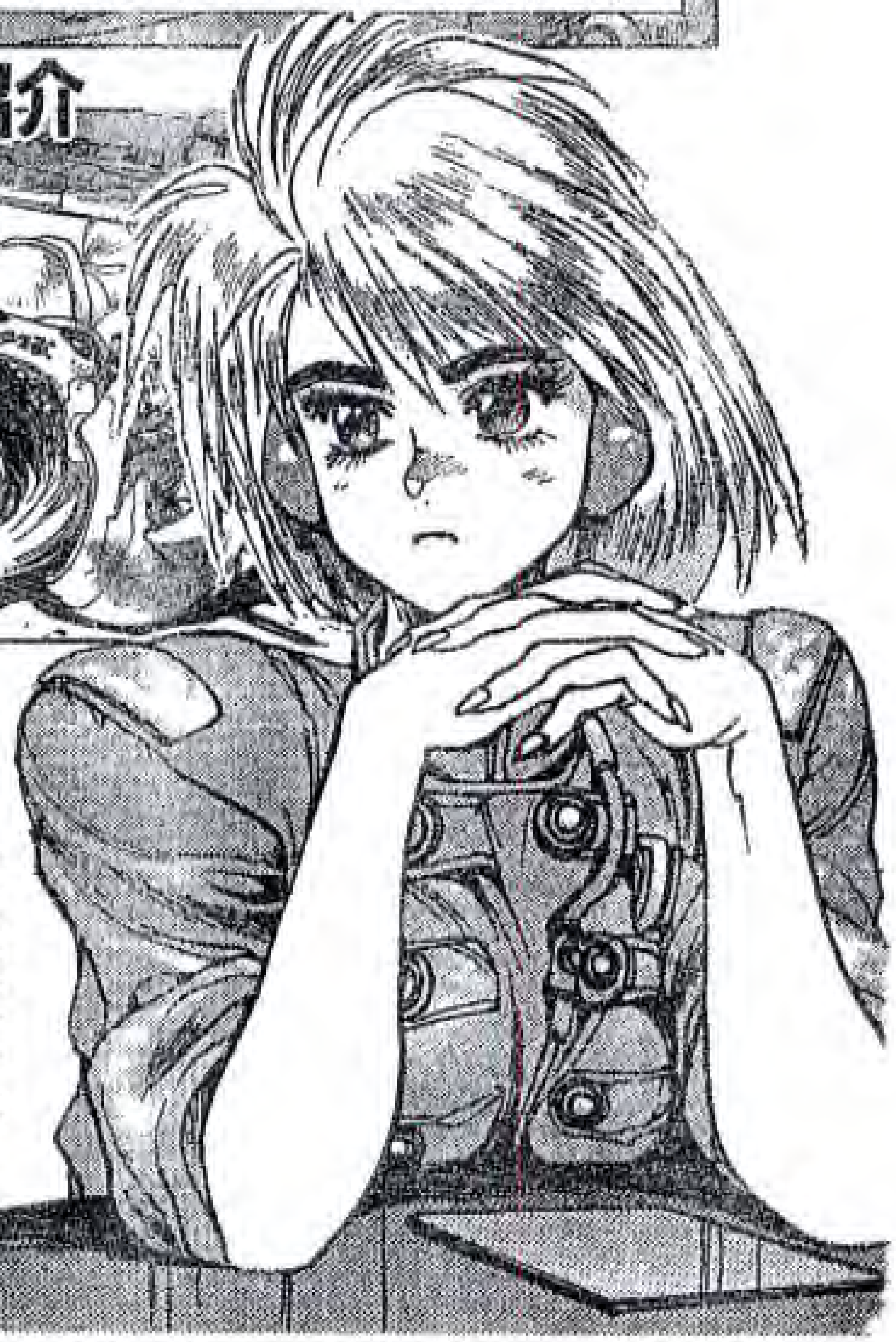
■ホウセンカブリッジクルー紹介

ホウセンカ号のブリッジクルーたち。ホウセンカ号の操作をはじめ、ナンデモ屋として活躍する。彼らはデータとしてホウセンカ号にファイルされており、トロス（生成器）によって生成された。必要とあらば何体でも同じ人物が生成可能であるし、その体の構造を作り替えることも可能。考えてみるとちょっと怖い（笑）。

■ホウセンカ号ブリッジクルー紹介

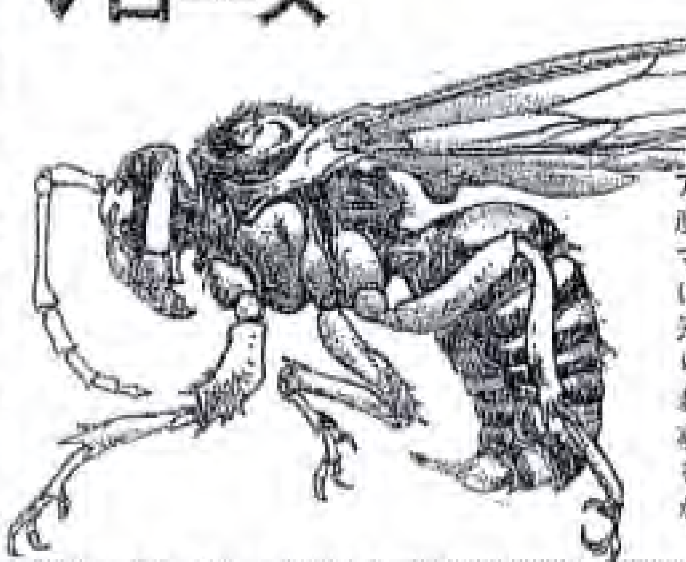
▶マルチナ





ブリッジクルーの一員で本作品の一応の主人公。ホウセンカ号の船外作業中にアンテイアの生物である蜂と接触し、重傷を負う。傷はトロスにてすぐに再生されたが、その際、蜂の生物構造がマルチナの中に混入し、不安定な存在となってしまう。その結果、現在ではもう一人のマルチナが生成され、様子を見ながら作業に従事している。接触した蜂は、なぜかマルチナの元を離れず、マルチナはローズと名付け手元に置いているのであるが、これがその後いろいろと問題になってくるのである。

▼ローズ



アンテイアに生息する（？）蜂の一体。地球産の蜂と違い体長20センチ弱の巨大な生物。マルチナに高速で激突し死亡するが、トロスによって再生成され、それいらいマルチナの元を離れない。この惑星の人類が蜂との関わりから滅亡、もしくはこの星を捨てたことがわかり、蜂たちが今だこの星で生息している事実から、ローズはひょっとして何かを伝えるためにやってきたメッセンジャーではないかと考えられているがまだ判明していない。



▲クリスチナ

ブリッジクルーのリーダーであり、調整役でもある。意見の合わないクルーたちの調整に疲れ、委員会からのお小言に耐えてがんばっている。立場上、クルーたちを監視しているため、ときどきにその秘密をバラしては密かな快感を憶えているらしい。

▲バストン

気のいい男で、もともとはイベリットという水棲種の一族（そのせいで顔のわりにアゴが小さく、目は澄んでいる）。ニッキに思いを寄せているようだが、その想いはまだ遂げられてない。

▶リゲリアン

究極的に進化した生物の一族。イメージとしてはわれわれが宇宙人と呼んでいる連中に一番近い。個体ごとにその能力は効率よく専門化されており、なにかというとソラリアンたちを見下す傾向がある。

▶ニッキ

精神感応による調査を得意とするエムメヘス種。そのせいか占い好きで、暇なときは人の未来を占ったりしている。最近はバストンとちょっといい仲になりつつあるが、はたして？

▼ゲッペル

ソラン（太陽系）出身のがんこじいさん。趣味なのか、落ち着かないのか、身近にいつも武器を備えている。クルーの中では戦闘などの荒事の専門家としての役割を持たされているが、ちょっと物騒である。

△ルイスフロス　△ソルト

クルーの中でカップルになっている二人。もっともその仲も最近は怪しい。その原因というのも、ホプタニアンであるソルトが一夫多妻制であるのに対して、ルイスフロスは一夫一妻制だとか、両者の間の相違が見えてきたせいでもある。

ホウセンカ号ブリッジクルーたちの調査によって、惑星アンテイアの状態が次第に明らかになっていく。それはこの星で暮らしていた先住生物（おらく人類に近いタイプ）は、この惑星に住む蜂たちとの抗争が原因で滅亡、もしくはこの星を放棄していったらしいということ。すなわち、現在は蜂たちがこの星の主なのである。マルチナたちは、蜂たちとの意志交流を試みるが、まだお互いを理解するには至っていない。はたして、この星で何か起こったのか？そして、蜂たちはマルチナたちに何をうったえたいのか？それはこれからの展開の中で明されていくはずだ。

かくして物語は本編へと続くのであった――!!

巣の調査を終えたアラクトラ号を蜂の大群が追う!?



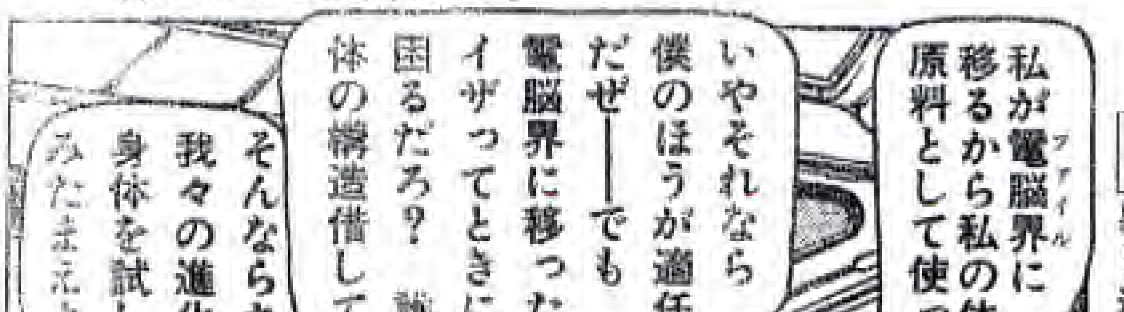
▲上はハチの巣に侵入した後、対応β−2に従ってミードをプレゼントし手早く退出、ホウセンカ号に帰るアラクトラ号とマルチナたちブリッジクルーである。イヤなことに、ハチたちはシュミレーターと違いアラクトラ号についてくる! 最初接近したときの歓迎の約3分の1の数のハチがアラクトラ号の周囲につきまとい周囲を飛んだり、アラクトラ号に止まって外装を大アゴでひっかいたりしているのだ。このままホウセンカ号までハチの一団を引き連れて飛ぶことも弊害がありそうでマズイので、(ハチの航続能力限界…エネルギー消費や構造的な排熱の問題があるので、どこまでもついてくるとは思えないが、アラクトラ号の甲板で休みながらついてくるかもしれないし、ここで大量の死に蜂をだすのもマズいかもしれない)とりあえずハチたちを巣に引き返させるために、再びミードを提供し続けるしかなさそうだ—。





ミードを受け取ったハチはその宝を抱えて巣へ飛んで帰る—。しかしハチの数はあまりに多く、運搬能力も我々の知るミツバチの花粉運びや、スズメバチの肉ダンゴ運び、ジガバチのエサ虫運びなどとは規模が違う。アラクトラ号の生成器の原料タンクはみるみる減少し、空になるのも時間の問題だ!





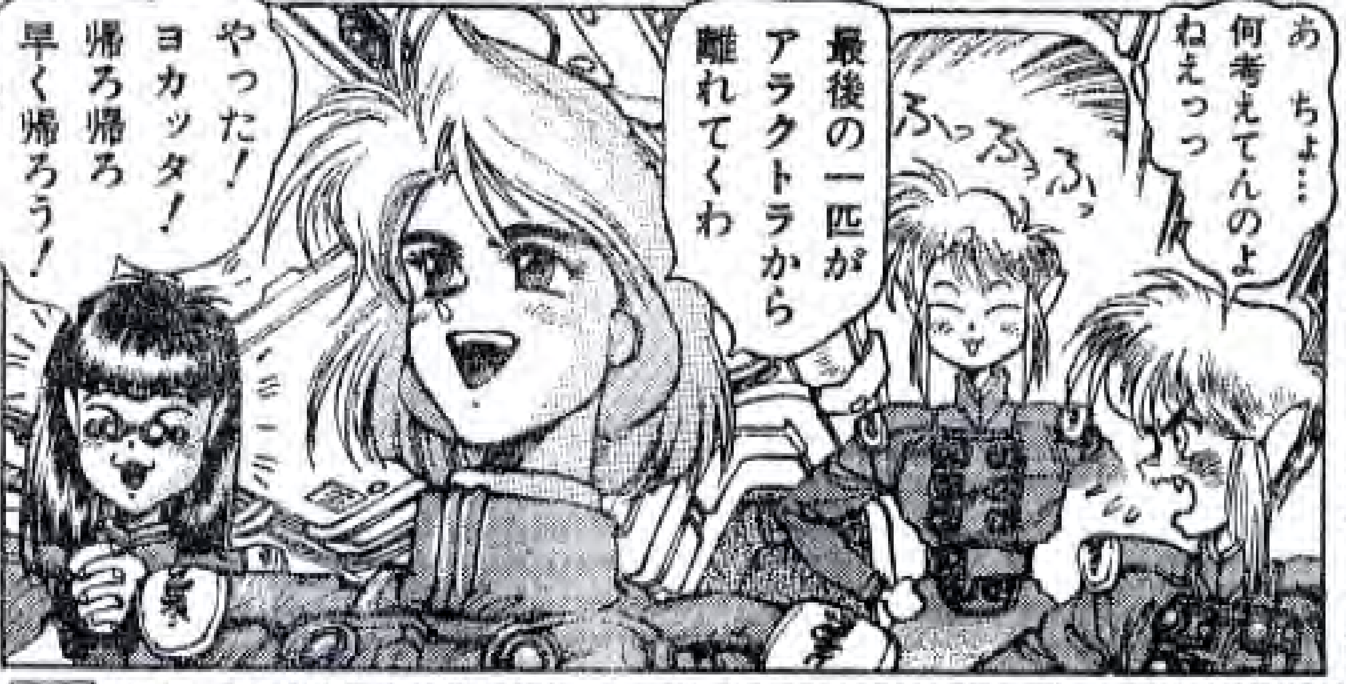
▲つまりバストンの言うのは、脳や基本的神経系はバストンのままで、それ以外の体のデザインを他のクルーから借り、その質量の差をミードにしようというのである。肉体交換ではない。変容である。



リ ゲリアンのボディに変容しようとしたバストンだったが、神経の構造上、マチューンの脳とはうまくマッチしないという理由でトロスに拒否されてしまった。

仕方なく互換の可能な他のクルーの身体デザインを借りることになり、クルーの中で最も小柄なニッキが候補に登る。





バ ストンから見ると、他の種族はいずれもスカスカである。しかしリゲリアンから見れば他のクルーはいずれも「専門体に任せればいい、さまざまな機能がどの個体にも含まれているゴテゴテの」非シンプル種である。分業の進んだ身体構造が、生物として「より優れている」とリゲリアンは考えるが論拠は何もない。

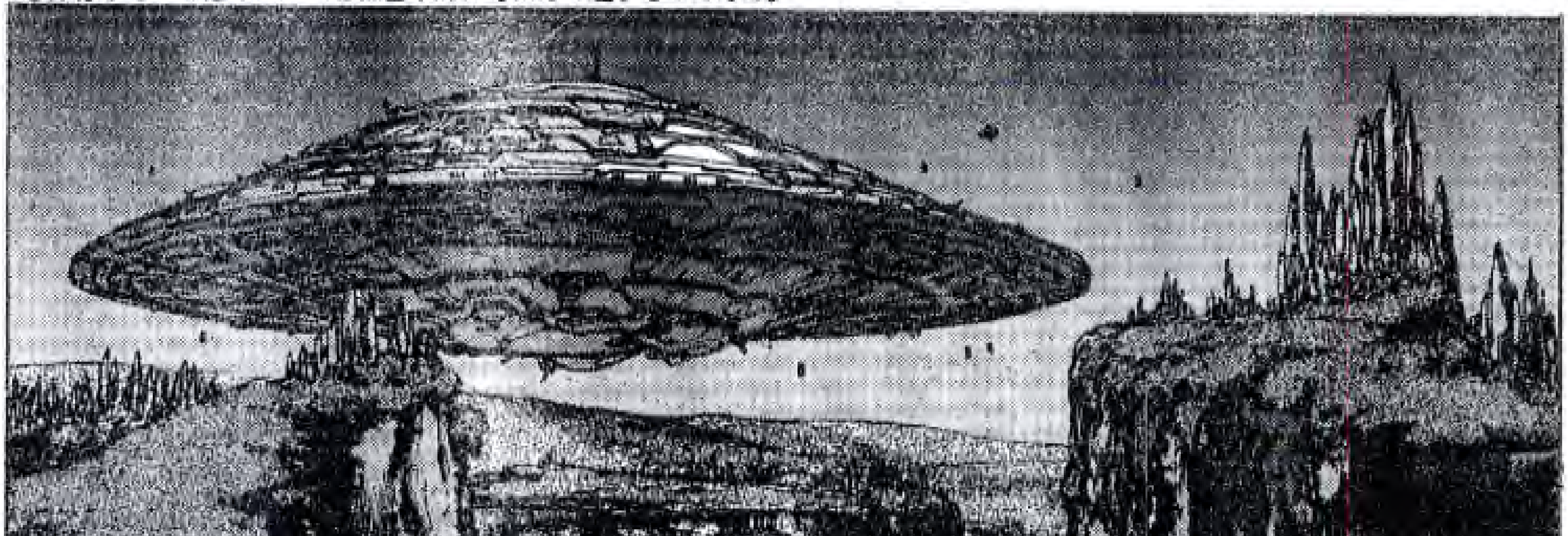


最 後のハチが宝を抱えて巣へ向かった途端、アラクトラ号はテレポート航法に切り換え一気にホウセンカ号へ――。

マルチナとマルチナ'が双児よりも等しい（違う経験・思考を重ねるにつれその差は広がる。まったく等しいわけではない）のに比べ、オリジナルニッキとニッキ型バストンでは外観が同じだけで、別の人物である。つまり外観などどうにでもトロスで変容させられるのだ。ニッキの感応力は脳の構造と心霊に由来するなのでニッキ型バストンにそれらの能力はない。オリジナルニッキは感応抑制剤が効いているので、バストンの心霊活動が読めないのである。これはニッキにとって重大なストレスの素で、鎮静剤も同時に注入しないとパニックを起こしてしまうほどである。

当然のことながら、ニッキ型のバストンはホウセンカ号に戻り次第、元来のバストンの姿に戻る。（トロスとホウセンカ号の原料ストックを使って）

このように、クルーの身体または身体の一部をトロスの原料として利用する場合、最初の候補は班長であるマルチナ'とバストンであるが、2人の場合電脳界へ移りアラクトラのメインブレイン内で活動を続ける。それでも不足の場合、他のクルーも次々分解されるのだが、その場合、分解の時点でファイルされ、消去される。再びどこかのトロスでファイルから呼び出されるまで心霊活動は中断されるわけだ。しかしクリちゃんだけは所属が異なるのでマルチナ'、バストンを含むアラクトラと共に最後まで身体による情報収集を行なわなければならない。ちなみにリゲリアンの場合は消去されてもファイリングされない。彼らは消耗品であり量産タイプなので個というものは無視されるのだ。フルコンタクトの場合のみ一時的にファイルされることになるが、それは常時メインブレインにオリジナルを保存している他のクルーとは基本的に考え方の違うものである。



▲上は長径が3キロメートルほどになっているホウセンカ号。外見がザラザラなのはまだ完成しきってないから。

ところで94年4月号（前々号ね）の95Pヨシュア君のセリフ、3行目と4、5行目が入れ違ってました。毎度ながらすみません。他にもあるけどスペースの都合で省きます。悪しからず……。

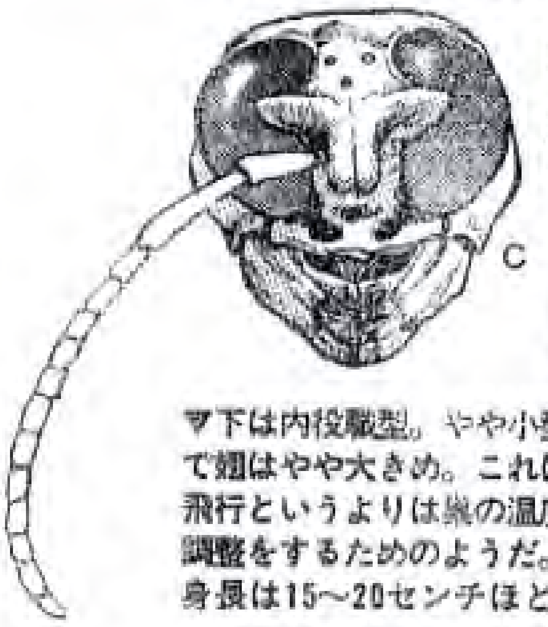
基本的には、リゲリアンのように個体の特徴が顕著で消化過程の一部（あるいはすべて）や生殖、戦闘、特定作業を特定の個体に依存しきっているような分業身体は、システム全体またはブロックごとの強度が相当高くないとマズい。また、リゲリアンから見ると我々テランなどは、かなり多くの個体が栄養吸収・生殖・ある程度の特定作業・ある程度の戦闘等をこなせる多機能仕様であり、さまざまな可能性を持つことの代償としてエキスパート化が進んでいないということだ。テランにももちろん、天才と呼ばれるようなエキスパートがさまざまな分野に存在するが、リギリアンのように身長差が5～10倍違ったり、脳神経の数が1000倍知覚違ったりといった大きな差異はない。そういった意味ではリゲリアンはハチよりはシロアリに近いと考えたほうがよいかもしれない。（リゲリアンの生殖担当体や戦闘担当体はいずれ設定する）

ここらでアンテイア蜂についてある程度まとめておく。アンテイア蜂はヒカリィに似た生物なので今後ヒギスと呼ぶ。巣から判ったことだが、ヒギスは完全変態の外骨格生物で、炭素繊維のフレームを持つケイ素系生物である。1つのドームは6ツの血族から成り、1つの血族から約5万匹、計30万匹で1ドームを形成する。（アンテイア上に約1億1520万匹存在する計算となる）
30程のカーストから成り、主として生殖系（女王と王の仲介者、世話専門虫の女王形成・清掃・特殊部隊ｅｔｃ）、戦闘系（情報収集、巣内戦用、巣外戦用…これが色々と多い）、職系（巣の構築、清掃、エサの収集、兵や幼虫の世話ｅｔｃ）に別れる。数では職系が75～80％を占める巣が多い。また、他のカーストへの分化段階にある擬職体も見られ、近い過去に巣の職業バランスが崩れており完全に安定したカースト配分に至っていないことを示すと思われる。これは成長のスピードから見てアンテイア人が星を脱出する時期に多くの職ヒギスや兵ヒギスが失われたことと関係している。職成虫のエサ収集担当グループは他の動物・植物ｅｔｃを持ち帰り、幼虫に与える。幼虫は肉食、菜食に別れており担当は決まっている。幼虫は分泌物を出し、成虫はこれをエサとする。成虫は貯蔵はできるが消化吸収胃は非常にデリケートで外食はほとんど不可能と思われる。成虫は幼虫という形で、消化機能を体外に持つことになる。肉食であると同時に花蜜採集等でいわゆるハチミツ、ミードを貯食することから、我々テラン知る所のスズメバチとミツバチを足したような食生活を行っているわけだ。イザ採食に行き詰まったらスズメバチのように幼虫をエサとして活用するかもしれない。（幼虫に一匹前の虫権はなく、単なる皆の体外消化器官であり、食糧貯蔵の一形態でしかないわけだ）
　血族は遺伝因性の匂いで区別されるようだが6つの血族の間で情報戦闘系や女王側近、情報職系に交流が見られる。

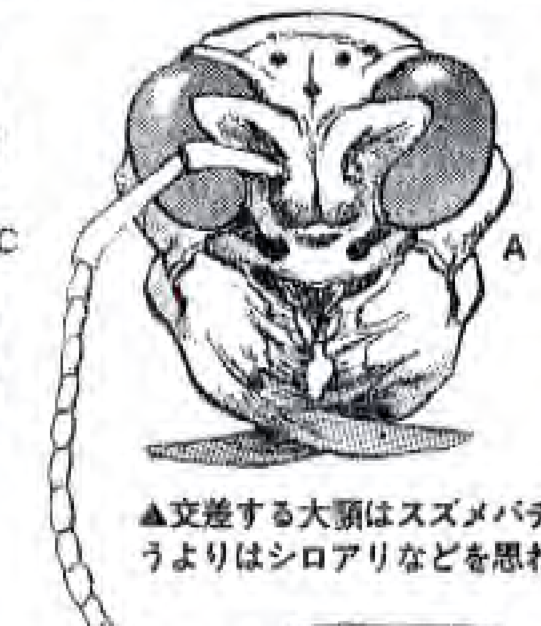
ヒギスの分業的形態の様々（これがすべてではない）

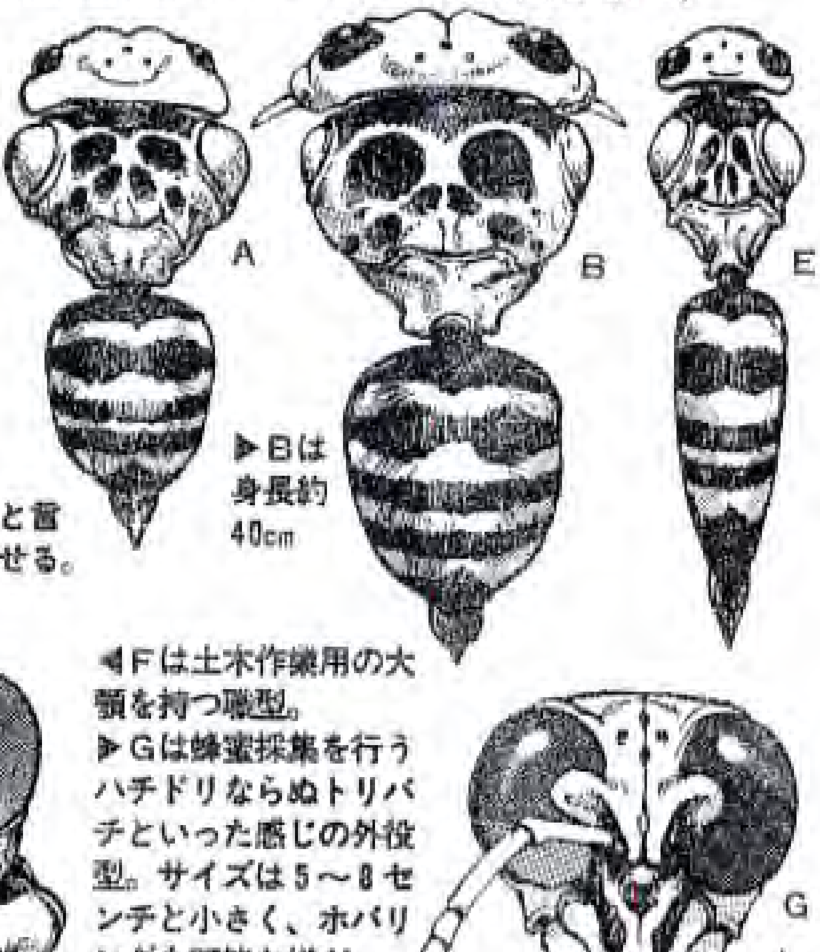
▼第2304属に分類されたヒギスの外役職型

第2304属の巣内戦闘型2種（▼A・B▼）と巣外戦闘型（▼E）







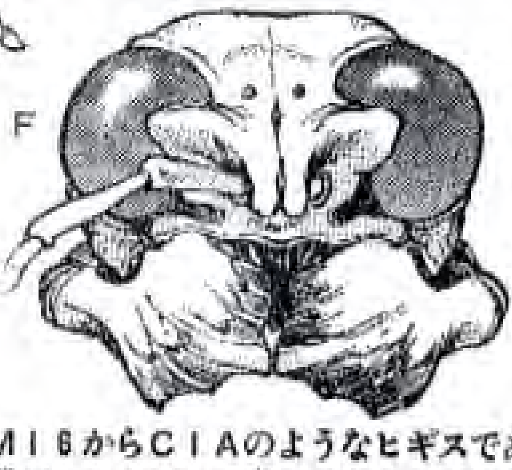


▼下は内役職型。やや小型で翅はやや大きめ。これは飛行というよりは巣の温度調整をするためのようだ。身長は15～20センチほど。

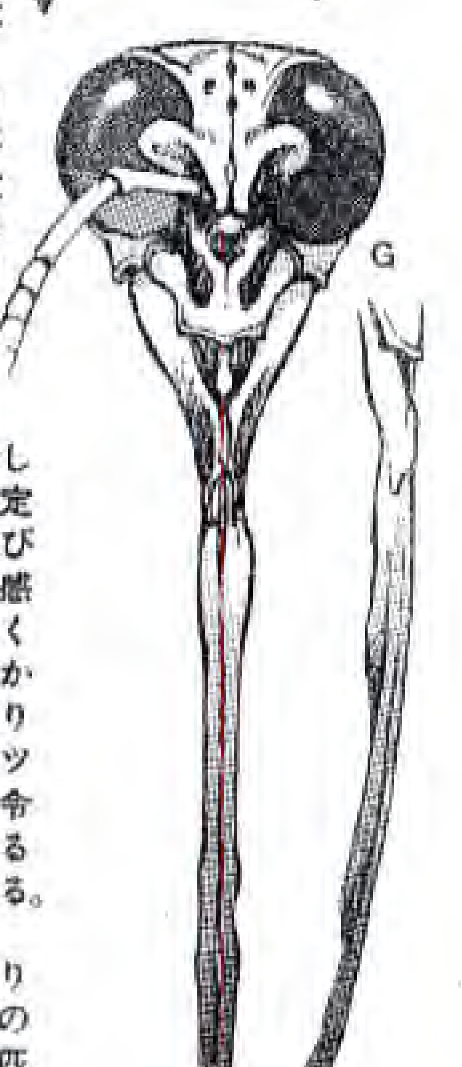
▲交差する大顎はスズメバチと言うよりはシロアリなどを思わせる。

▶Bは身長約40cm





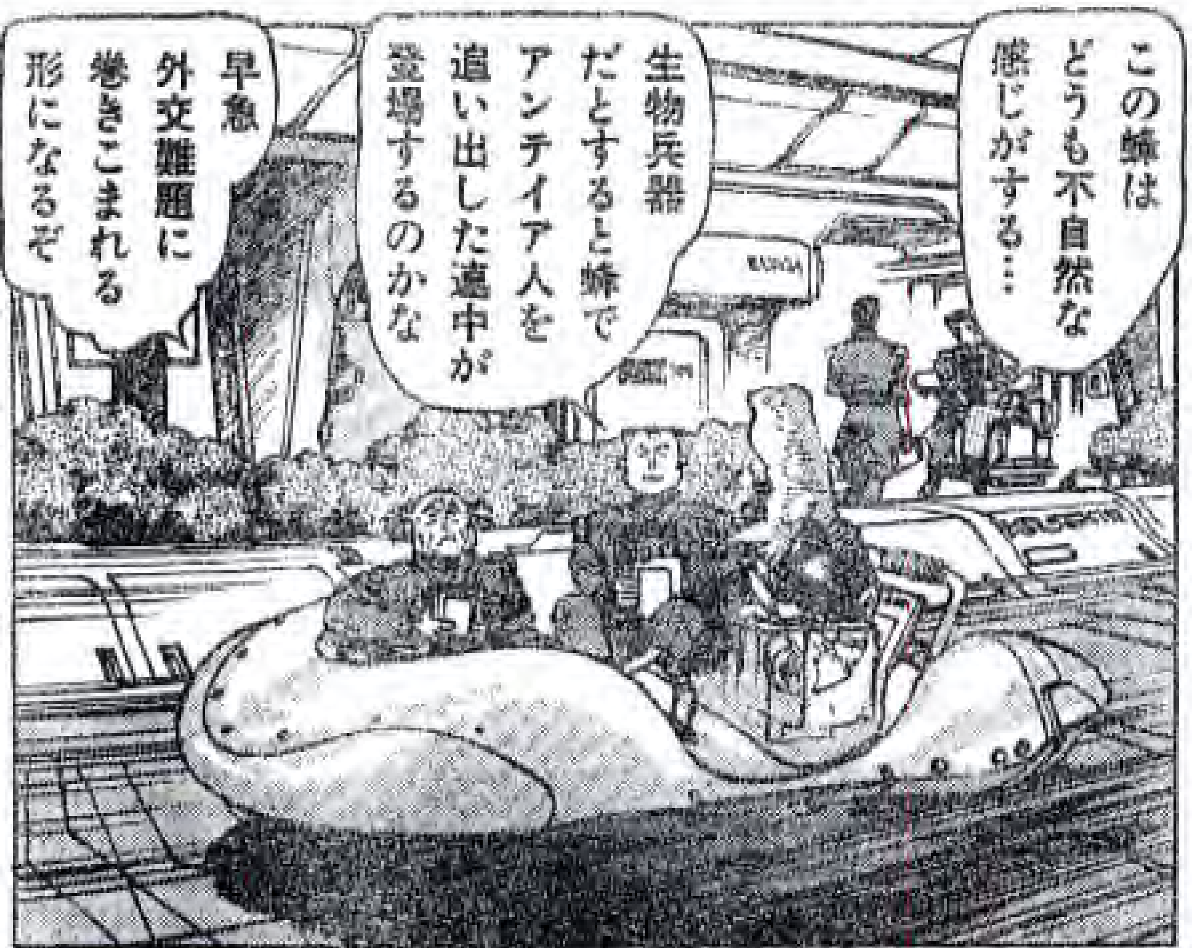
◀Fは土木作業用の大顎を持つ職型。
▶Gは蜂蜜採集を行うハチドリならぬトリバチといった感じの外役型。サイズは5～8センチと小さく、ホバリングも可能な様だ。



ローズはC型に近い情報型で、いわばＭＩ６からＣＩＡのようなヒギスであるらしいと判った。
構造はタイプによって異なるが、共通パーツについて書いておく。眼は5万～8万の個眼が集合した複眼で、集合の分布や程度はさまざまである。翅は4枚で主翅は前翅、縦脈・横脈ｅｔｃの翅脈は設定しないが、はばたきが鳥に近いことから昆虫とはかなり違ったモノであろうと思われる。鳥の羽毛の並びを連想するようなパターンになるかな…？。前跗節のツメは3本で、ハエ同様の肉盤や爪間体がある。感覚は手ざわりで味をみるハエほどでないものの多くの手ざわりを感じるものと思われる。基跗節が大きく跗節は3ツ、腹のハリは実は2枚の外片刃ノコギリのサヤとそのサヤに挟まれたストローの3本の器官から成り、大きく発達した毒嚢が外見上からもよく判る。2枚のノコ刃は交互にスライドして被刺体を切りさき、ストローを伝って毒を注入するのである。このノコ針に関してはスズメバチと同様のモノで、ミツバチのように一度刺したら自分も死ぬ「設置型毒注入装置」とは違う。またこの毒嚢と鋸歯は、脳の命令が無くても反射的に一連の刺す動きを行えるため、首無し死体やハラだけでもヘタにさわると指してくるブービートラップとなる。これは戦闘体の大顎の制御神経系にも同様に見られることで注意が必要である。また、毒嚢の節から見て、注入だけでなく「毒の不気付け」もできるであろうと思われる。
　さてここまではフツーのハチと大して変わりないわけだが、それだけで重力制御システムを利用したりできるはずがない。最大の特徴は「脳」である。これが実によく発達している。さらに凄いのは各個体の脳が発達しているだけでなく、「考える」専門体がいることである。1ツのドームに6匹の考査虫、18匹の副考査虫（考査虫が死亡または除去等で失われた場合に脳細胞が一気に結合をし始め、これにとって換わる予備の虫）がおり、これらが常に接触または準接触している。この6匹のつながりが6ツの血族を共存に導いているのかもしれない。この考査虫の周囲にはフェロモンをより多く分泌できると思われる構造の虫が常にウロウロしており、さまざまな方法で他のヒギスに情報を伝えているようである。ホウセンカ号のスタッフはこの6匹に心霊コンタクトを試みたが、巣の構造、特に中心部が結界状態になっているために感応しなかった。結果の程度で最も重要な位置にあるのは女王なので、考査虫よりも女王が重要視されていることもまず間違いない。

◆残念ながらしばらくお休みです。

11月号(10月9日発売)より再開予定です。お楽しみに!!



もしヒギスが生物兵器だった場合最悪のケースとして「怒って戻ってくる重武装アンテイア人」と「ヒギスを送り込んだ勢力」の板挟みになって戦争に巻きこまれるかもしれない。このまま何もせずこの星にとどまるのかホウセンカ号!?





ゲッベルじいさんはヒギスと敵対し、力で争う場合の対応策を練っていたが、あまり有効そうなものはまだなかった。1匹1匹は大したことがないのだが、アンテイア人が勝てなかったということはヒギスの生産能力や戦略がそう生優しいものではないということだ。じーさんの対応策でまだ可能性のあるのは、1・ヒギスの天敵を研究、作成し大量にばらまき駆除させる。2・ヒギスに効く化学物質または細菌を使う。3・情報系を乗っ取り、全ヒギスを制御下におく。4・小型の熱核兵器か重力兵器で巣をツブし残りはしらみ潰しする。5・自分たちに友好的なヒギスを大量生成し交渉にあてる。または少しずつ入れ換えていく――等のやり方である。各々にハードルやリスクがありいずれも決定的に有効とはいえない…。

従って当面は可能な限りヒギスとは友好的に、あたりさわりなくしていなければならない。



そう外見上ヒギスはホウセンカ号を歓迎しているように見える。が、ホウセンカ号の優れたエンメヘスチームの心霊感応力を持ってしても、ヒギスたちの高速でざわめく思考は読み取れないので確認が取れない。とりあえず攻撃してくるつもりはないようだが――。その頃、クーヒッポス氏のヒギス対策チームのほうも妙な事態に出くわしていた。シュミレーター内のヒギスたちは他の多くの生物同様に、こちらから何かヒギスにとって損失になるような行為をしかけない限り戦闘体制には入らないのだ。しかも、アンテイア人の体組織と同じモノを与えても決して食べようとしない――。アンテイア人肉の成分の何かがヒギスの食用に適さないのだろう。まだ飢餓状態での反応や、成分の測定はできていないので結論ではないが、ヒギスがアンテイア人を主食として攻撃したのではなさそうだ。惑星上の他の小動物や植物や菌は食の対象となっていることがすでに確認されている。アンテイア人はなぜヒギスを攻撃したのか?利害の衝突はいかなる点であったのか?そして星を去るといった最終手段にまで至った理由は?

この時点で有力な説として、ヒギスが何かアンテイア人にとって致命的となるようなタイプの菌あるいは化学物質を、もうどうしようもないぐらい撒き散らしたという考えが上がっている。しかし惑星上の全生物の構造と関係が判るまで確認はとれない。ホウセンカ号のメインブレインは全能力を投入して、アンテイア上の全生物を理解するべく稼働あ始めたおかげで万が一の防衛や、各コントロールをサブブレインや、各部所のクルーが行わなければならなくなった。ひとつ安心できることは、外宇宙知覚班の心霊センサーが遠く離れた空間に、遠ざかるラグビーボール型重力船を発見したことである。つまり恐れるアンテイア人と出くわすまでまだかなり時間があるということだからだ。もちろん、通信を試みているが、心霊返信はなし、亜空間通信箱は届くまで時間がかかる。とりあえずアンテイア人とモメることは当然ないと考えて良さそうだ。



という所で今回はここまで!

さて突然で申し訳ありませんが、作者勝手の都合にて次号から4回ほどお休みを頂きます。リコール運動はしなくても、読者がイヤでも(イヤだと思う読者はこんなトコ読んでないわな…)戻ってきますので御心配無く。ではまたそのうちに再会しましょう。バイバーイはははははは

陳謝のポーズ――→





コミック新世代の血が騒ぐ
月刊ドラゴンマガジン6月号増刊
コミック
ドラゴン
VOL. 4 1993
490YEN
NEURO HARD
~蜂の惑星~
士郎正宗
はいぱーぽりす
MEE
キャプチュード
見田竜介
湯けむり人魚姫
ちばこなみ
やってRUNAWAY
小野敏洋&出渕裕
レインボーゴシップ
69
士貴智志
風の大陸
動物機動体！
神北ハヤト
賑やかな孤独
GO GO WEST
田沼雄一郎
オペラ屋ティンテンドン
くら☆りっさ
ハイパーフォトン
円英智
機神書紀
いづなよしつね
あらいずみるい
スレイヤーズ・リナちゃん
PINUP
待望のスタート！
サイレントメビウス
麻宮騎亜


月刊
コミックドラゴン
毎月9日発売
6
490YEN
〈巻頭カラー〉
天地無用!
魎皇鬼
奥田ひとし
士郎正宗
NEURO HARD
～蜂の惑星～
〈いよいよ最終回!〉
やってRUNAWAY
小野敏洋・出渕裕
〈2大ギャグ新連載〉
ファミリー
美夜川はじめ
クロスポイント
69
STORM TROOPERS OF DEATH
士貴智志
都築和彦
井荻寿一
天王寺きつね
ちばこなみ
神塚ときお
渡辺電機(株)
くら☆りっさ
小本田絵舞
矢野たくみ
たまき あろ
〈スペシャル新連載企画〉
琴ちゃわんのいつも一緒懸命!